

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第185集

東屋敷遺跡

2014

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第185集

ひがし や しき い せき
東 屋 敷 遺 跡

2014

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県豊橋市は、愛知県の東端部に位置しております。今日では工業都市として発展を続けていますが、歴史的にも文化財が多数知られており、古くから繁栄した場所でもあります。

愛知県埋蔵文化財センターでは、平成20～22年度に東三河環状線建設事業に先立つ東屋敷遺跡の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施致しました。その結果、先人の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。

このたび、調査によって検出されました遺構、出土遺物をまとめ、報告書として刊行するにいたしました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め関係諸機関及び関係者の皆様方から多大なご指導とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 加藤高明

例 言

1. 本書は愛知県豊橋市石巻本町字東屋敷に所在する東屋敷遺跡（遺跡番号は790333）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県建設部道路建設課による「道路改良工事（主）東三河環状線」に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は総面積4,420㎡で、平成20年度～平成22年度に実施した。調査期間と担当者は平成20年度が11月～3月で、担当者は鈴木正貴（本センター調査研究専門員）・成瀬友弘（本センター調査研究主事、現愛知県埋蔵文化財調査センター主査）、平成21年度が10月～3月で、担当者は池本正明（本センター調査研究専門員、現主任専門員）・本田英貴（本センター調査研究主事、現愛知県立豊丘高校教諭）、平成22年度が5月～8月で鈴木正貴（本センター調査研究専門員）・永井邦仁（本センター調査研究員主任）である。なお、発掘調査は、平成20年度に株式会社アコード（代理人は中本成一郎・調査補助員は島軒 満・測量技師は鈴木与仁）、平成21年度に株式会社イビソク（代理人は高橋育雄・調査補助員は近藤真人・測量技師は多田和幸）、平成22年度に株式会社波多野組（代理人は澤木智之・調査補助員は小泉信吾・測量技師は尾崎裕司）の協力を得た。
4. 調査に際しては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県建設部・豊橋市教育委員会を初めとし、多くの機関から指導・協力を受けた。
5. 調査区の座標は、国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。表記は世界測地系を用いている。なお、海拔標高はT. P.（東京湾平均海面標高）による。
6. 遺構は以下の分類記号を用い、原則として調査時の表記をそのまま使用している。
SI: 竪穴建物、SB: 掘建柱建物、SK: 土坑、SP: ピット、SD: 溝、SE: 井戸、SX: その他の遺構
7. 本書の編集には、以下の方々にご教示・ご協力を得た。（五十音順・敬称略）
天野暢保・岩原 剛・内田智久・川合 剛・川崎みどり・城ヶ谷和広・中野晴久・贅 元洋・藤澤良祐・村上 昇
8. 本書の編集は池本正明が担当した。執筆は池本のほかに本田英貴（第Ⅰ章）、鬼頭 剛（本センター調査研究主任、第Ⅳ章）らが加わった。
9. 整理作業は、池本正明が阿部裕恵・伊藤あけみ・木下由貴子・山田有美子（本センター整理補助員）の協力を得て実施した。ただし、遺物実測とトレース作業の一部、挿図作製の一部を株式会社 シン技術コンサルに、出土遺物の写真撮影写真工房 遊に、化学分析を株式会社 パレオ・ラボに、デジタル編集は有限会社 アルケアーリサーチに作業委託した。
10. 調査に関する実測図・写真などの資料は本センターが、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。なお、遺物は本書に記載された番号を登録番号とした。

目次

第1章 はじめに

1 経緯と経過	1
2 環境と周辺の遺跡	2

第II章 遺構

1 概要	5
2 10A区・09C区	5
3 09B区	11
4 09A区・09D区	15
5 08区	21
6 10B区・10Ca区	31
7 10Cb区・10D区	35

第III章 遺物

1 概要	39
2 土器・陶磁器・土製品	39
3 石器・石製品	49
4 金属製品	51

第IV章 科学分析

豊橋市北部、東屋敷遺跡における地下層序	53
---------------------------	----

第V章 まとめ

1 主要遺構の変遷	62
2 総括	67

挿図目次

図 1	周辺の遺跡 1:25000	3
図 2	調査区壁面図 1:2000・1:50	6・7
図 3	主要遺構図 1:1000	8
図 4	10A 区 108SI・167SI・168SI・169SI 1:50	10
図 5	09B 区 210SI・302SL・247SI・259SI 1:50	12
図 6	09B 区 178SK・222SK 1:20	14
図 7	09A 区 183SI 1:50	16
図 8	09A 区 044SI・261SI・176SI 1:50	17
図 9	09A 区掘立柱建物 1:100	18・19
図10	08 区北部の竪穴建物 1:100	22
図11	08 区 010SI・401SI 1:50	25
図12	08 区 013SI・014SI・015SI 1:50	26
図13	08 区 004SI・038SI・549SI 1:50	27
図14	08 区 021SI・020SI・019SI 1:50	28
図15	08 区 463SI・478SI 1:50	30
図16	10B 区 078SB 1:100	32
図17	10Ca 区 017SI・10Ca 区 021SI・10Ca 区 041SI 1:50	32
図18	10Ca 区 044SI・10Cb 区 003SI・007SI 1:50	34
図19	溝断面図 1 1:2,000・1:50	36
図20	溝断面図 2 1:50	37
図21	溝断面図 3 1:50	38
図22	出土遺物 1	41
図23	出土遺物 2	43
図24	出土遺物 3	44
図25	出土遺物 4	46
図26	出土遺物 5	48
図27	出土遺物 6	50
図28	出土遺物 7	52
図29	東屋敷遺跡における深堀調査地点	58
図30	地点 1(10A 区)における深堀柱状図	58
図31	地点 2(10A 区)における深堀柱状図	59
図32	地点 3(08 区)における深堀柱状図	59
図33	地点 4(08 区)における深堀柱状図	60
図34	地点 5(10D 区)における深堀柱状図	60
図35	各地点における地層断面写真	61
図36	主要遺構の変遷 1 1:2,000	63
図37	主要遺構の変遷 2 1:2,000	64

図38	周辺の地籍図1	65
図39	周辺の地籍図2	69

表目次

表1	調査進行表	1
表2	東屋敷遺跡における放射性炭素年代測定結果	61

図版目次

図版 1	10A区・09C区上面	1:200	図版 6	10Cb区・10D区上面	1:200
図版 2	09B区上面	1:200	図版 7	10A区下面	1:200
図版 3	09A区・09D区上面	1:200	図版 8	09B区下面	1:200
図版 4	08区上面	1:200	図版 9	08区下面	1:200
図版 5	10B区・10Ca区上面	1:200			

写真図版目次

写真図版 1	遺跡遠景	写真図版 9	09B区全景上層2
写真図版 2	08区全景上層	写真図版10	09B区遺構
写真図版 3	08区上層遺構1	写真図版11	09C・D区
写真図版 4	08区上層遺構2	写真図版12	10A区
写真図版 5	08区全景下面	写真図版13	10C・D区
写真図版 6	09A区	写真図版14	出土遺物1
写真図版 7	09A区遺構	写真図版15	出土遺物2
写真図版 8	09B区全景上層1		



東屋敷遺跡

第 1 章 はじめに

1 経緯と経過

愛知県建設部は東三河地区の主要道路網の整備を図るため、県道東三河環状線の道路改良工事を計画した。この計画路線には多くの遺跡の範囲にかかっており、東屋敷遺跡の一部も道路工事予定地に含まれていた。そのため、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室による有無確認調査を行い、予定地に遺跡が展開することを確認した。

発掘調査は、愛知県教育委員会を通して委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査は 3 期に分けて行った。調査面積総計 4,420㎡のうち、平成 20 年度調査が平成 20 (2008) 年 11 月から平成 21 (2009) 年 3 月まで 1,050㎡、平成 21 年度調査が平成 21 (2009) 年 10 月から平成 22 (2010) 年 3 月まで 2,060㎡、平成 22 年度調査が平成 22 (2010) 年 5 月から 8 月まで 1,310㎡である。工程は表 1 に示した。平成 20 年度調査では段丘崖に面した遺跡の南端を調査し、平成 21 年度調査では調査区を 4 つに分け、南から平成 20 年度調査の調査区の北側を A 区、市道を挟んだ北側を B 区、さらに小道を挟んだ北側を C 区、A 区脇の狭小地を D 区としておこなった。平成 22 年度調査では調査区を 4 つに分け、遺跡の北端を A 区、篋矢神社北側を B 区、東側を北から C 区、D 区としてそれぞれ調査をおこなった。調査区については図版扉に示した。なお、平成 21 年度調査中の平成 22 (2010) 年 1 月 6 日に小学生 2 人の調査体験を受け入れ、また、平成 22 年度調査途中の平成 22 (2010) 年 7 月 10 日には現地説明会を開催し、近隣の人々を中心に約 50 人の参加を得た。

発掘調査は平成 20 年度調査では株式会社アコード、平成 21 年度調査では株式会社イビソク、平成 22 年度調査では株式会社波多野組の支援を得た。調査手順は、除草後に地表面から表土のみをバック・ホウにより除去したのち、国土交通省告示によって定められた平面直角座標第 VII 系 (世界測地系) に準拠した 5 m グリッドを設定した。遺物は原則としてこのグリッドごとに取り上げている。遺構面である黒ボク層および礫交じり粘土層上面まで掘削しながら遺構検出を行い、土坑類は半裁掘削、溝や竪穴建物跡などは土層観察用ベルトを残して掘削し、必要な記録を採取した後に全掘作業をおこなった。遺構の実測は電子平板による測量を実施し、成果品は全てデジタルデータで作成した。写真は 6×7 リバーサルフィルムとデジタルカメラによる撮影を行った。

表 1 調査進行表

平成 20 年度調査	平成 21 年度調査	平成 22 年度調査
平成 21/ 1/ 6 表土掘削開始	平成 21/12/ 8 A 区表土掘削開始	平成 22/ 5/21 C 区表土掘削開始
2/13 1 面目全景撮影	平成 22/ 1/ 7 C 区表土掘削開始	D 区表土掘削開始
2/18 南拡張部表土掘削開始	1/15 A・C 区全景撮影	6/11 C・D 区全景撮影
3/ 5 2 面目全景撮影	1/26 B 区表土掘削開始	6/15 B 区表土掘削開始
拡張部全景撮影	2/24 B 区全景撮影	6/28 A 区表土掘削開始
3/ 9 遠景撮影	3/ 5 調査終了	7/10 地元説明会開催
3/10 拡張部 2 面目 全景撮影		7/22 A・B 区全景撮影
3/16 調査終了		7/28 調査終了

2 環境と周辺の遺跡

まず、周辺の地形を概観する。東屋敷遺跡は東経 137°26'15"、北緯 34°47'22" に位置する。遺跡が所在する豊橋市は、愛知県東端部に所在し、東に県境をなす弓張山脈があり、西には豊川が流れる。東屋敷遺跡が所在する河岸段丘は、神田川と三輪川に挟まれる石巻面と呼ばれる台地上であり、豊橋上位面と同じ中位段丘に相当する。南は三輪川によって牛川面と、西は神田川によって玉川面と画されている。南端部は段丘崖に面し、崖下を三輪川が西流する。遺跡東側には標高 358m をはかる石巻山が所在する。

次に、遺跡周辺の寺社について述べる。調査区が隣接する篋矢神社は、『三河国内神明帳』に記載される「従五位上 野矢天神」のことであろうとされており、その後「篋矢大明神」と称され、明治元(1868)年に現在の篋矢神社に改称されたという。武雷神を祭神とし創立年代は未詳である。また、石巻山には、旧八名郡唯一の式内社である石巻神社が鎮座する。祭神は大己貴命であり、社伝によると建立は孝安天皇の時代とも推古天皇の時代ともいわれる。

遺跡の北西 0.5km に位置する広福寺は臨済宗の寺院である。承安 4 (1174) 年の創立で、初め天台宗であったのが衰退、その後嵩山にある正宗寺の末寺として再興したとされる。初めは西屋敷にあったのが、再興時に中尾に移り、さらに天保 15 (1844) 年に現在の位置に移転したとされている。(佐藤他 1976)

次に、遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

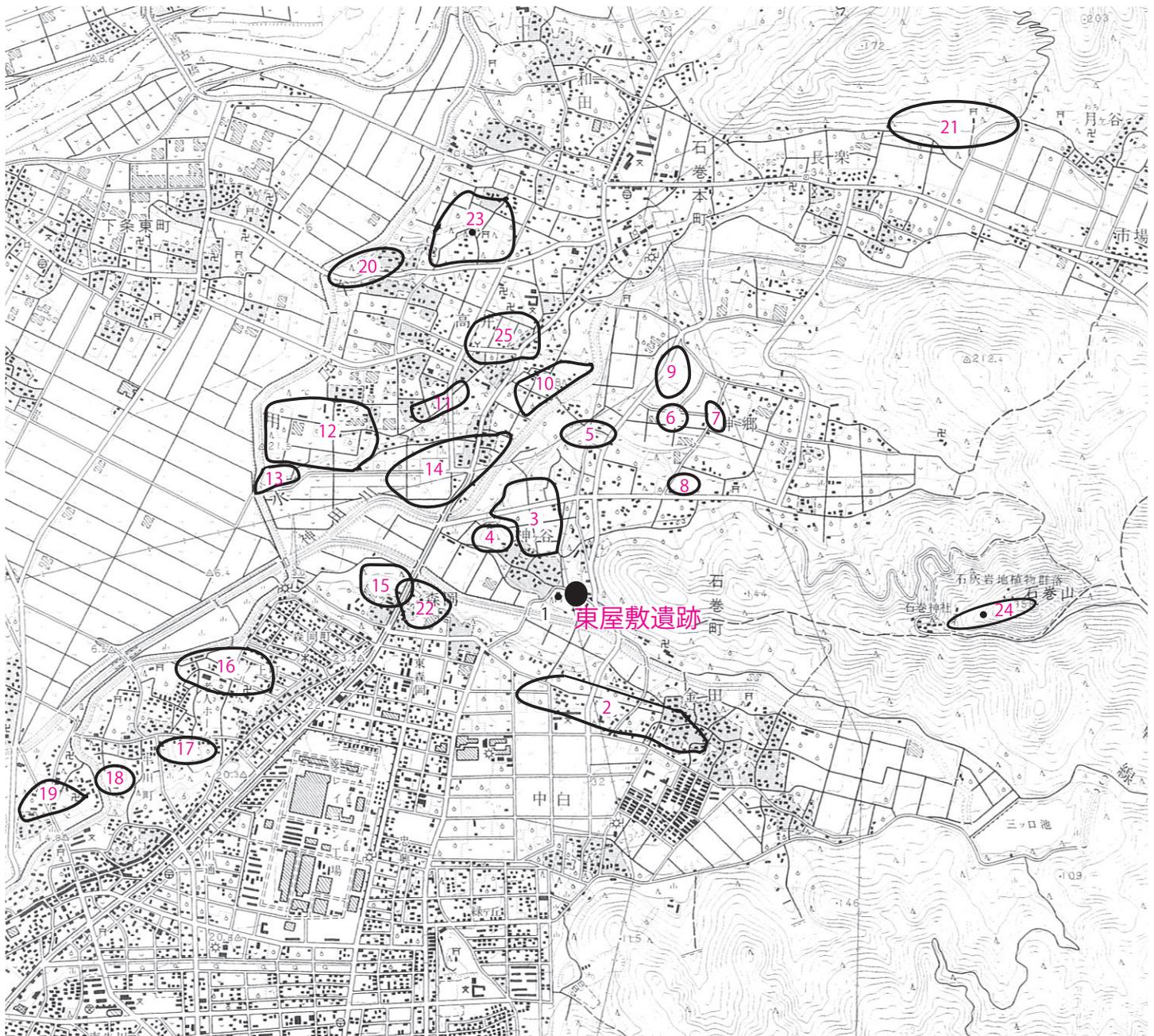
縄文時代では、東屋敷遺跡の北東部に所在する嵩山蛇穴遺跡から草創期の表裏押圧縄文土器や早期の楕円型土器が出土している。同じく北に位置する多り畑遺跡からは、平成 21 年度の調査では早期の楕円型土器が出土している。南東の牛川面の西側段丘縁に近い眼鏡下池北遺跡では、縄文早期の住居址や屋外炉が大量に検出された(岩瀬他 2008)。他にも押型土器が出土した大清水遺跡をはじめとして(木下 1975)、周囲の多数の遺跡で縄文土器が採取されているが、後期から晩期にかけてのものが多数を占める。

弥生時代を中心とした遺跡は豊川左岸および神田川左岸の段丘縁に多くみられる。弥生時代前期には、玉川面の南西端に位置する白石遺跡があり、弥生時代前期に三河地方では唯一の遠賀川系土器が環濠から主体となって出土した集落遺跡として知られている(贅他 1993)。また、高井遺跡は中期末の方形周溝墓や、後期以降古墳時代に至る環濠、竪穴建物、掘立柱建物が検出されており、同時期の拠点集落として知られる(贅他 1996)。東屋敷遺跡の三輪川の対岸に展開する西浦遺跡では弥生時代中期から後期の竪穴建物、中期の土器棺墓が検出されている。(鈴木他 2011)。その他にも、森岡遺跡や浪の上遺跡、西側遺跡をはじめとした弥生中期から古墳時代につづく集落遺跡が牛川面の西側縁辺部に多く広がる。

古墳時代前期には馬越地区を中心に、権現山 1 号墳、勝山 1 号墳、茶白山 1 号墳などの前方後円墳が集中して築かれている。また、玉川段丘に高井古墳群、牛川段丘の三輪川に面した段丘縁に森岡古墳群など方墳を中心とした古墳群が位置する。後期になると、弓針山脈の裾部に群集墳が数多く築かれている。

古墳時代から古代にかけての遺跡は、石巻面では東屋敷の北に白山Ⅱ遺跡や青木Ⅱ遺跡、西屋敷Ⅰ遺跡などが所在する。牛川面の西北段丘縁では前代から続く森岡遺跡や浪の上遺跡、西側遺跡をはじめとした集落遺跡があり、北側では西浦遺跡で古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物、掘立柱建物、古墳時代前期の方形周溝墓が断絶時期を含みながらも継続して検出されている。玉川面に所在する西砂原遺跡では須恵器や墨書土器が採集されている。

中世には、遺跡周辺には神谷御厨が、前上野介範信入道から寄進され、仁安 3 (1168) 年に建立さ



国土地理院 1/2.5 万地形図「豊橋」を改変

- | | | | |
|-------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 筈矢神社 | 2. 西浦遺跡 | 3. 神ヶ谷遺跡 | 4. 石神遺跡 |
| 5. 多り畑遺跡 | 6. 青木Ⅱ遺跡 | 7. 西屋敷Ⅰ遺跡 | 8. 馬場遺跡 |
| 9. 白山Ⅰ・Ⅱ遺跡 | 10. 東下地遺跡 | 11. 大清水遺跡 | 12. 高井遺跡 |
| 13. 白石遺跡 | 14. 西砂原遺跡 | 15. 森岡遺跡 | 16. 浪ノ上遺跡 |
| 17. 眼鏡下池北遺跡 | 18. 東側遺跡 | 19. 西側遺跡 | 20. 高井古墳群 |
| 21. 瀬戸古墳群 | 22. 森岡古墳群 | 23. 高井城址 | 24. 石巻山城址 |
| 25. 野添遺跡 | | | |

図1 周辺の遺跡 1:25,000

れたとされている(豊橋市教育委員会 1973)。遺跡としては、中世から近世を中心とした集落である神ヶ谷遺跡があり(住吉他 2002)、周辺にも長大な溝が確認され豪族の居館の可能性のある白山Ⅰ遺跡や、豪族屋敷と推定される土塁が残る馬場遺跡などが石巻面に所在する。牛川面では遺跡数が増加し、西浦遺跡などの集落の他、西側遺跡では多くの地下式壙が検出されて注目される(小林 2006)。また、中世の墓域と想定される西側古墓群では12～15世紀の塚墓、土壙墓、集石墓が確認されている。(芳賀他 2003)

中世城館としては、高井主膳正の居城と言われる石巻山城や高井城が所在したとされる。

(本田英貴)

参考・引用文献

- 豊橋市史編纂委員 1973『豊橋市 第1巻』
木下克己 1975『八名郡の先史遺跡』豊橋石巻地区文化財保存会
佐藤康一 1976『神ヶ谷郷土史』神ヶ谷郷土史編集委員会
贄元洋他 1993『白石遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第15集
贄元洋他 1996『高井遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第26集
住吉政浩他 2002『日南坂1号墳・神ヶ谷遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第70集
北村和弘他 1991『森岡遺跡・淡洲神社北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第22集
芳賀陽他 2003『西側古墓群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第76集
岩原剛他 2005『西側遺跡Ⅰ』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第82集
小林久彦 2006『西側遺跡Ⅱ』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第84集
岩瀬彰利他 2008『眼鏡下池北遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第96集
芳賀陽他 2009『浪の上遺跡Ⅰ』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第100集
芳賀陽他 2010『浪の上遺跡Ⅱ』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第112集
鈴木正貴他 2011『西浦遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第165集



第II章 遺構

1 概要

東屋敷遺跡は豊橋市石巻本町字東屋敷に所在している。調査区は総面積 4,420㎡となる。調査原因が道路建設であることから、調査区の形状は最南端の 08 区南側から最北端の 10A 区の北側までが約 250 m となり、細長い形状となっている。現在の標高は最南端の 08 区南側が 26.3 m、最北端の 10A 区の北端が 26.2 m と、ほぼ平坦となっている。

調査区は調査開始直前には更地となっていた。しかし、用地買収以前は宅地や畑地として様々な土地利用されていたらしい。こうした関係からか、遺構面は後述する E 層に到達するような削平を受けている場合も多い。特に 08 区や 09B 区などは、調査区中に大小の攪乱坑が存在しており、遺構の残存状況は良好とは言えない。

調査区の基本層序は、大きく 5 層に区分できる (図 2)。まず、A 層はいわゆる表土層で、調査開始前まで使用されていた畑地の耕作土などで占められる。B 層は暗褐色系のシルト層で、10B 区のみで確認できる。近世頃の整地に伴うもので、上面で遺構を検出でき、第 1 面の遺構面としてこれを捉えた。C 層も暗褐色系のシルト層である。流失等により残存しない部分も存在するが、基本的には調査区全域を覆う。いわゆる遺物包含層で、弥生時代～中近世の土器などを含む。D 層も黒褐色系のシルト層で、やはり調査区全域を覆うものと考えられるが、ほとんどの部分が流失ないし削平されて残存しない。上部が遺構検出面となり、第 2 面としてこれを捉えた。E 層は暗褐色系のシルト層である。上部で遺構が検出でき、これを第 3 面としたが、一部は D 層の上層で確認できなかった第 2 面の遺構が含まれている可能性も否定できない。

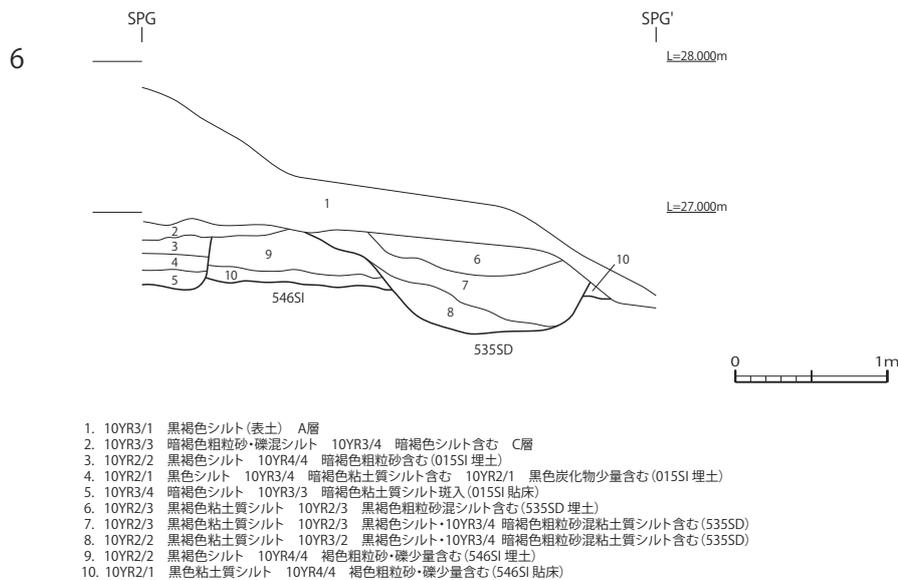
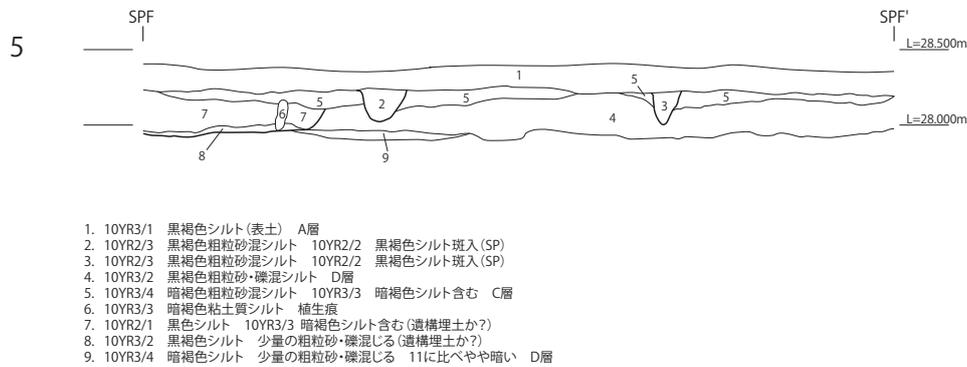
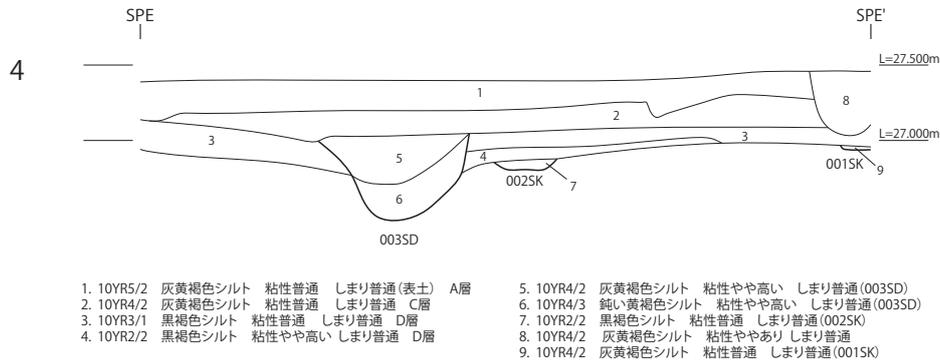
第 3 面を覆い上面が第 2 面の検出面となる D 層も単一層でない可能性が高い。08 区では、第 2 面と第 3 面で後述する時期区分による B 期 (弥生時代～古墳時代前期) の遺構が確認されている。このため、D 層は弥生時代の堆積物と考えられる。一方、10A 区や 09B 区では、B 期以前の遺物がほとんど確認できないことから、D 層や第 3 面の遺構は C 期 (古墳時代終末期～奈良・平安時代) 以降に属するものと考えられる。

以下、北側の調査区から順に検出できた主要遺構を報告する。ここで報告するほとんどの遺構は上面 (第 1 面・第 2 面) から検出されたもので、下面 (第 3 面) で検出した遺構のみ本文中にこれを明記している。遺構番号は調査時のものを基本的に踏襲した。なお、番号の重複をさけるため、調査区名を付けた。時期別の変遷は第 V 章で整理している。時期・性格が不明確な遺構は、本書に添付されている CD-ROM に格納する遺構計測一覧 (添付データ 1) を参照とする。

2 10A 区・09C 区 (図版 1・7)

10A 区は今回の調査区のうち最も北側、09C 区は 10A 区の南側に接する。なお、09B 区が道路を挟み南側に位置する。

09A 区では遺構が比較的密集している。09C 区は中央に溝状の攪乱が伸びるなど、遺構の残存状況は良好とは言えず、性格が不鮮明な土坑数基が確認されたにすぎない。遺構検出面の標高は、10A 区が 26.5 m、09C 区が 26.6 m とほぼ平坦となる。



Y=24,800

Y=24,900

X= -134,100

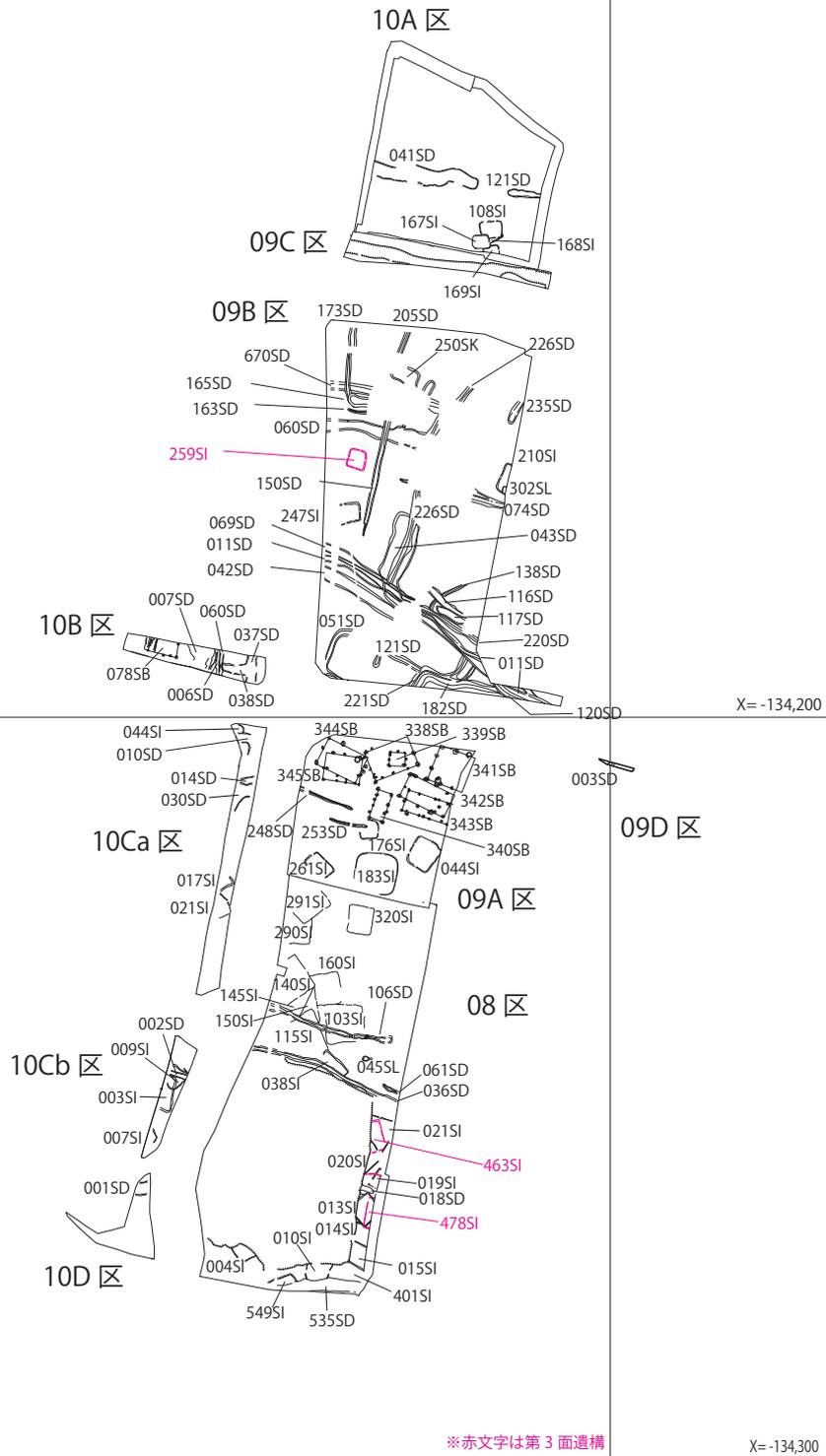


図3 主要遺構図 1:1,000

D層は10A区の北側で残存しており、この部分からは第3面の遺構も確認できたが（下面）、10A区南側～09C区ではこれが確認できず、第1面～第3面を同一面で捉えた（上面）。なお、下面で検出した遺構については本文中に明記し、未記入を上面とする。

・10A区108SI（図4）

調査区南部で確認できた。168SIを切り、167SIに切られる。長辺3.1m、短辺2.2m、検出面からの深さは0.1mで、平面形は隅丸長方形を呈する。支柱穴は特定に至っていない。基底部には深さ0.5～0.3mの掘方に床を貼った状況が確認できる。支柱穴は233SP・225SPの2か所を確認した。東壁と北壁の一部には壁溝も検出されている。出土遺物は227SPから得られた205を図示した。

・10A区167SI（図4）

調査区南部で確認できた。108SI・169SI・168SIを切る。長辺2.4m、短辺1.8m、検出面からの深さは0.1mと小型で、平面形はやや歪む隅丸長方形を呈する。ここでは竪穴建物として報告する。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・10A区168SI（図4）

調査区南部で確認できた。108SI・167SIに切られる。南壁の一部を検出したのみで、平面形・規模は不明。検出面からの深さは0.1mをはかる。ここでは竪穴建物として報告するが、支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・10A区169SI（図4）

調査区南部で確認できた。167SIに切れ、南側は調査区外となる。確認できた一辺は2.4m、検出面からの深さは0.2mをはかる。深さ0.1m程度の掘方に床を貼った状況が確認できる。008SKは北東側の支柱穴かもしれない。出土遺物は確認されなかった。

・10A区021SK

調査区東部で確認できた。長径1.2m、短径1.1m、検出面からの深さは0.4mをはかる。平面形は隅丸長方形を呈する。出土遺物は197を図示した。

・10A区036SK

調査区西部で確認できた。長径0.3m、短径0.2m、検出面からの深さは0.1mをはかる。平面形はやや歪む楕円形を呈する。出土遺物は198を図示した。

・10A区061SK

調査区中央部で確認できた。長径0.3m、短径0.2m、検出面からの深さは0.1mをはかる。平面形はやや歪む楕円形を呈する。出土遺物は199を図示した。

・10A区082SK

調査区中央部で確認できた。直径0.2m、検出面からの深さは0.2mをはかる。平面形は円形を呈する。出土遺物は200を図示した。

・10A区105SK

調査区東部で確認できた。長径0.9m、短径0.4m、検出面からの深さは0.1mをはかる。平面形はやや歪む楕円形を呈する。出土遺物は201～203を図示したが、この他にB～C期に属する土器片が若干ある。

・10A区106SK

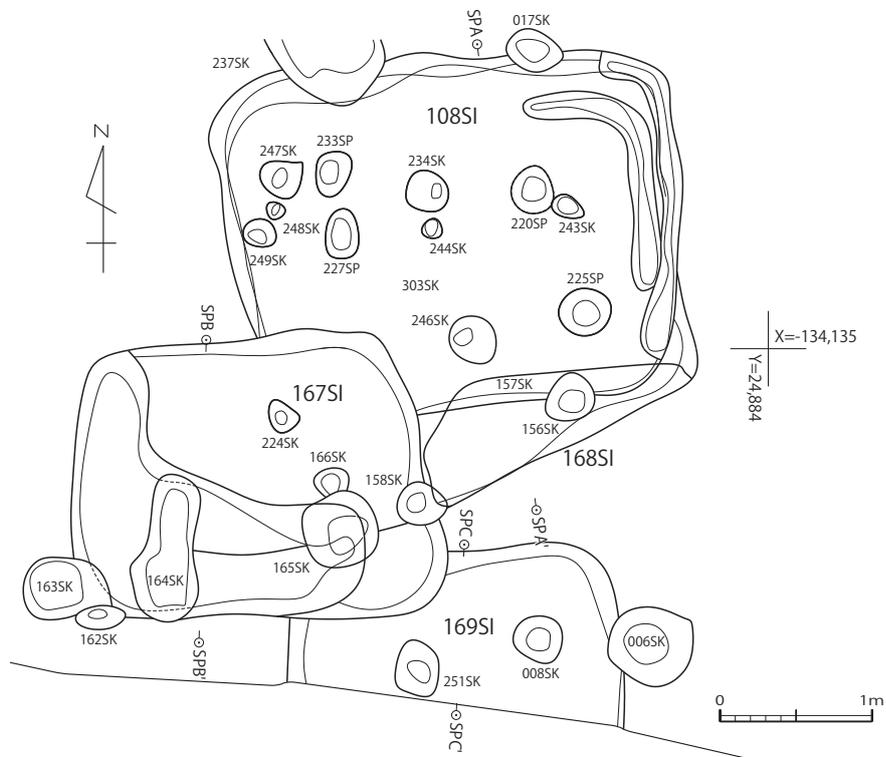
調査区東部で確認できた。長径0.5m、短径0.4m、検出面からの深さは0.2mをはかる。平面形は楕円形を呈する。出土遺物は204を図示した。

・10A区 041SD

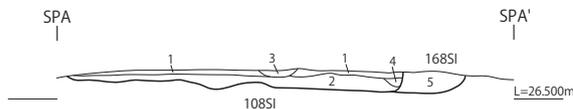
調査区中央部で確認できた。全長 14.0 mを検出し、東側が調査区外となる。幅は 0.2 mで、検出面からの深さは 0.1 mをはかる。主軸は N-97°-E。出土遺物は確認されなかった。

・10A区 121SD (図 19)

調査区東部で確認できた。全長 4.4 mを検出し、東側が調査区外となる。幅は 0.9 mで、検出面からの深さは 0.1 mをはかる。主軸は N-92°-E。出土遺物は確認されなかった。

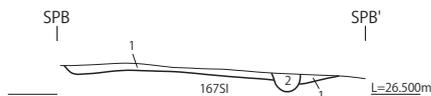


10A区 108SI



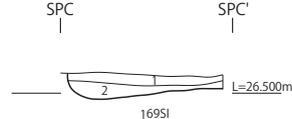
1. 10YR2/1 黒色 砂質シルト 径0.5cmの中礫を若干含む(108SI埋土)
2. 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 10YR4/1 褐灰色粘質シルトを若干含む、径0.5cmの中礫を若干含む(108SI掘形)
3. 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト
4. 10YR1.7/1 黒色 砂質シルト(108SI埋土)
5. 10YR3/1 黒褐色 砂質シルト(168SI埋土)

10A区 167SI



1. 10YR3/1黒褐色 砂質シルト 径0.5~1cmの中礫を若干含む(167SI掘形か)
2. 10YR2/1黒色 砂質シルト 径0.2~0.4cmの細礫を若干含む

10A区 169SI



1. 10YR3/1黒褐色 砂質シルト 径5cmの中礫を若干含む(169SI埋土)
2. 10YR2/2黒褐色 砂質シルト 径5cmの中礫を若干含む(169SI掘形)

図4 10A区 108SI・167SI・168SI・169SI 1:50

3 09B区 (図版2・8)

09C区の道路を挟んだ南側に位置する。比較的大きな調査区だが、大規模な攪乱坑が点在し、遺構の残存状況は良好とは言えない。特に南側に溝が集中して確認されているのが特徴となる。遺構検出面の標高は南側で27.6m、北側で27.0mとなる。

D層は北側でわずかに残存し、この部分からは第3面の遺構も分離されているが(下面)、これが確認できない部分では第1面～第3面を同一面で捉えた(上面)。なお、下面で検出した遺構については本文中に明記し、未記入は上面とする。

・09B区210SI (図5)

調査区北東部で確認できた。302SLに切られる。東側のほとんどは調査区外だが、西側の一边は4.0mをはかる。検出面からの深さは0.1m。244SKは北西側の支柱穴かもしれない。出土遺物は確認されなかった。

・09B区247SI (図5)

調査区西部で確認できた。西壁が攪乱により消滅する。検出できた一边は短辺で2.7m、検出面からの深さは0.2mをはかる。平面形は隅丸長方形を呈するのかわ。253SK・254SKが北西・南東の支柱穴か。南側と北側の一部には壁溝も検出できた。出土遺物は確認されなかった。

・09B区259SI (図5)

調査区北西部の下面で確認できた。長辺2.6m、短辺2.5m、検出面からの深さは0.1mをはかる。平面形は隅丸長方形を呈する。260SKは南東側の支柱穴かもしれない。出土遺物は確認されなかった。

・09B区063SK

調査区北部で確認できた。253SDに切られる。長径0.8m、短径0.7mで、検出面からの深さは0.1mをはかる。平面形は楕円形を呈する。出土遺物は152を図示した。

・09B区067SK

調査区東部で確認できた。長径0.5m、短径0.4m、検出面からの深さは0.4mをはかる。平面形は楕円形を呈する。出土遺物は153を図示した。

・09B区111SK

調査区南部で確認できた。長径1.2m、短径0.9m、検出面からの深さは0.4mをはかる。平面形はやや歪む菱形を呈する。出土遺物は154の他、時期不明の瓦片が若干得られた。

・09B区178SK (図6)

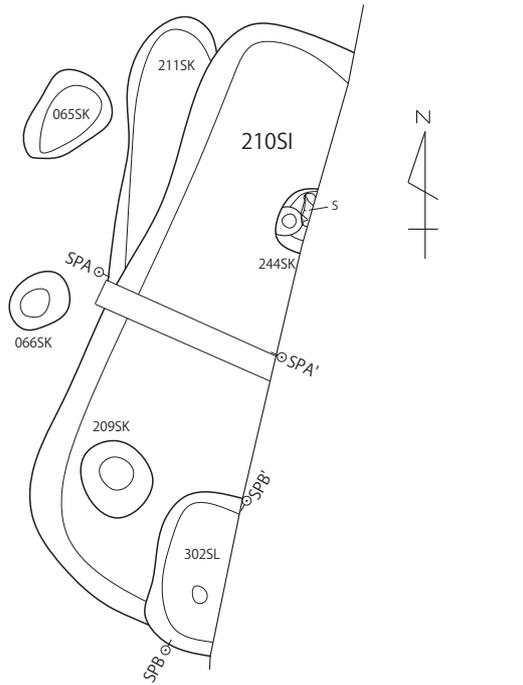
調査区南部で確認できた。182SDを切る。直径0.7m、検出面からの深さは0.2mをはかる。平面形は円形を呈する。近世の大型甕(158)を埋めた土坑。出土遺物は155～160を図示した。

・09B区214SK

調査区西部で確認できた。南側を060SDに切れ、北側が攪乱により消滅するため形状不明。検出面からの深さは0.2mをはかる。出土遺物は161を図示した。

・09B区222SK (図6)

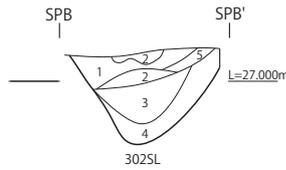
調査区西部で確認できた。214SKを切る。残存する一边は0.4m、検出面からの深さは0.2mをはかる。平面形は円形を呈する小土坑と考えられるが、北側が攪乱により消滅する。多量の遺物が出土した土坑で、162～168を図示した。なお、埋土の一部を水洗選別しているが、特記すべき成果は得られていない。結果は本書添付のCD-ROMに収納している。



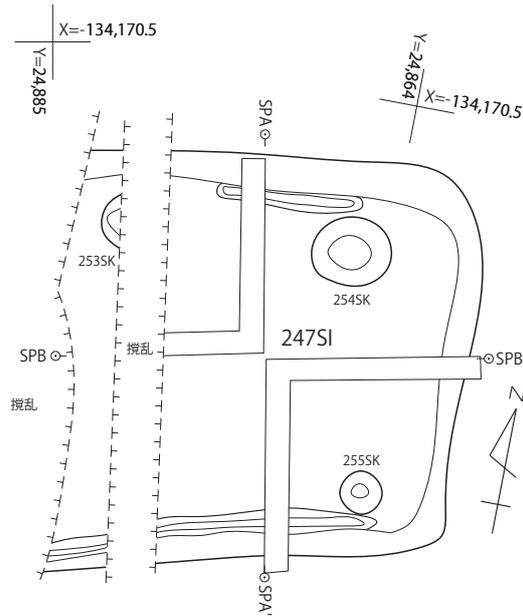
09B区 210SI・302SL



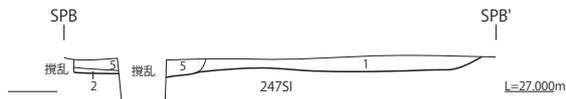
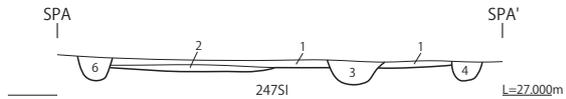
1. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや低い しまり普通 (210SI)



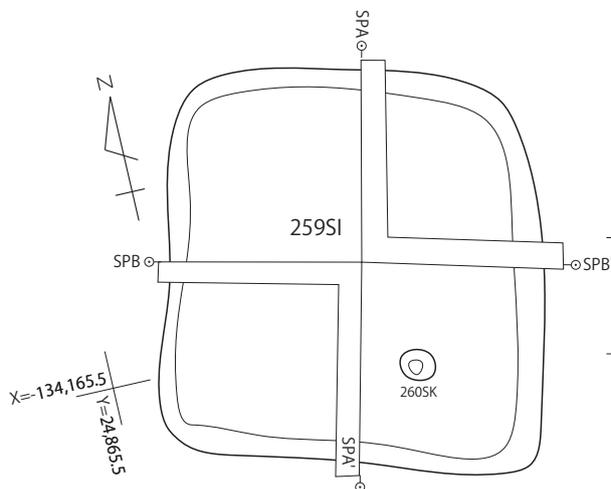
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 焼土含む 粘性低い しまり堅い (302SL)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性低い しまり堅い (302SL)
3. 2.5YR4/2 明赤褐色シルト 焼土含む 粘性やや低い しまり堅い (302SL)
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性低い しまり堅い (302SL)
5. 5YR3/1 黒褐色シルト 粘性低い しまりやや悪い (302SL)



09B区 247SI



1. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや低い しまり普通 (247SI 堀形)
2. 10YR5/4 鈍い黄褐色シルト 粘性低い しまり普通 (247SI 堀形か)
3. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性低い しまり普通
4. 10YR4/1 黒褐色シルト 粘性低い しまり普通 (247SI 周溝)
5. 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性低い しまり普通
6. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性普通 しまり普通 (247SI 周溝)



09B区 259SI



1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性低い しまり堅い (259SI 堀形)

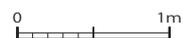


図5 09B区 210SI・302SL・247SI・259SI 1:50

・09B区 302SL (図5)

調査区北東部で確認できた。201SIを切る。東側が調査区外となり、平面形は不明。検出面からの深さは0.3mをはかる。埋土上部に焼土が含まれ、201SIもしくは、床面がほぼ削平された別の竪穴建物に伴う炉等が攪乱された土坑である可能性が高い。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 011SD (図20)

調査区南部で確認できた。182SDを切り、043SD・120SDに切られ、特に東側は120SDとほぼ重複する。全長33.0mを検出し、東西ともに端部が調査区外となる。東側を120SDに切られて不明確だが、幅は0.4mで検出面からの深さは0.1mをはかる。主軸はN-127°-Eだが、やや蛇行する。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 042SD (図20)

調査区南部で確認できた。西端は調査区外、東端は攪乱により消滅する。全長11.0mを検出し、幅は1.7mで検出面からの深さは0.2mをはかる。主軸はN-121°-E。出土遺物は図示していないが、D期に属する陶磁器片が若干得られた。

・09B区 043SD

調査区中央部で確認できた。011SD・069SDを切り、226SDに切られる。調査区中央部で屈曲して南東側に伸びるが、南端は攪乱により消滅する。残存端部を観察すると、この部分でさらに東へ屈曲しているのかもしれない。幅は屈曲前が3.5m、屈曲後が2.1mとなる。検出面からの深さは0.2mをはかる。主軸は起点からがN-23°-E、屈曲後はN-163°-E。出土遺物は169・170を図示した。

・09B区 051SD

調査区南部で確認できた。端部が攪乱を受けるため明らかではないが、東西方向から南北方向に屈曲して021SDに連続するのかわ。幅は0.7mで、検出面からの深さは0.1mをはかる。主軸は東西方向がN-118°-E、南北方向がN-24°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 060SD (図19)

調査区西部で確認できた。150SDに切られる。全長13.0mを検出し、西端は調査区外、東端は攪乱により消滅する。幅は1.7mで、検出面からの深さは0.3mをはかる。主軸は西壁付近がN-89°-E、屈曲してN-116°-Eとなる。出土遺物は171を図示した。

・09B区 069SD (図20)

調査区南部で確認できた。043SD・226SDに切られる。全長21.1mを検出し、西側が調査区外となる。幅は0.5mで、検出面からの深さは0.1mをはかる。主軸はN-121°-E。出土遺物は図示していないが、D期に属する陶磁器片をわずかに得た。

・09B区 074SD (図19)

調査区東部で確認できた。東端が調査区外、西端は攪乱により消滅する。全長4.4mを検出し、幅は1.0mで、検出面からの深さは0.2mをはかる。主軸はN-109°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 120SD (図20)

調査区南部で確認できた。011SD・301SD・182SDを切る。全長8.0mを検出し、東端を攪乱により消滅され、西側は調査区外となる。検出面からの深さも残部では0.1m以下となる。主軸はN-130°-E。出土遺物は172～179を図示した。

・09B区 121SD (図20)

調査区南部で確認できた。西側は攪乱により消滅し、東側は221SDに切られる。全長4.2mを検出し、幅は0.9m。検出面からの深さは0.2mをはかる。攪乱により判断できないが、051SDと連続するのかわ。主軸はN-116°-E。出土遺物は180を図示した。

・09B区 150SD (図 19)

調査区西部で確認できた。060SDを切る。北端は攪乱により消滅する。全長 15.9 mを検出し、幅は 0.7 mだが、南端付近では 0.2 mとなる。検出面からの深さは 0.1 mをはかる。主軸は N-12°-E。出土遺物は図示していないが、D期の土師器片が1点のみ得られた。

・09B区 173SD (図 19)

調査区北部で確認できた。167SDを切り、165SDに切られる。全長 9.1 mを検出し、北端は調査区外となる。幅は 0.7 mで、検出面からの深さは 0.2 mをはかる。主軸は N-4°-Eだが、南端はわずかに東へ屈曲する。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 179SD

調査区南部で確認できた。北側が攪乱により消滅する。121SD・051SDと類似する。全長 1.7 mを検出し、幅は 0.7 mで、検出面からの深さは 0.3 mをはかる。主軸は N-16°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 182SD (図 20)

調査区南部で確認できた。221SDを切り、120SDに切られる。ほぼ直角に屈曲する溝で、221SDと類似する軌跡をたどる。全長 11.2 mを検出し、南側が調査区外、東側が 120SDにより削平される。幅は 0.7 mで、検出面からの深さは 0.8 mをはかる。主軸は南北が N-35°-E、東西が N-97°-E。出土遺物は図示していないが、D期に属する陶磁器片と時期不明の瓦片などを得た。

・09B区 220SD (図 20)

調査区南部で確認できた。全長 10.0 mを検出し、東側が調査区外となる。幅は 0.9 mで、検出面からの深さは 0.1 mをはかる。主軸は N-123°-E。出土遺物は確認されなかった。

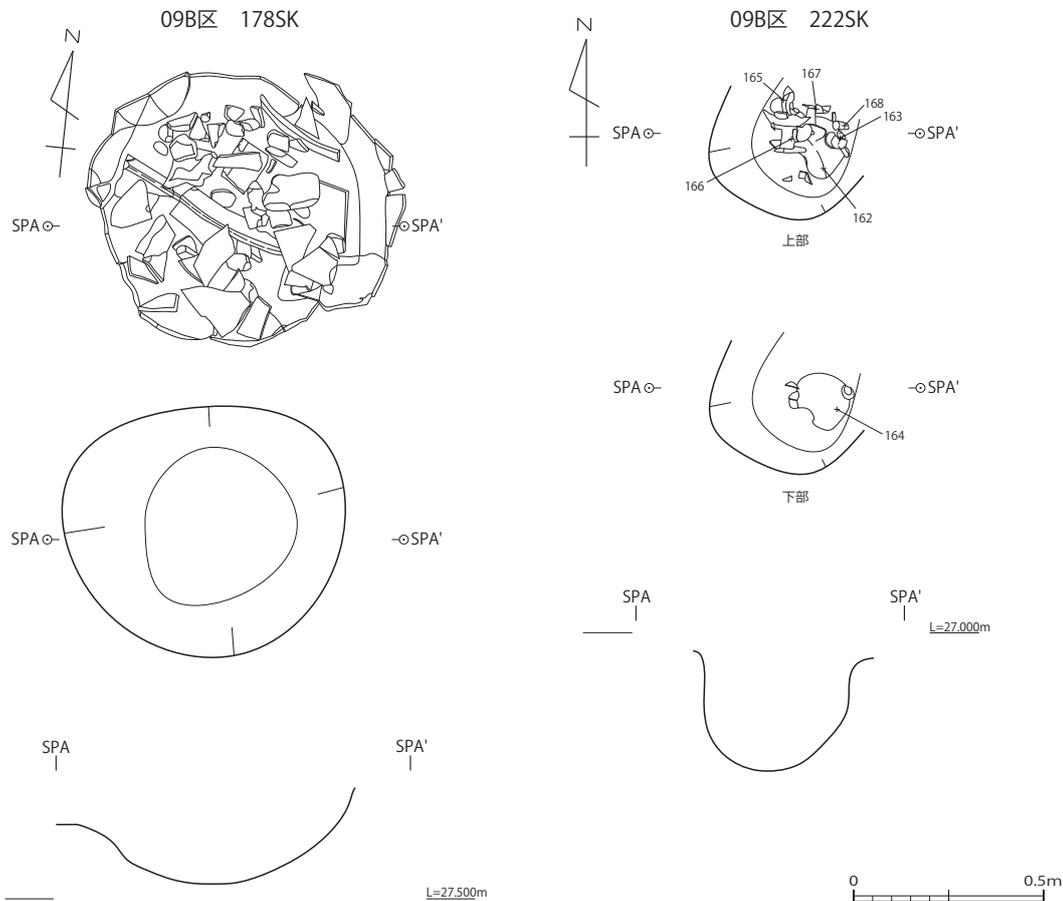


図 6 09B区 178SK・222SK 1:20

・09B区 221SD (図20)

調査区南部で確認できた。182SDに切られる。全長5.9mを検出し、182SDと類似する軌跡をとる溝で、検出できた東西方向の中程で300SD・301SDと分岐する。幅は0.8mで、検出面からの深さは0.6mをはかる。主軸は南北がN-35°-E、東西がN-109°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 226SD (図19)

調査区北部で確認できた。043SD・069SDを切る。南北が攪乱により消滅するが、全長2.5mを検出した。幅は0.8mで、検出面からの深さは0.3mをはかる。主軸はN-39°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 235SD

調査区北部で確認できた。063SKを切る。全長3.3mを検出し、北側が攪乱により消滅する。幅は1.1mをはかる。主軸はN-31°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 300SD

調査区南部で確認できた。南端は221SDから分岐し、北側は120SDに切られる。全長2.0mを検出し、幅は1.2m。検出面からの深さは0.2mをはかる。主軸はN-36°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09B区 301SD

調査区南部で確認できた。南端は221SDから分岐し、北側は120SDに切られる。全長2.6mを検出し、幅は0.7m。検出面からの深さは0.4mをはかる。主軸はN-28°-E。出土遺物は確認されなかった。

4 09A区・09D区 (図版3)

09A区は09B区の道路を挟んで南側に該当する。09D区は今回の調査区のうち最も東側に位置する。遺構検出面の標高は、09A区が中央で28.0m、09D区中央で27.8mとなる。09A区ではD層が確認できず、結果的には第1面～第3面を同一面で捉えた。一方、09D区ではD層が残存し、上面・下面の遺構が区分できるが、調査区がフェンス設置の不可能なほど狭小のため、安全上の理由から短期間の調査とせざるを得なかったため、E層の上面で全ての遺構を検出している。

・09A区 044SI (図8)

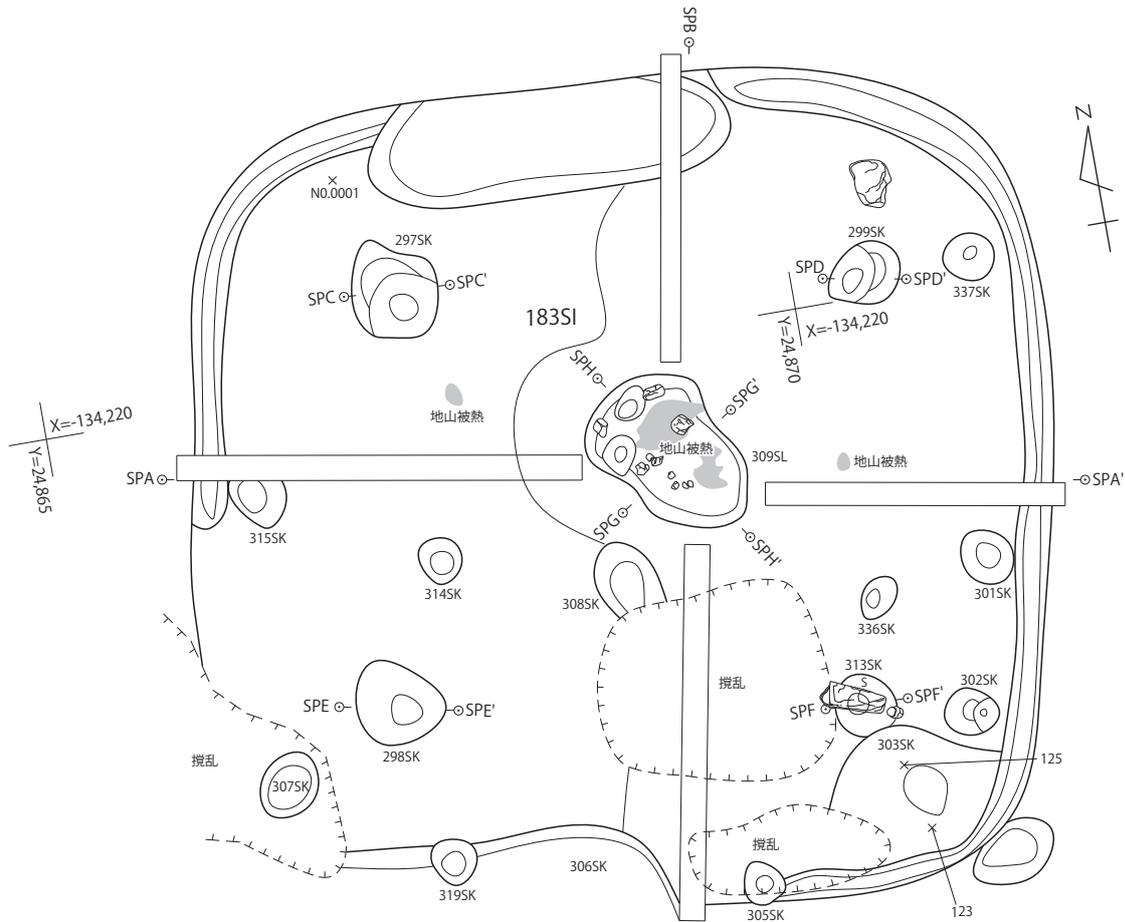
調査区東部で確認できた。長辺4.1m、短辺3.7m、検出面からの深さは0.1mをはかる。平面形は隅丸長方形を呈する。北側の一部に壁溝が検出できるが、支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 176SI (図8)

調査区中央部で確認できた。331SKを切り、253SDに切られる。長辺2.5m、短辺2.6m、検出面からの深さは0.1mをはかる。平面形はやや歪む隅丸正方形を呈する。やや小型だが竪穴建物として報告する。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 183SI (図7)

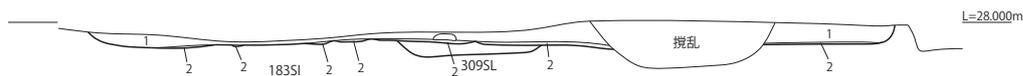
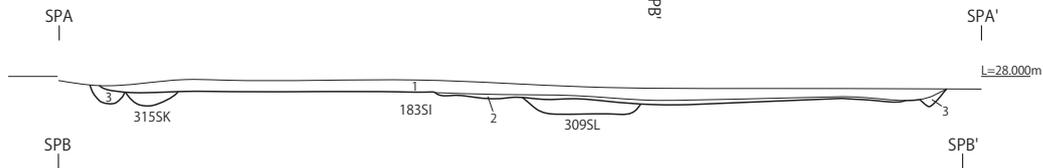
調査区南部で確認できた。306SKに切られる。長辺5.7m、短辺5.5m、検出面からの深さは0.1mをはかる。平面形は隅丸正方形を呈する大型の竪穴建物で、297SK・299SK・313SK・298SKは支柱穴だろう。壁溝が西側の一部を除きほぼ全周する。中央のやや東よりには炉と考えられる09A区309SLが存在する。規模は長辺1.2m、短辺0.7m、深さ0.1m。10点の拳大礫が据えられ、底面には2か所に抜き取り痕とも考えられる窪みも確認できる。主軸はN-147°-Eで、183SIの軸線とはやや異にする。平面形は楕円形。また、南東隅には303SKが存在する。出土遺物は117～119を図示するが、298SKからは122、303SKからは123～125、313SKからは126を図示した。



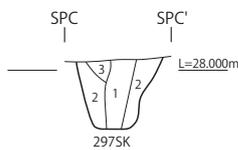
09A区 183SI



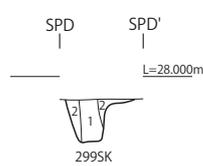
※トーンは地山被熱を表現する



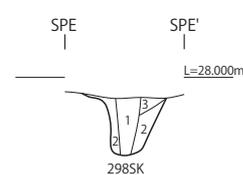
- 10YR3/3 黒褐色シルト 粘性普通 しまりやや低い(183SI埋土)
- 10YR5/3 鈍い黄褐色シルト 貼床 粘性普通 しまりやや悪い(183SI埋土)
- 10YR3/3 黒褐色シルト 粘性普通 しまりやや低い(183SI周溝)



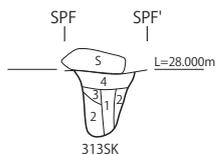
- 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性なし しまり普通 (297SK)
- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり普通 (297SK)
黄褐色ブロックの混入が多い(297SK)
- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり普通 (297SK)



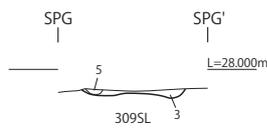
- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり普通 (299SK)
- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり普通 (299SK)
黄褐色ブロックの混入が多い(299SK)



- 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性なし しまり普通 (298SK)
- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり普通 (298SK)
黄褐色ブロックの混入が多い(298SK)
- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり普通 (298SK)



- 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性なし しまり普通 (313SK)
- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり普通
黄褐色ブロックの混入が多い(313SK)
- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり普通 (313SK)
- 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや高い しまり普通 (313SK)



- 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性やや低い しまり堅い 黄褐色ブロック混入 (309SL)
- 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性やや低い しまり堅い 黄褐色ブロックが非常に多い(309SL)
- 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性普通 しまり普通 混入なし(309SL)
- 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性普通 しまり堅い 黄褐色ブロックわずかに混入(309SL)
- 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性やや低い しまり堅い 黄褐色ブロック大量(309SL)

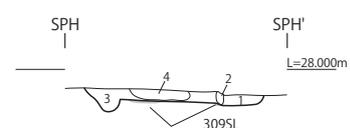


図7 09A区 183SI 1:50

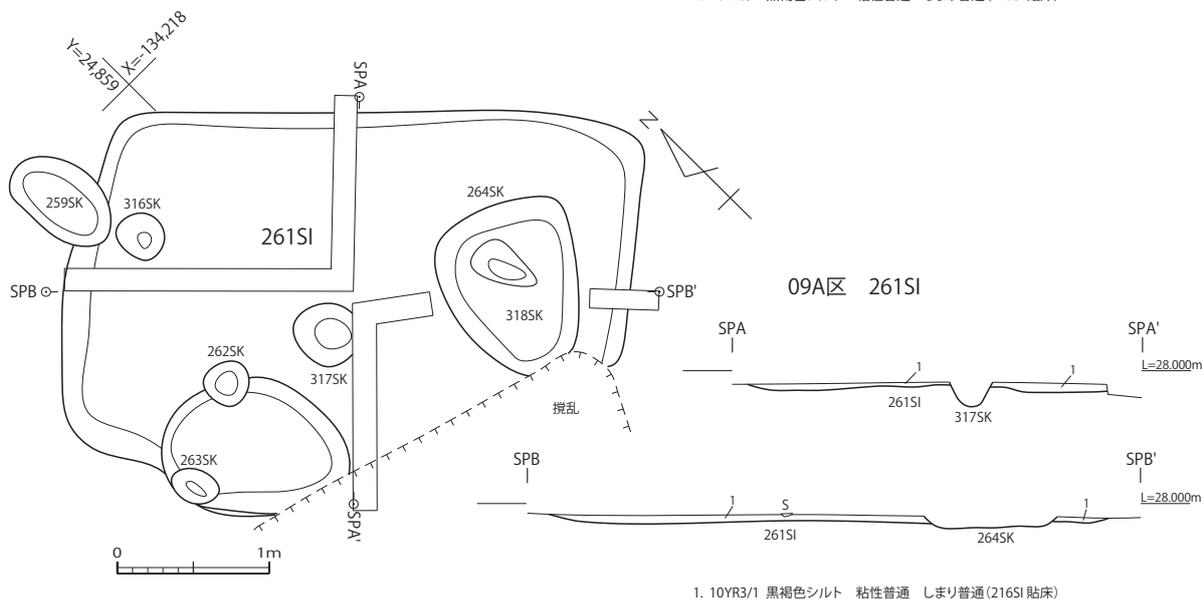
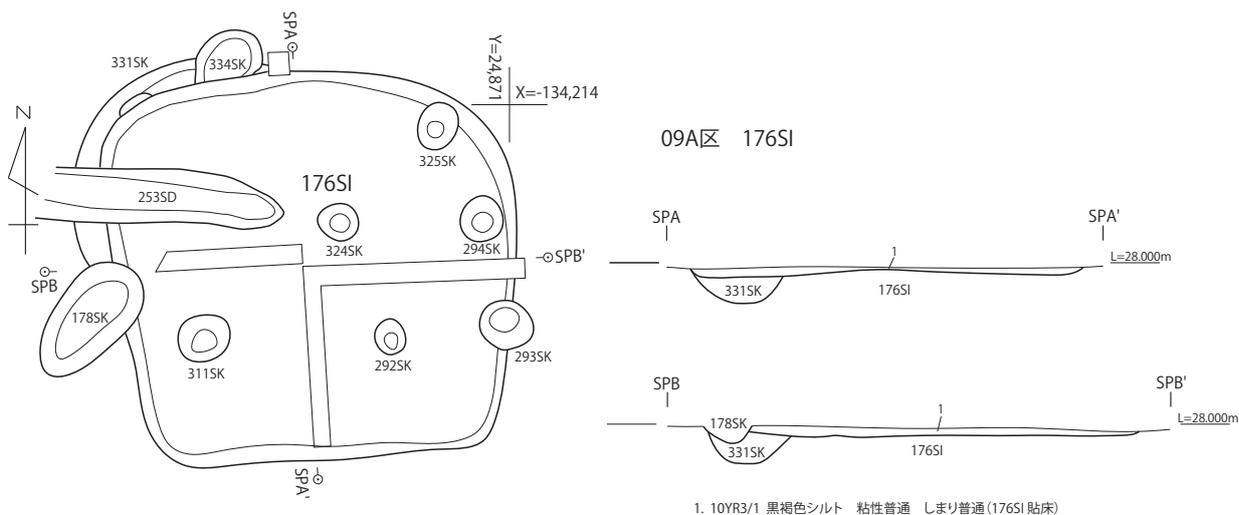
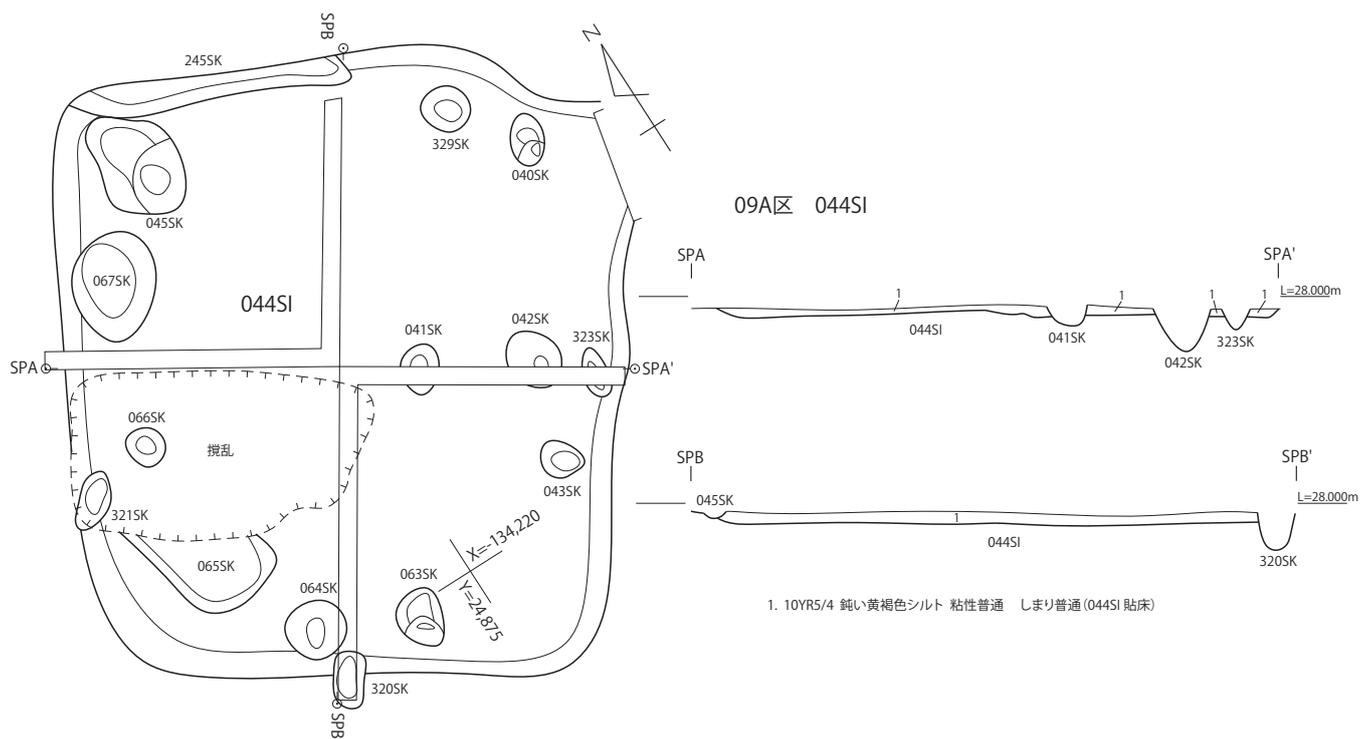


図8 09A区 044SI・261SI・176SI 1:50

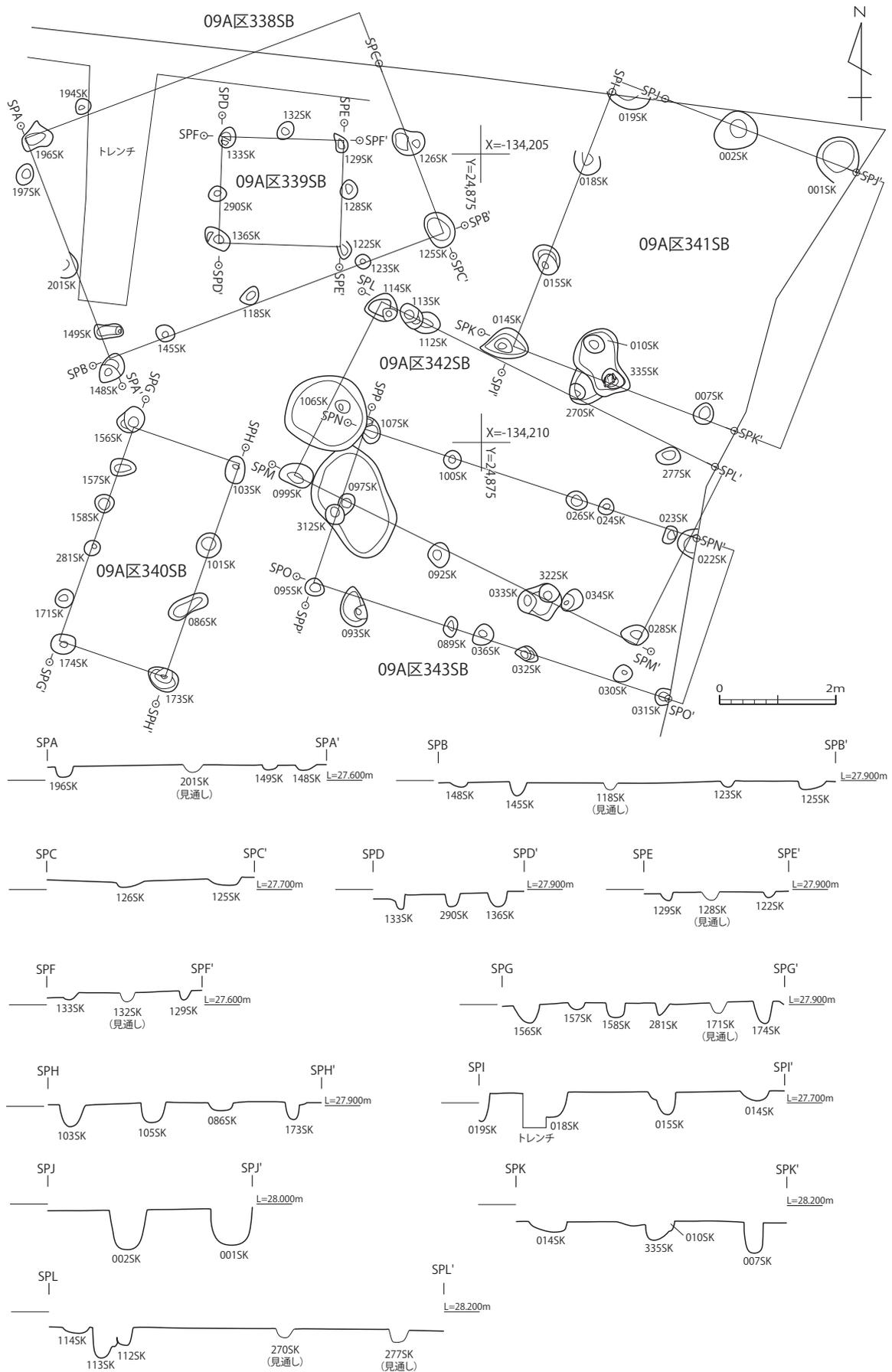
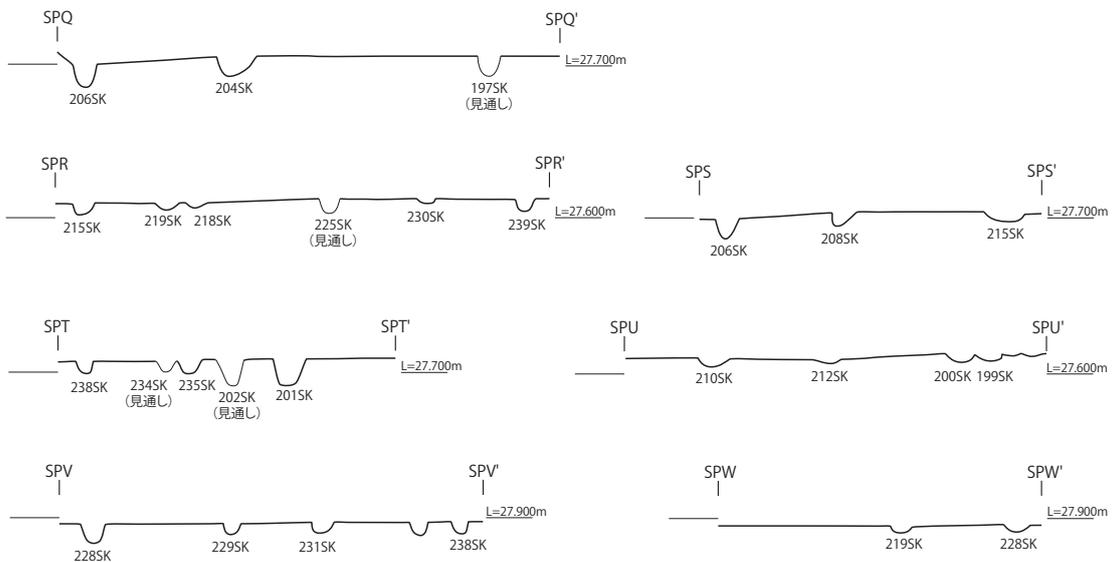
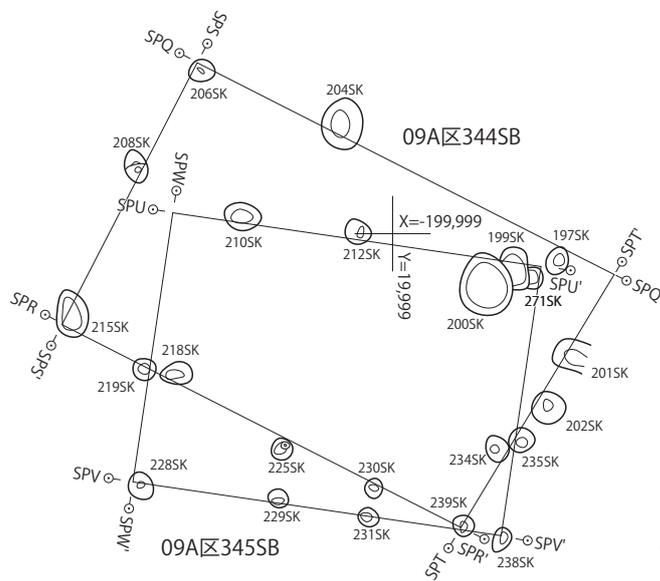
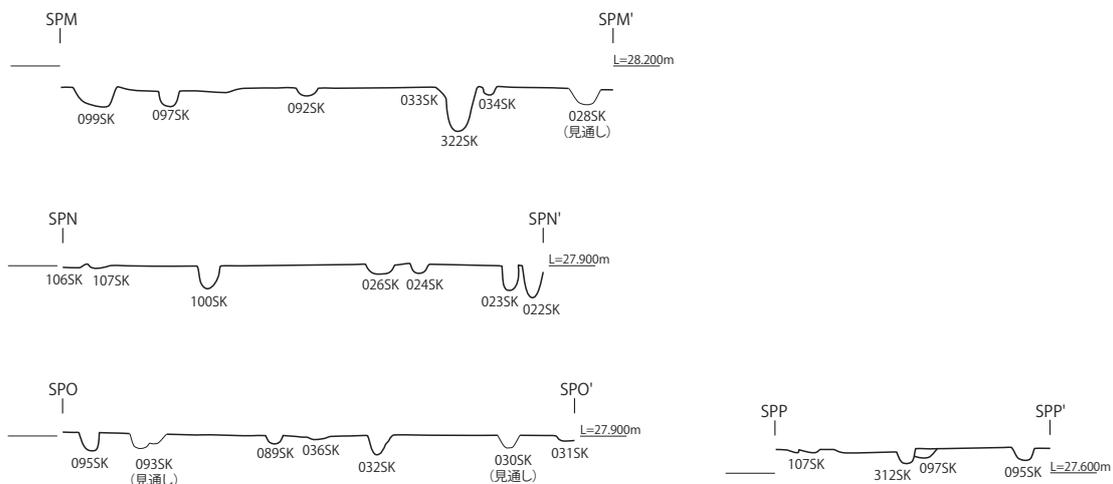


図9 09A区掘立柱建物 1:100



・09A区 261SI (図8)

調査区南西部で確認できた。南側が攪乱により消失する。長辺 3.8 m、短辺 2.4 m、検出面からの深さは 0.1 m で、平面形はやや不整形な隅丸長方形となる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 338SB (図9)

調査区北東部で確認できた。196SK・194SK・126SK・125SK・123SK・118SK・145SK・148SK・149SK・201SK で構成される。339SB と重複するが、柱穴は切り合わない。北東隅が調査区外となる。長辺 6.1 m、短辺 4.1 m。主軸は N-68°-E (長辺で計測。以下、同)。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 339SB (図9)

調査区北部で確認できた。133SK・132SK・129SK・128SK・122SK・136SK・290SK で構成される。338SB と重複するが、柱穴は切り合わない。長辺 2.1 m、短辺 1.8 m、平面形はやや歪む。主軸は N-3°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 340SB (図9)

調査区中央部で確認できた。156SK・103SK・101SK・086SK・173SK・174SK・171SK・281SK・158SK・157SK で構成される。長辺 3.9 m、短辺 1.9 m、主軸は N-18°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 341SB (図9)

調査区北東部で確認できた。019SK・002SK・001SK・007SK・335SK・014SK・015SK・018SK で構成される。342SB を切る (335SK が 270SK を切る)。東側と北側の一部が調査区外となる。比較的大型の柱穴で構成され、検出できた一辺は 5.0 m、主軸は N-26°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 342SB (図9)

調査区北東部で確認できた。114SK・112SK・270SK・277SK・022SK・028SK・033SK・092SK・097SK・099SK・106SK で構成される。341SB・343SB に切られる (335SK が 011SK、097SK が 312SK を切る)。北東の一部が調査区外となる。長辺 6.6 m、短辺 3.4 m だが、一部の柱穴は特定に至っていない。主軸は N-117°-E。出土遺物は 270SK から出土した 121 を図示した。

・09A区 343SB (図9)

調査区北東部で確認できた。107SK・100SK・026SK・024SK・023SK・031SK・030SK・032SK・036SK・089SK・093SK・095SK・312SK で構成される。342SB を切る (097SK を 312SK が切る)。東側が調査区外となる。検出できた一辺は、2.8 m、もう一辺は 6.4 m まで計測できる。平面形はやや歪み、一部の柱穴は特定に至っていない。主軸は N-106°-E。出土遺物は 023SK から出土した 120 を図示した。

・09A区 344SB (図9)

調査区北西部で確認できた。206SK・204SK・197SK・201SK・202SK・235SK・239SK・230SK・225SK・218SK・215SK・208SK で構成される。345SB と重複するが、柱穴は切り合わない。長辺 5.9 m、短辺 3.9 m、平面形はやや歪み、一部の柱穴は特定に至っていない。主軸は N-119°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 345SB (図9)

調査区北西部で確認できた。210SK・212SK・271SK・235SK・238SK・231SK・229SK で構成される。343SB と重複するが、柱穴は切り合わない。長辺 4.9 m、短辺 3.6 m、平面形はやや歪み、一部の柱穴は特定に至っていない。主軸は N-98°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 248SD (図21)

調査区西部で確認できた。全長 7.6 m を検出し、北側が調査区外となる。幅は 0.3 m で、検出面から

の深さは0.1 mをはかる。主軸はN-113°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09A区 253SD

調査区中央部で確認できた。176SIを切る。全長5.1 mを検出した。北側が調査区外となる。幅は0.4 mで、検出面からの深さは0.1 mをはかる。主軸はN-102°-E。出土遺物は確認されなかった。

・09D区 003SD

調査区北部で確認できた。北側が攪乱により消滅され、東側が調査区外となる。検出面からの深さは0.1 mをはかる。主軸はN-34°-E。出土遺物は194～196・290を図示した。

5 08区 (図版4・9)

今回の調査区のうち、最も南側に位置する。北側を09A区と接し、10Cb・10D区が道路を挟んだ西側に位置する。遺構検出面の標高は、南側で26.3 m、北側で27.9 mとなる。

今回の調査区の中で最も大面積となり、弥生時代の遺構群が集中している。しかし、中央部が大きく攪乱されており、この部分の状況は明らかにできない。

D層は南側で良好に残存し、この部分からは第3面の遺構群も分離されている(下面)。一方、北側ではこれが確認できず、第1面～第3面を同一面で捉えた(上面)。なお、下面で検出した遺構については本文中に明記し、未記入を上面とする。

・08区 004SI (図13)

調査区南部で確認できた。南西の一部を残してほとんどが攪乱により消滅しており、平面形・規模は不明で、支柱穴は特定に至っていない。検出面からの深さは0.3 mをはかる。出土遺物は1の他、B期に属する土器片が若干得られた。

・08区 010SI (図11)

調査区南部で確認できた。401SI・535SDに切られる。西壁の一部を確認したのみで、平面形・規模は不明。検出面からの深さは0.2 mをはかる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物はB期に属する土器片が若干得られた。

・08区 013SI (図12)

調査区南東部で確認できた。041SIを切る。西側が攪乱により消滅し、東側は調査区外となるため、平面形・規模は不明。検出面からの深さは0.2 mをはかる。平面形は隅丸正方形を呈するのかわ。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は2～16を図示したが、この他にB期に属する土器片が多量にあり、D期の土師器がわずかに混入する。

・08区 014SI (図12)

調査区南東部で確認できた。015SIを切り、013SI・011SPに切られる。西側が攪乱により消滅し、東側は調査区外となるため、北側のコーナー部分と北壁の一部を確認したのみで、平面形・規模は不明だが、小型の竪穴建物になるのかわ。検出面からの深さは0.2 mをはかる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は17～24を図示した。

・08区 015SI (図12)

調査区南東部で確認できた。401SIを切り、014SIに切られる。西側が攪乱により消滅し、東側は調査区外となるため、南壁の基底部分を部分的に確認したのみで、平面形・規模は不明。検出面からの深さは0.2 mをはかる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は25～36を図示した。

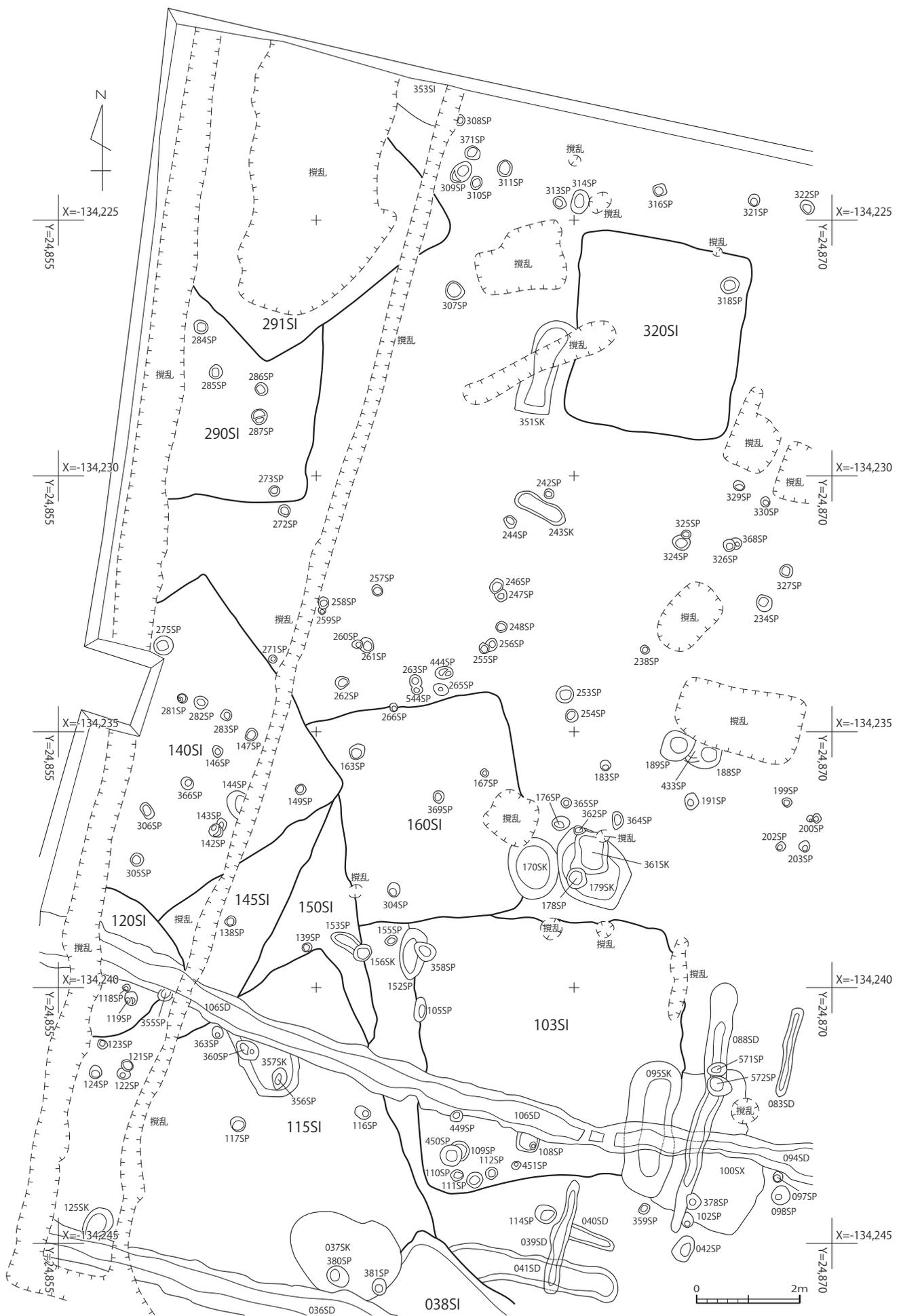


図 10 08 区北部の竖穴建物 1:100

・08区019SI (図14)

調査区東部で確認できた。東側は調査区外、南側は018SDに切られる。西壁の一部を残すのみで、平面形・規模は不明。検出面からの深さは0.2 mをはかる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は37～39を図示した。

・08区020SI (図14)

調査区東側で確認できた。021SIを切る。東側の一部を残し、攪乱により消滅する。平面形・規模は不明。検出面からの深さは0.2 mをはかる。404SPは北東側の支柱穴かもしれない。出土遺物は40・41を図示した。

・08区021SI (図14)

調査区東側で確認できた。西側が攪乱により消滅する。東側は調査区外で、南側は020SIに切られる。平面形・規模は明らかにできない。検出面からの深さは0.1 mをはかる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は42～45を図示した。

・08区038SI (図13)

調査区中央部で確認できた。南側は036SDに切れ、さらに攪乱により消滅する。平面形・規模は不明。検出面からの深さは北側で0.2 mをはかるが、貼床部分が残存するに過ぎない。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・08区103SI (図10)

調査区中央部で確認できた。160SI・095SK・106SDに切られる。長辺5.1 m、短辺5.0 mで、貼床部分が薄く残存するに過ぎない。平面形はややゆがむ隅丸正方形を呈する。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・08区115SI (図10)

調査区中央部で確認できた。145SI・150SIを切り、038SI・036SDに切られる。北壁と東壁の一部の貼床部分が薄く残存するにすぎない。西側が不明確となる。平面形・規模は不明で、支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・08区120SI (図10)

調査区北西部で確認できた。140SI・145SIを切り、106SDに切られる。北壁と東壁の一部の貼床部分が薄く残存するに過ぎず、西側が不明確となる。平面形・規模は不明。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・08区140SI (図10)

調査区北西部で確認できた。西側が調査区外となる。145SI・150SI・160SIを切り、120SIに切られる。検出できた一辺は5.1 mだが、貼床部分が薄く残存するに過ぎない。平面形・規模は不明。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・08区145SI (図10)

調査区北西部で確認できた。150SIを切り、115SI・120SI・140SIに切られる。東壁の一部の貼床部分が薄く残存するにすぎない。南側が不明確となる。支柱穴は特定に至っていない。平面形・規模は不明。出土遺物は確認されなかった。

・08区150SI (図10)

調査区西部で確認できた。160SIを切り、145SI・115SIに切られる。東壁の一部の貼床部分が薄く残存するにすぎない。支柱穴は特定に至っていない。平面形・規模は不明。出土遺物は確認されなかった。

・08区160SI (図10)

調査区西部で確認できた。103SIを切り、140SI・150SIに切られる。確認できた一辺は4.2 mとなるが、

貼床部分が薄く残存するに過ぎない。支柱穴は特定に至っていない。平面形・規模は不明。出土遺物は確認されなかった。

・08区 290SI (図 10)

調査区北西部で確認できた。291SI に切られ、西側は調査区外となる。貼床部分が薄く残存するに過ぎない。西側が不明確となる。支柱穴は特定に至っていない。平面形・規模は不明。出土遺物は確認されなかった。

・08区 291SI (図 10)

調査区北東部で確認できた。290SI を切る。西側は攪乱により消滅する。確認できた一辺は 4.6 m だが、貼床部分が薄く残存するに過ぎない。北西側が不明確となる。平面形・規模は不明。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・08区 320SI (図 10)

調査区北部で確認できた。長辺 3.8 m、短辺 3.3 m。貼床部分が薄く残存するに過ぎない。平面形は隅丸長方形を呈する。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・08区 401SI (図 11)

調査区南東部で確認できた。010SI を切り、015SI・535SD に切られる。西壁の基底部分を部分的に確認したのみで、平面形・規模は不明。検出面からの深さは 0.2 m をはかる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は 46～49 を図示した。

・08区 549SI (図 13)

調査区南部で確認できた。535SD に切られる。北壁と東壁の一部の基底部を確認したのみで、平面形・規模は不明。検出面からの深さは 0.3 m をはかる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は 50・51 を図示した。

・08区 463SI (図 15)

調査区南西部の下面で確認できた。西側が攪乱により消滅し、東側は調査区外となるため、平面形・規模は不明だが、南北方向の一辺は 4.1 m 程度となるのか。検出面からの深さは 0.1 m をはかる。支柱穴は特定に至っていない。出土遺物は確認されなかった。

・08区 478SI (図 15)

調査区南西部の下面で確認できた。018SD に切られ、東側の大部分が調査区外となるため、平面形・規模は不明。検出面からの深さは 0.1 m をはかる。支柱穴は特定に至っていない。西壁付近には 476SP・514SP が存在する。出土遺物は確認されなかったが、476SP からは 65、514SP からは 66 を図示した。

・08区 045SL

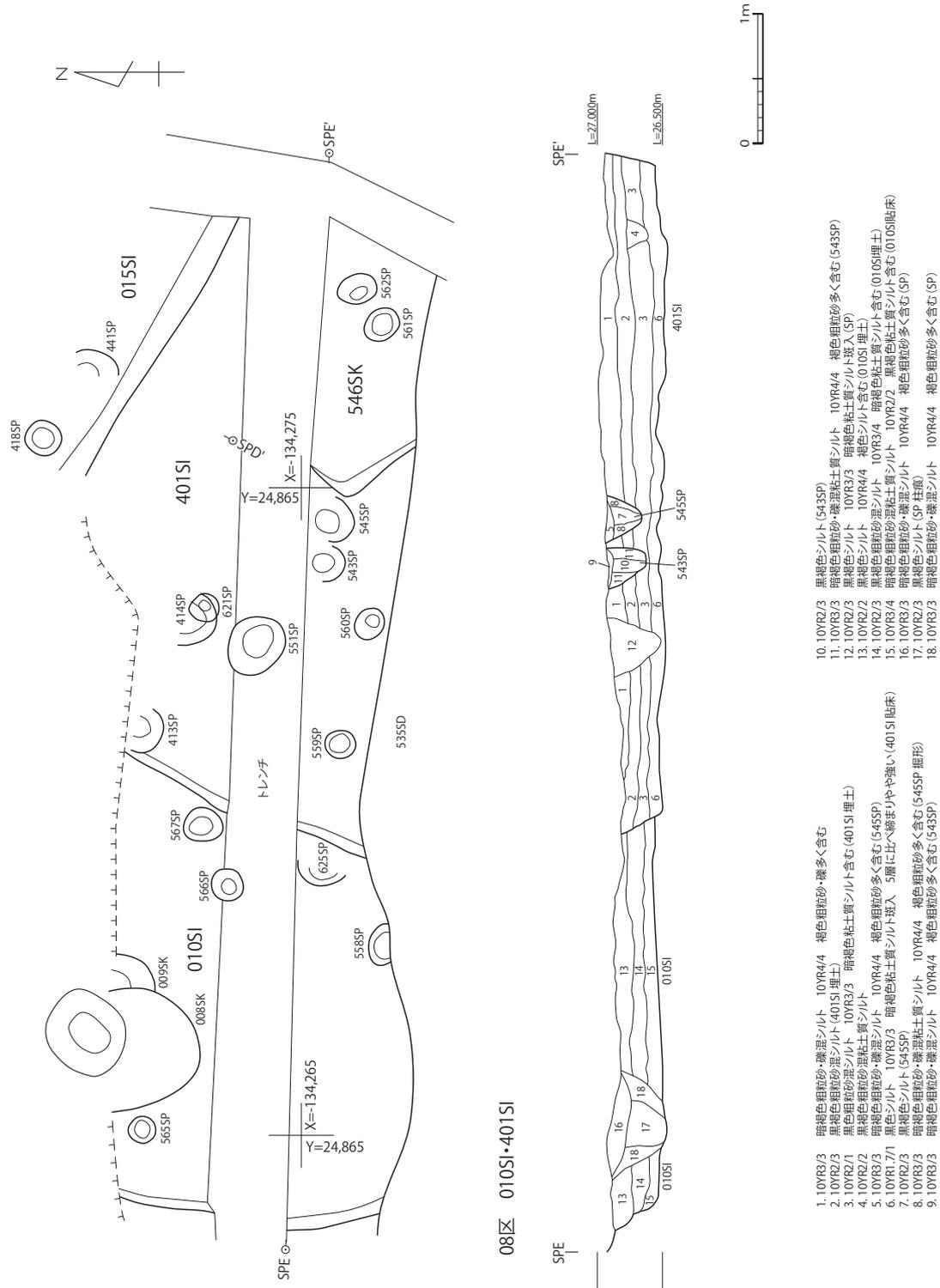
調査区中央部で確認できた。短径 0.2 m、検出面からの深さは 0.1 m をはかる。平面形は楕円形を呈する。埋土に焼土を含み、床面がほぼ削平された竪穴建物に伴う炉等である可能性が高い。出土遺物は確認されなかった。なお、埋土の一部を水洗選別しているが、特記すべき成果は得られていない。結果は本書添付の CD-ROM に収納している。

・08区 001SK

調査区南部で確認できた。西側が調査区外となる。検出面からの深さは 0.3 m。平面形・規模は不明。出土遺物は 52・53 を図示した。

・08区 033SK

調査区東部で確認できた。直径 0.5 m、検出面からの深さは 0.3 m をはかる。平面形は円形。出土遺



08区 010SI・401SI

図 11 08区 010SI・401SI 1:50

- | | | |
|---|---|-----------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む | 10. 10YR2/3 単褐色シルト (543SP) | 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (543SP) |
| 2. 10YR2/3 単褐色粗粒砂混シルト (401SI埋土) | 11. 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト | 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト混入 (SP) |
| 3. 10YR2/1 単褐色粗粒砂混シルト (401SI埋土) | 12. 10YR2/3 単褐色シルト 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (010SI埋土) | 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (010SI埋土) |
| 4. 10YR2/1 暗褐色粗粒砂・礫混シルト | 13. 10YR2/2 単褐色粗粒砂混シルト 10YR3/4 暗褐色粗粒砂・礫混シルト | 10YR3/4 暗褐色粗粒砂・礫混シルト |
| 5. 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (545SP) | 14. 10YR2/3 単褐色粗粒砂混シルト 10YR3/4 暗褐色粗粒砂・礫混シルト | 10YR2/2 単褐色粗粒砂・礫混シルト |
| 6. 10YR1/1 単褐色シルト 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト混入 5層に比べ層厚い (401SI貼床) | 15. 10YR3/4 暗褐色粗粒砂・礫混シルト 10YR2/2 単褐色粗粒砂・礫混シルト | 10YR2/2 単褐色粗粒砂・礫混シルト |
| 7. 10YR2/3 単褐色シルト (545SP) | 16. 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (SP) | 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (SP) |
| 8. 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (545SP) | 17. 10YR2/3 単褐色シルト (SP柱頭) | 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (SP) |
| 9. 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (543SP) | 18. 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (SP) | 10YR4/4 褐色粗粒砂多く含む (SP) |

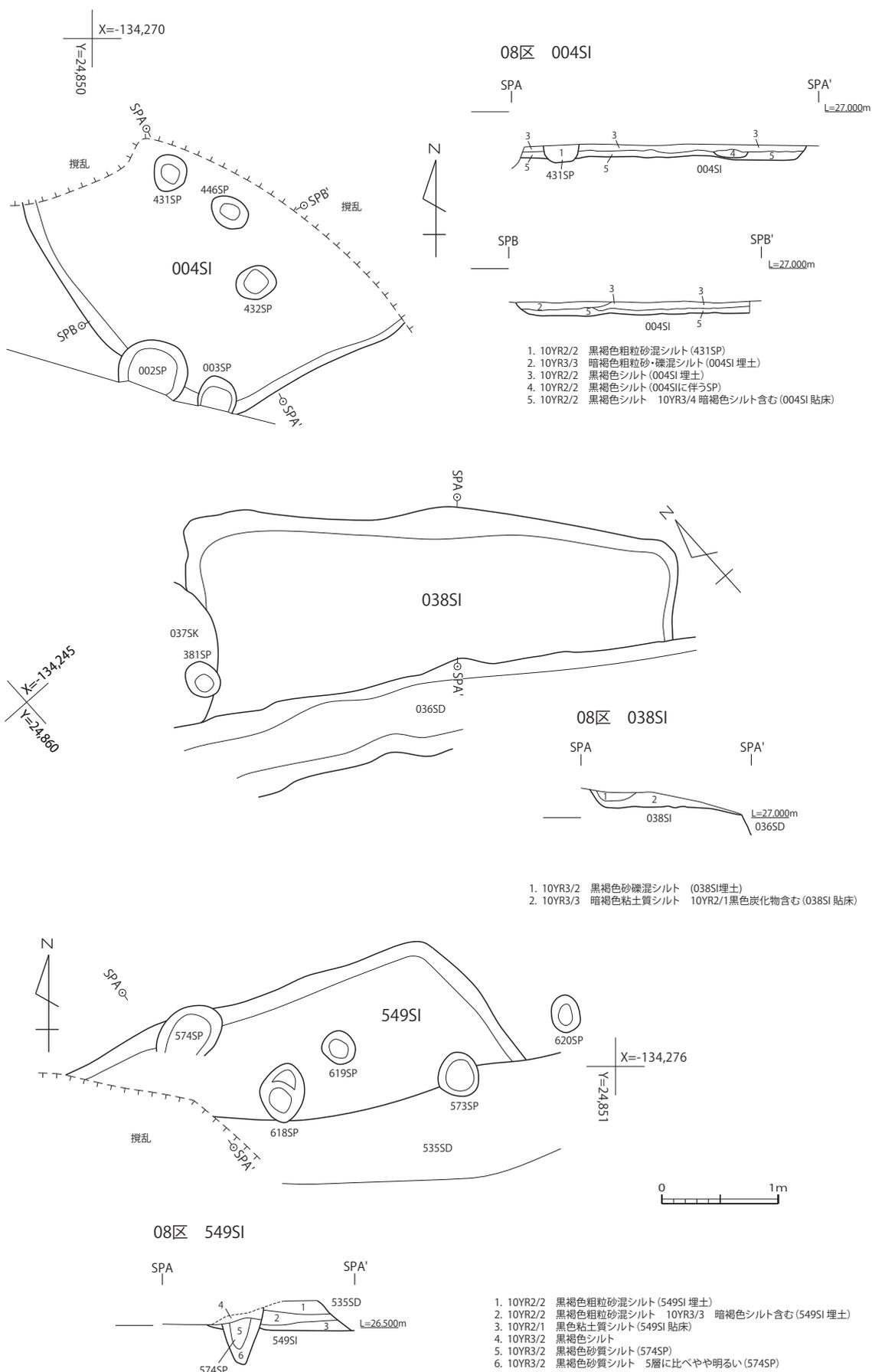
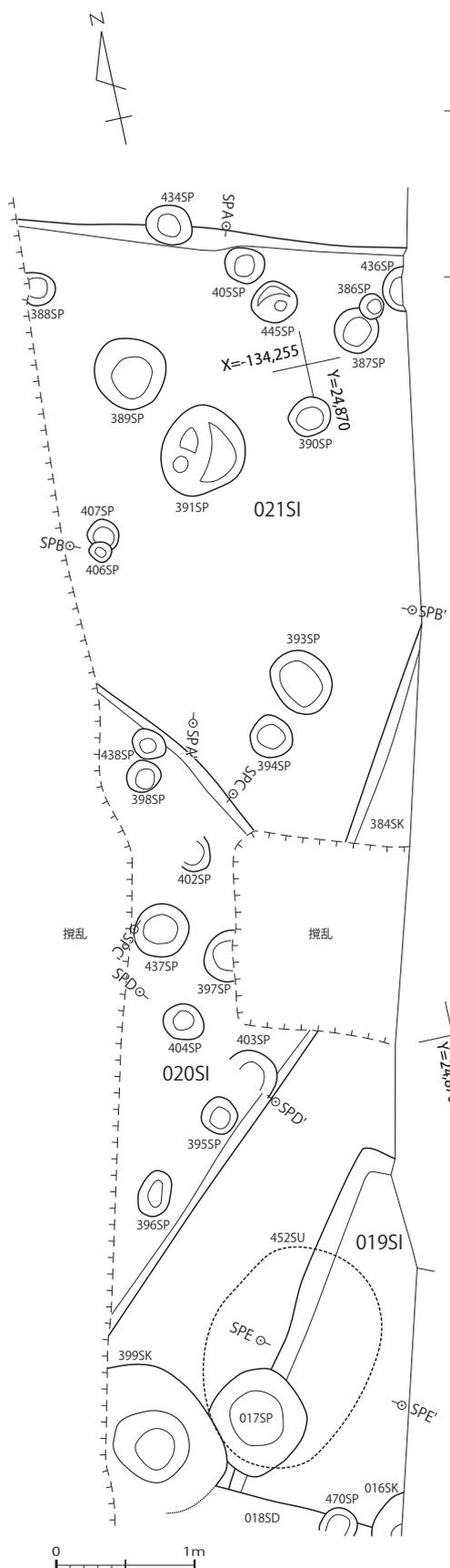
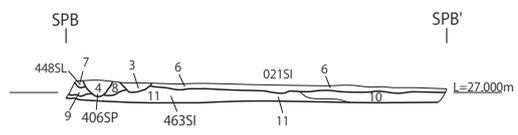
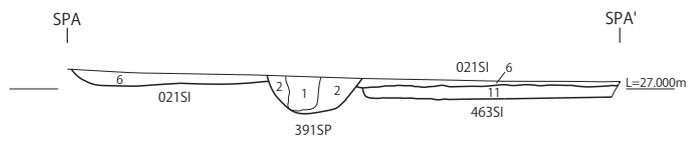


図13 08区 004SI・038SI・549SI 1:50

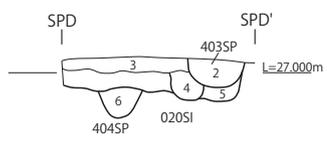
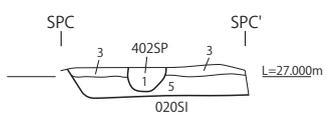


08区 021SI



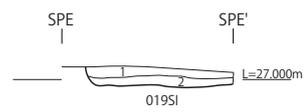
1. 10YR2/3 黒褐色粗粒砂混シルト 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト含む (391SP)
2. 10YR2/3 黒褐色粗粒砂混シルト 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト含む (391SP)
3. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 10YR2/1 黒色炭化物含む 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト斑入 (SP)
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト斑入 (406SP)
5. 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (384SK埋土)
6. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 10YR3/4 暗褐色粗粒砂混粘土質シルト含む (021SI 貼床)
7. 7.5YR4/6 褐色シルト (焼土) (448SL地床炉 021SIに伴うか)
8. 7.5YR2/1 黒色シルト 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト多く含む
微粒の炭化物含む 448SLの影響を受けてやや赤味を帯びる
9. 7.5YR2/1 黒色シルト 7.5YR1.7/1 黒色炭化物多く含む 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト含む
10. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト斑入
11. 10YR2/3 黒褐色粗粒砂混粘土質シルト 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト斑入 (463SI 貼床)

08区 020SI



1. 10YR3/3 暗褐色粗粒砂・礫混シルト (402SP)
2. 10YR3/2 黒褐色粗粒砂混シルト (403SP)
3. 10YR2/2 黒褐色粗粒砂・礫混シルト (020SI埋土)
4. 10YR2/3 黒褐色粗粒砂混シルト (SP)
5. 10YR2/1 黒色粘土質シルト 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト斑入 (020SI 貼床)
6. 10YR2/1 黒色シルト (404SP)

08区 019SI



1. 10YR3/2 黒褐色シルト 7.5YR2/1 黒色炭化物少量含む (019SI 埋土)
2. 10YR2/1 黒色粘土質シルト 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト斑入
10YR2/1 黒色炭化物多く含む 締まり強い (019SI 埋土)

図 14 08区 021SI・020SI・019SI 1:50

物は 54・55 を図示した。

・08区 453SK

調査区東部下面で確認できた。018SD に切られる。東側が調査区外で、西側が攪乱により消滅する。平面形・規模は不明。検出面からの深さは 0.2 m。出土遺物は 57 を図示した。

・08区 468SK

調査区東部下面で確認できた。上面を 415SI に切られ、東側が調査区外で、西側が攪乱により消滅する。平面形・規模は不明。検出面からの深さは 0.2 m。出土遺物は 58・59 を図示した。

・08区 548SK

調査区南部で確認できた。550SK を切る。北側が攪乱により消滅する。平面形・規模は不明。検出面からの深さは 0.4 m をはかる。出土遺物は 56 を図示した。

・08区 550SK

調査区南部で確認できた。548SK に切られる。北側が攪乱により消滅する。平面形・規模は不明。検出面からの深さは 0.3 m をはかる。出土遺物は 60・61・287 を図示した。

・08区 011SP

調査区東部で確認できた。014SI を切る。西側が攪乱により消滅するが、一辺 0.4 m の円形土坑となるのか。検出面からの深さは 0.1 m をはかる。出土遺物は 63 を図示した。

・08区 025SP

調査区東部で確認できた。一辺 0.3 m の円形で、検出面からの深さは 0.8 m をはかる。出土遺物は 64 を図示した。

・08区 537SP

調査区南部下面で確認できた。483SP に切られる。平面形は楕円形で、検出面からの深さは 0.2 m。出土遺物は 67 を図示した。

・08区 018SD (図 21)

調査区東部で確認できた。019SI を切り、013SI に切られる。全長 2.1 m を検出し、東端が調査区外、西側は攪乱により消滅する。幅は 1.4 m で、検出面からの深さは 0.7 m をはかる。主軸は N-109°-E。出土遺物は 96 を図示したが、この他に B 期に属する土器片がある。

・08区 036SD (図 21)

調査区中央部で確認できた。038SI・115SI を切る。東西端が調査区外となる。全長 21.1 m を検出し、微地形に沿って中央で屈曲する。幅は 0.5 m で、検出面からの深さは 0.5 m をはかる。主軸は西側が N-102°-E、東側が N-119°-E。出土遺物は 68～95・289 を図示した。

・08区 061SD

調査区東部で確認できた。036SD の東側部分とほぼ並行する。全長 2.3 m を検出し、東端が調査区外となる。幅は 0.6 m で、検出面からの深さは 0.2 m をはかる。主軸は N-110°-E。出土遺物は確認されなかった。

・08区 106SD (図 21)

調査区中央部で確認できた。103SI・115SI・120SI・145SI を切る。微地形に沿って中央で屈曲する。西側では 036SD とほぼ並行し、西端は調査区外。全長 17.2 m を検出する。幅は 0.7 m で、検出面からの深さは 0.2 m をはかる。主軸は西側が N-110°-E、東側が N-98°-E。出土遺物は図示していないが、D 期の土師器皿が 1 点得られた。

・08区 535SD (図 3)

調査区南部で確認できた。東西ともに端部は調査区外となる。全長 10.0 m を検出し、微地形に沿っ

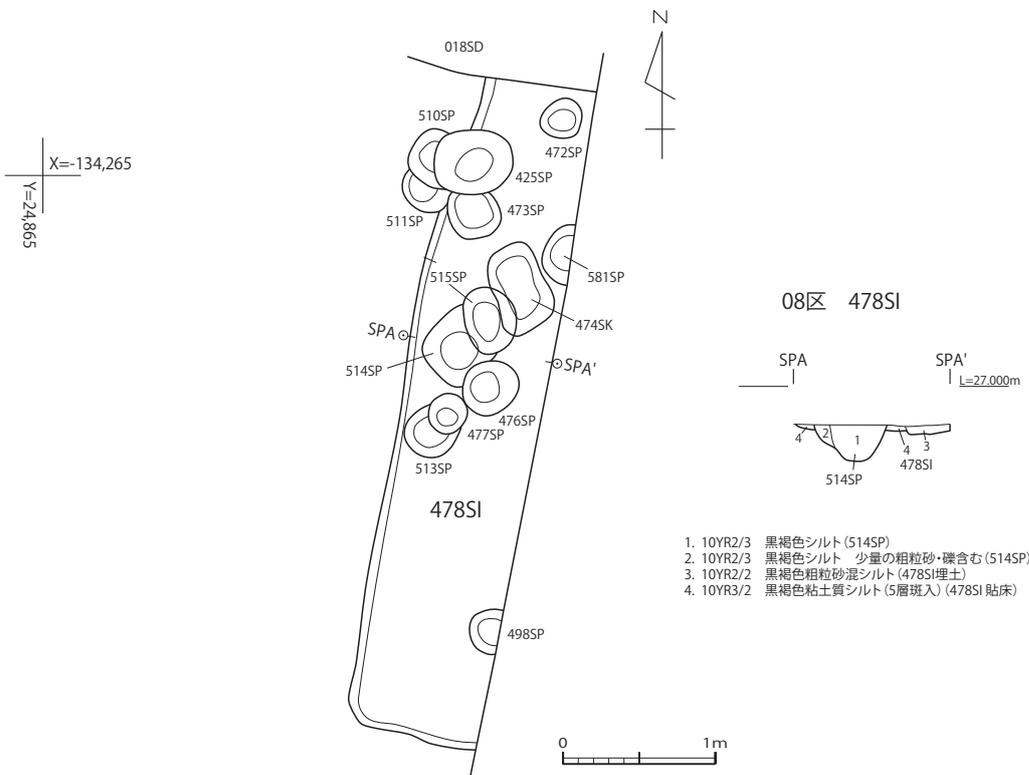
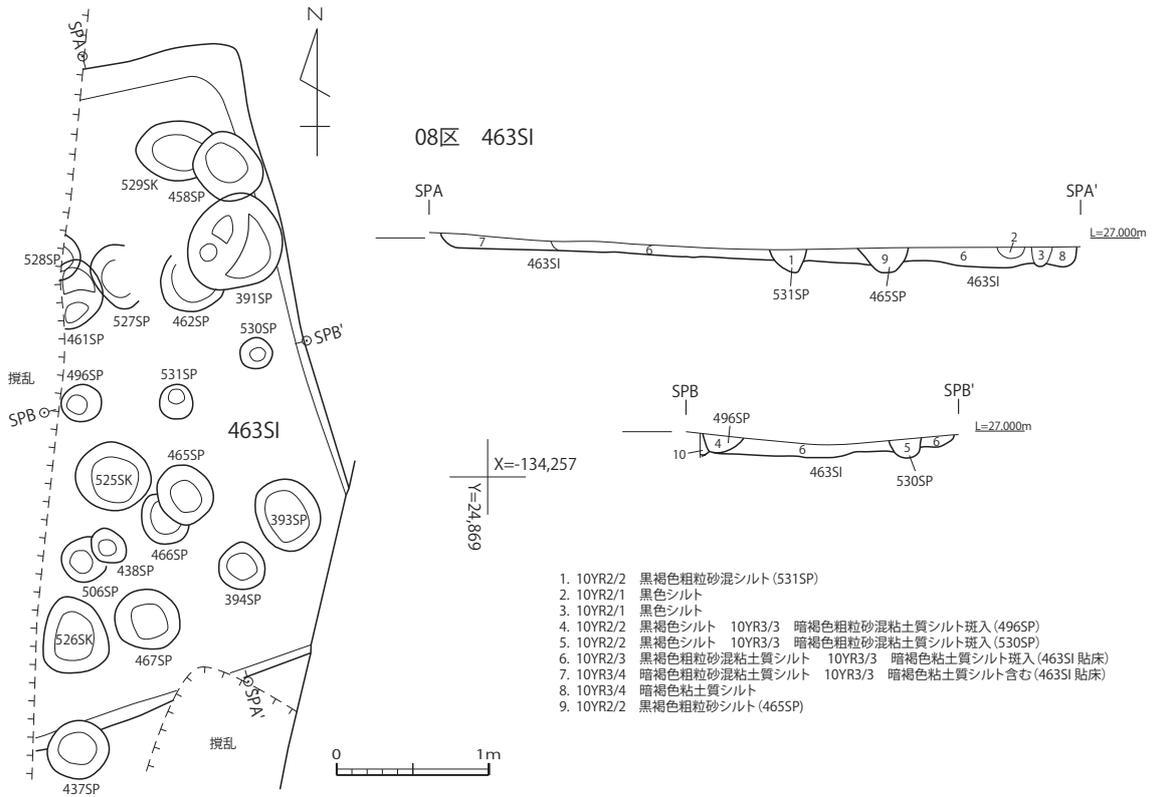


図 15 08区 463SI・478SI 1:50

て中程で屈曲する。幅は1.9 mで、検出面からの深さは0.6 mをはかる。主軸は西側がN-82°-E、東側がN-95°-E。出土遺物は確認されなかった。

・08区 452SU (図14)

調査区東部で確認できた。019SIの上面に広がる。出土遺物は97・98を図示した。

6 10B区・10Ca区 (図版5)

今回の調査区のうち東側に位置する。10B・10Ca区とは接さず、道路を挟んで南北に位置する。いずれも09A・08区の西側に該当し、遺構検出面の標高は、09B区の中央で27.2 m、10Ca区が南側で27.5 m、北側で27.8 mとなる。

10B区は第1面を検出面の差として認識できたが、第2面と第3面はD層が確認できないため同一面で捉えた(上面)。一方、10Ca区は第1面～第3面を同一面で検出したが、調査区が狭小な事に加えて巨木の木根が点在するため、遺構は部分的な検出となる場合も存在する。

・10B区 078SB (図16)

調査区西部で確認できた。021SK・074SK・010SK・013SK・056SK・057SK・023SKで構成される。024SDに切られる。北側が調査区外となり、検出できた一辺は3.4 m、平面形はやや歪み、一部の柱穴は特定に至っていない。主軸はN-104°-E。出土遺物は確認されなかった。

・10B区 070SK

調査区東部で確認できた。006SD・069SDに切られる。長径0.9 m、短径0.8 m、検出面からの深さは0.2 mをはかる。平面形は隅丸長方形を呈する。出土遺物は210を図示したが、D期に属する陶磁器・土師器片も多量に得た。

・10B区 006SD (図21)

調査区東部で確認できた。069SDを切る。全長2.5 mを検出し、南北ともに端部が調査区外となる。幅は1.2 mで、検出面からの深さは0.1 mをはかる。主軸はN-7°-E。出土遺物は211を図示した。

・10B区 007SD

調査区中央部で確認できた。066SDに切られる。北側は不整形な落ち込みだが、南側は溝状を呈する。南北ともに端部が調査区外となる。検出面からの深さは0.3 mをはかる。主軸はN-18°-E。出土遺物は212～221を図示した。

・10B区 019SD

調査区西部で確認できた。018SX・020SXに切られる。全長1.6 mを検出し、北側が調査区外となる。幅は0.2 mで、検出面からの深さは0.8 mをはかる。主軸はN-15°-E。出土遺物は確認されなかった。

・10B区 024SD (図20)

調査区西部で確認できた。078SBを切る。調査区西部を起点とし、全長1.6 mを検出し、北側が調査区外となる。幅は0.5 mで、検出面からの深さは0.2 mをはかる。主軸はN-15°-E。出土遺物は確認されなかった。

・10B区 037SD (図20)

調査区東部で確認できた。西側で038SDと分岐する。全長3.8 mを検出し、南北ともに端部が調査区外となる。幅は1.4 mで、検出面からの深さは0.1 mをはかる。主軸はN-9°-E。出土遺物は確認されなかった。

・10B区 038SD (図20)

調査区東部で確認できた。西端は069SDに切られ、東側は037SDから分岐する。全長3.0 mを検出

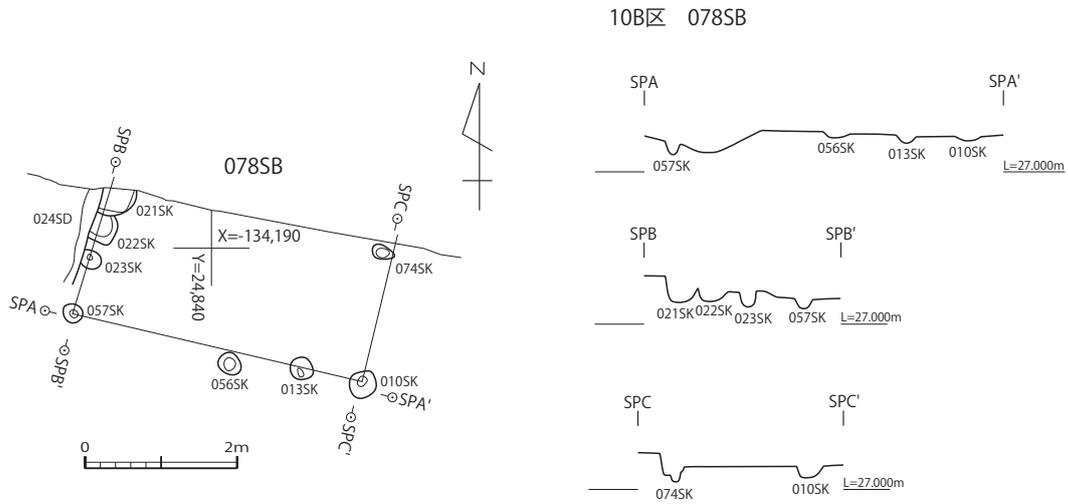


図 16 10B 区 078SB 1:100

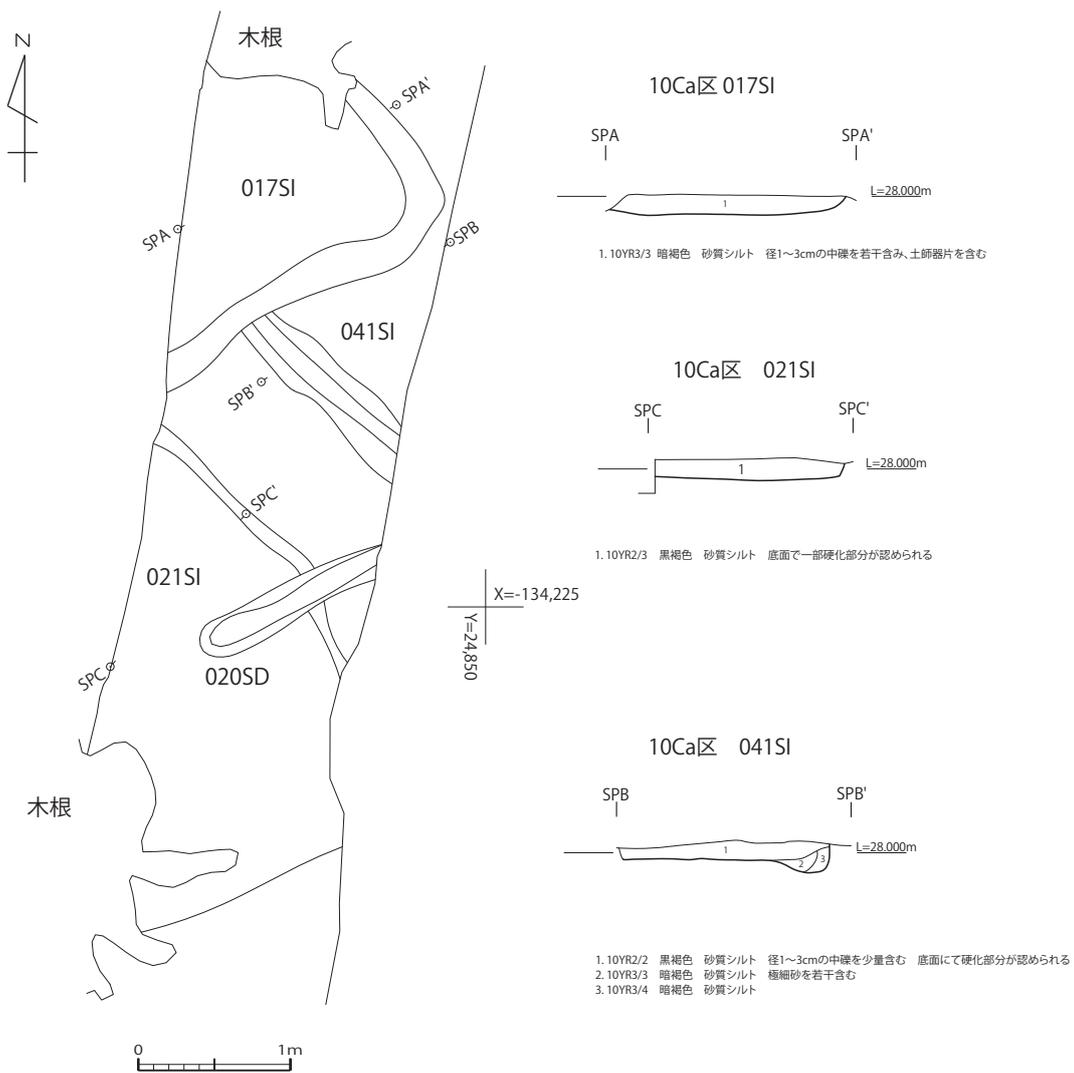


図 17 10Ca 区 017SI・10Ca 区 021SI・10Ca 区 041SI 1:50

する。幅は1.2 mで、検出面からの深さは0.1 mをはかる。主軸はN-103°-E。出土遺物は確認されなかった。

・10B区 069SD (図 21)

調査区東部で確認できた。070SKを切り、006SDに切られる。全長3.0 mを検出し、南北ともに端部は調査区外となる。幅は1.5 mで、検出面からの深さは0.7 mをはかる。主軸はN-7°-E。出土遺物は確認されなかった。

・10Ca区 017SI (図 17)

調査区中央部で確認できた。ここでは竪穴建物として報告するが、西側は調査区外、北側は木根により不明確となる。平面形・規模は不明で、支柱穴は特定に至っていない。検出面からの深さは0.1 mをはかる。出土遺物は図示していないが、B期に属する土器の小片がわずかに得られた。

・10Ca区 021SI (図 17)

調査区中央部で確認できた。020SDに切られる。ここでは竪穴建物として報告するが、西側は木根により不明確となり、南側は削平される。平面形・規模は不明で、支柱穴は特定に至っていない。検出面からの深さは0.1 mをはかる。出土遺物は確認されなかった。

・10Ca区 041SI (図 17)

調査区中央部で確認できた。017SI・020SDに切られる。ここでは竪穴建物として報告するが、東側は調査区外となり、北側は不鮮明となる。平面形・規模は不明で、支柱穴は特定に至っていない。西壁の残存部で壁溝を検出した。検出面からの深さは0.1 mをはかる。出土遺物は確認されなかった。

・10Ca区 044SI (図 18)

調査区北部で確認できた。ここでは竪穴建物として報告するが、西側は調査区外、南側は010SDに切られるため、平面形・規模は不明で、支柱穴は特定に至っていない。検出面からの深さは0.1 mをはかる。出土遺物は236を図示した。

・10Ca区 019SK

調査区中央部で確認できた。021SIを切る。長辺1.6 m、短辺0.7 mのやや細長い土坑である。検出面からの深さは0.1 mをはかる。出土遺物は237・238を図示した。

・10Ca区 036SX

調査区北部で確認できた。上面が攪乱により大きく削平され、東側が調査区外となるため、平面形・規模は不明。検出面からの深さは0.1 mをはかる。出土遺物は239・240を図示した。

・10Ca区 040SX

調査区南部で確認できた。025SXに切られる。長辺3.3 m、短辺0.7 m、検出面からの深さは0.1 mをはかる。平面形は楕円形。出土遺物は241を図示した。

・10Ca区 010SD (図 21)

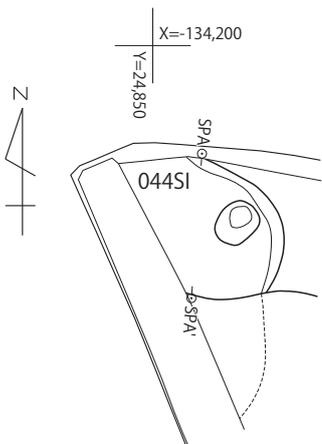
調査区北部で確認できた。044SIを切る。調査区北部で屈曲して南側に伸びるが、南端は木根のため不明瞭となる。東西1.5 m、南北を4.5 m程度検出するが、西側は調査区外となる。幅は1.4 mで、検出面からの深さは0.1 mをはかる。主軸は東西がN-96°-E、南北がN-11°-E。出土遺物は図示していないが、B期とC期の土器小片がわずかに得られた。

・10Ca区 014SD (図 21)

調査区北部で確認できた。030SDを切る。全長1.8 mを検出し、西側が調査区外となる。東側は攪乱により消滅する。幅は安定しないが最大値は1.3 mで、検出面からの深さは0.1 mをはかる。主軸はN-81°-E。出土遺物は図示していないが、B期に属する土器片が1片のみ得られた。

・10Ca区 030SD

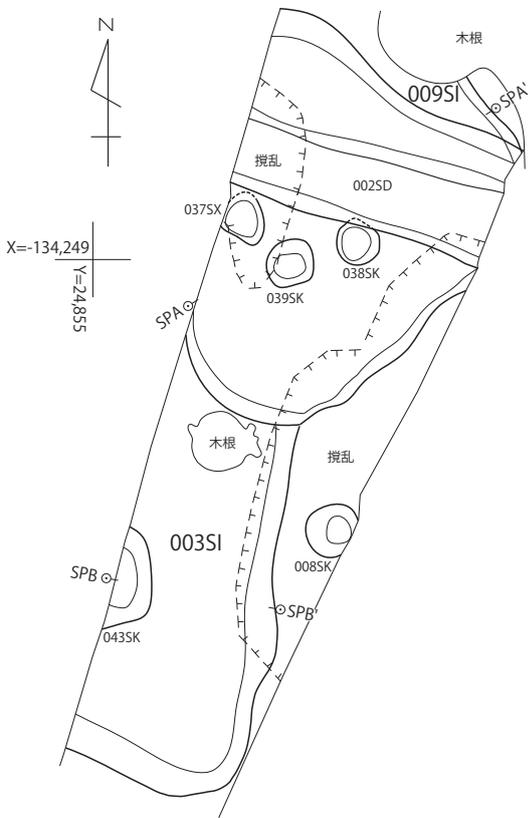
調査区北部で確認できた。014SDに切られる。全長2.5 mを検出し、東西が調査区外となる。調査



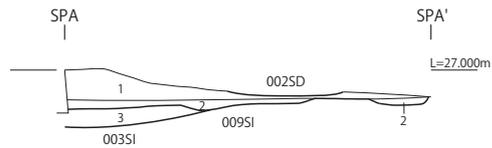
10Ca区 044SI



1. 10YR2/2黒褐色 砂質シルト 0.2~0.4cmの細礫を若干含む(044SI堀形)

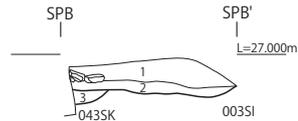


10Cb区 009SI

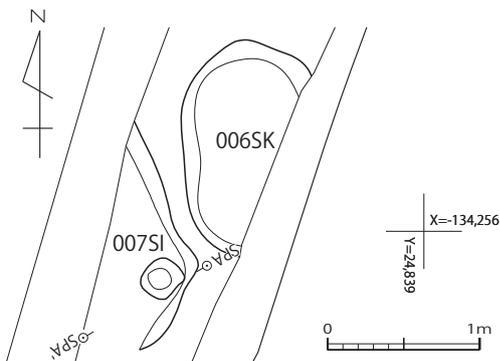


1. 10YR2/3黒褐色 砂質シルト 径3~5cmの中礫を若干含む(009SI埋土)
 2. 10YR3/3暗褐色 砂質シルト(009SI堀形)
 3. 10YR3/2黒褐色 砂質シルト 径3~5cmの中礫を若干含む(003SI埋土)

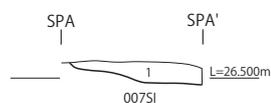
10Cb区 003SI



1. 10YR2/1黒色 砂質シルト 0.3cmの細礫を若干含む
 10cmの大礫を若干含む(003SI埋土)
 2. 10YR2/2黒褐色 砂質シルト 1~3cm中礫を少量含む(003SI埋土)
 但し、底面で顕著な硬化は認められない
 3. 10YR2/2黒褐色 砂質シルト(043SK)



10Cb区 007SI



1. 10YR2/1黒色 砂質シルト 径0.3cmの細礫を若干含む(007SI埋土)

図 18 10Ca区 044SI・10Cb区 003SI・007SI 1:50

区が狭小のため不明確だが、西壁付近で屈曲するのかもしれない。検出面からの深さは0.2 mをはかる。主軸はN-84°-Eで、屈曲後がN-32°-Eか。出土遺物は確認されなかった。

7 10Cb区・10D区 (図版6)

今回の調査区のうち東側に位置する。10Cb区・10D区は接さず、小道を挟んで南北に位置する。いずれも08区の西側に該当し、遺構検出面の標高は、09Cb区が南側で26.4 m、北側で27.1 m、10A区が南側で24.0 m、北側で26.5 mとなる。10Cb区・10D区ともに第1面～第3面を同一面で捉えた。

・10Cb区003SI (図18)

調査区中央部で確認できた。009SIに切られる。東側の一辺を検出し、4.8 mをはかる。西側の大部分が調査区外となる。検出面からの深さは0.2 m。一部が調査区外となる043SKが南東側の支柱穴かもしれないが、検出できた部分は浅い。出土遺物は254～258を図示した。

・10Cb区007SI (図18)

調査区南部で確認できた。ここでは竪穴建物として報告するが、大部分は調査区外で平面形・規模は不明となる。支柱穴は特定に至っていない。検出面からの深さは0.1 mをはかる。出土遺物は259を図示した。

・10Cb区009SI (図18)

調査区中央部で確認できた。002SDに切られ、003SIを切る。ここでは竪穴建物として報告するが、南東部のみを検出し、東側・西側ともに端部が調査区外となる。平面形・規模は不明で、支柱穴は特定に至っていない。検出面からの深さは0.1 mをはかる。出土遺物は260～265を図示した。

・10Cb区005SK

調査区中央部で確認できた。長径0.7 m、短径0.5 m、検出面からの深さは0.2 mをはかる。平面形は楕円形を呈する。出土遺物は266を図示した。

・10Cb区008SK

調査区中央部で確認できた。平面形は楕円形を呈し、長径0.4 m、短径0.3 m程度の規模となるのか。検出面からの深さは0.2 mをはかる。出土遺物は267～269を図示した。

・10Cb区032SK

調査区南部で確認できた。一辺0.4 m、検出面からの深さは0.1 mをはかる。平面形は隅丸正方形を呈する。007SIの床面上で検出した。出土遺物は270を図示した。

・10Cb区002SD (図21)

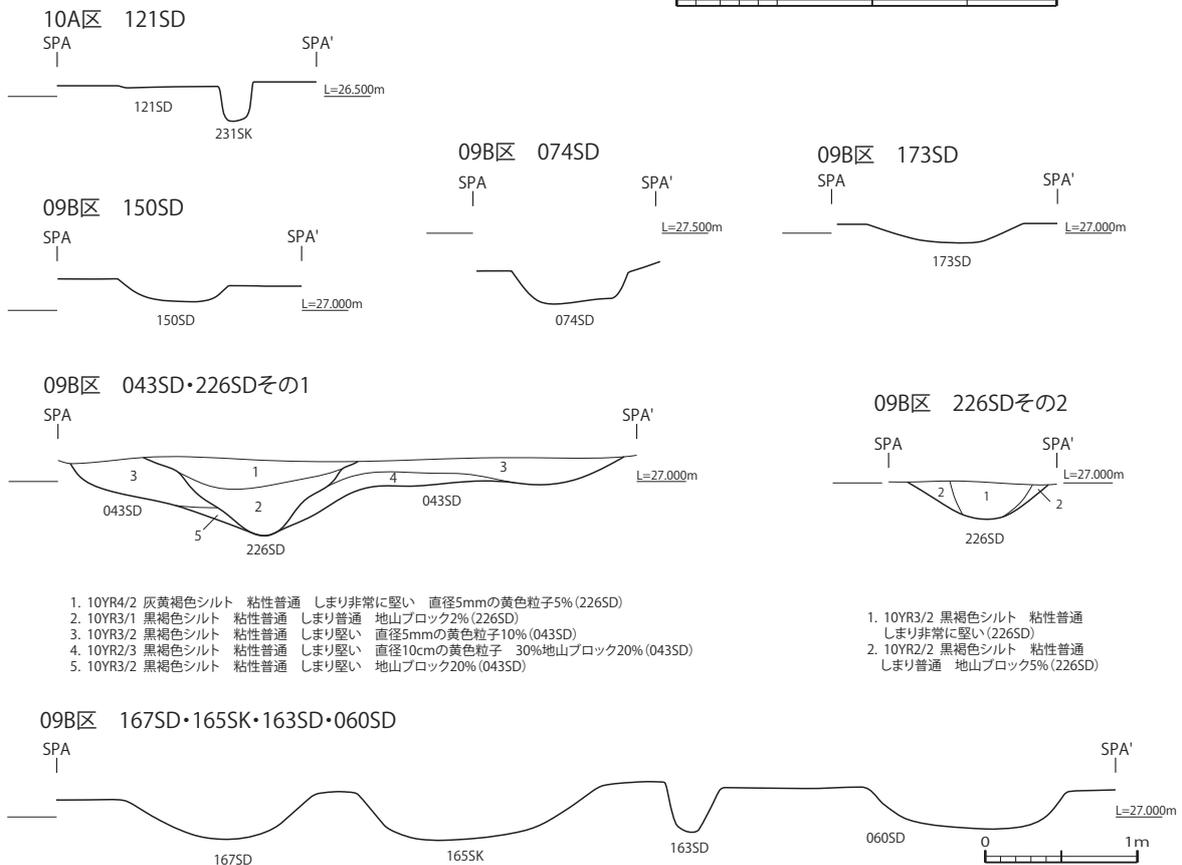
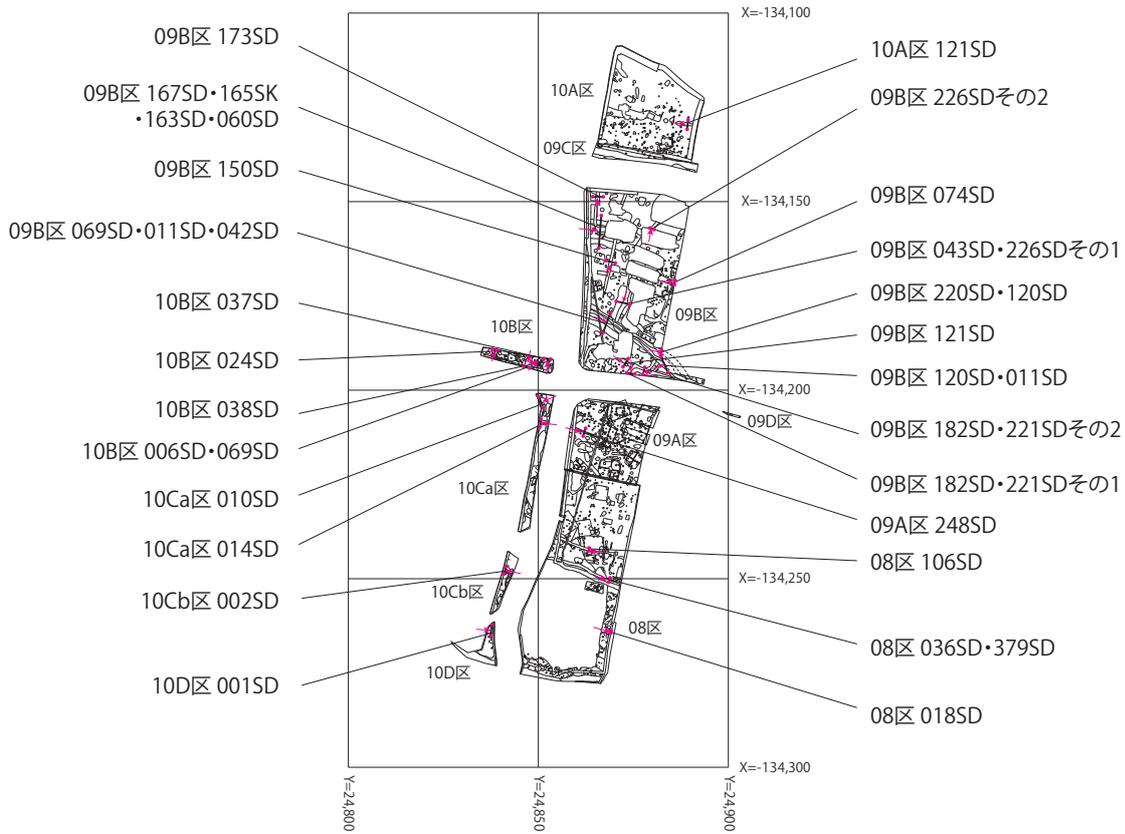
調査区北部で確認できた。019SIを切る。全長2.1 mを検出し、東西ともに端部が調査区外となる。幅は2.2 mで、検出面からの深さは0.1 mをはかる。主軸はN-107°-E。出土遺物は271・272を図示した。

・10D区010SD

調査区北部で確認できた。全長1.3 mを検出し、東西ともに端部が調査区外となる。幅は1.8 mで、検出面からの深さは0.2 mをはかる。主軸はN-83°-E。出土遺物は図示していないが、B期に属する土器小片が2点のみ得られた。

・10D区002SK

調査区東部で確認できた。東側が調査区外となる。検出面からの深さは0.3 mをはかる。平面形・規模は不明。出土遺物は281を図示した。



1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性普通 しまり非常に堅い 直径5mmの黄色粒子5% (226SD)
2. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性普通 しまり普通 地山ブロック2% (226SD)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性普通 しまり堅い 直径5mmの黄色粒子10% (043SD)
4. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性普通 しまり堅い 直径10cmの黄色粒子 30%地山ブロック20% (043SD)
5. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性普通 しまり堅い 地山ブロック20% (043SD)

1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性普通 しまり非常に堅い (226SD)
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性普通 しまり普通 地山ブロック5% (226SD)

図 19 溝断面図 1 1:2,000・1:50

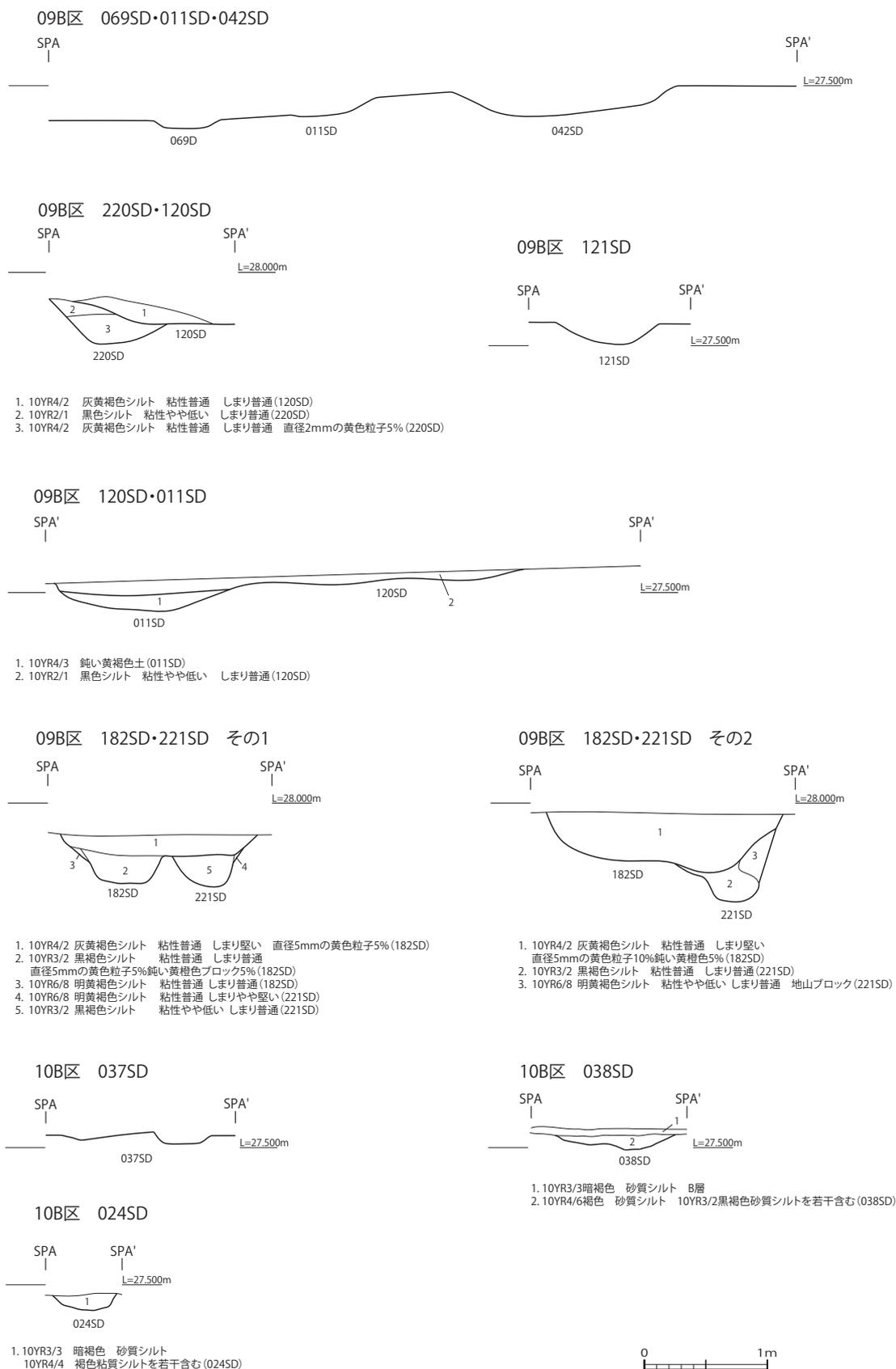


図 20 溝断面図 2 1:50

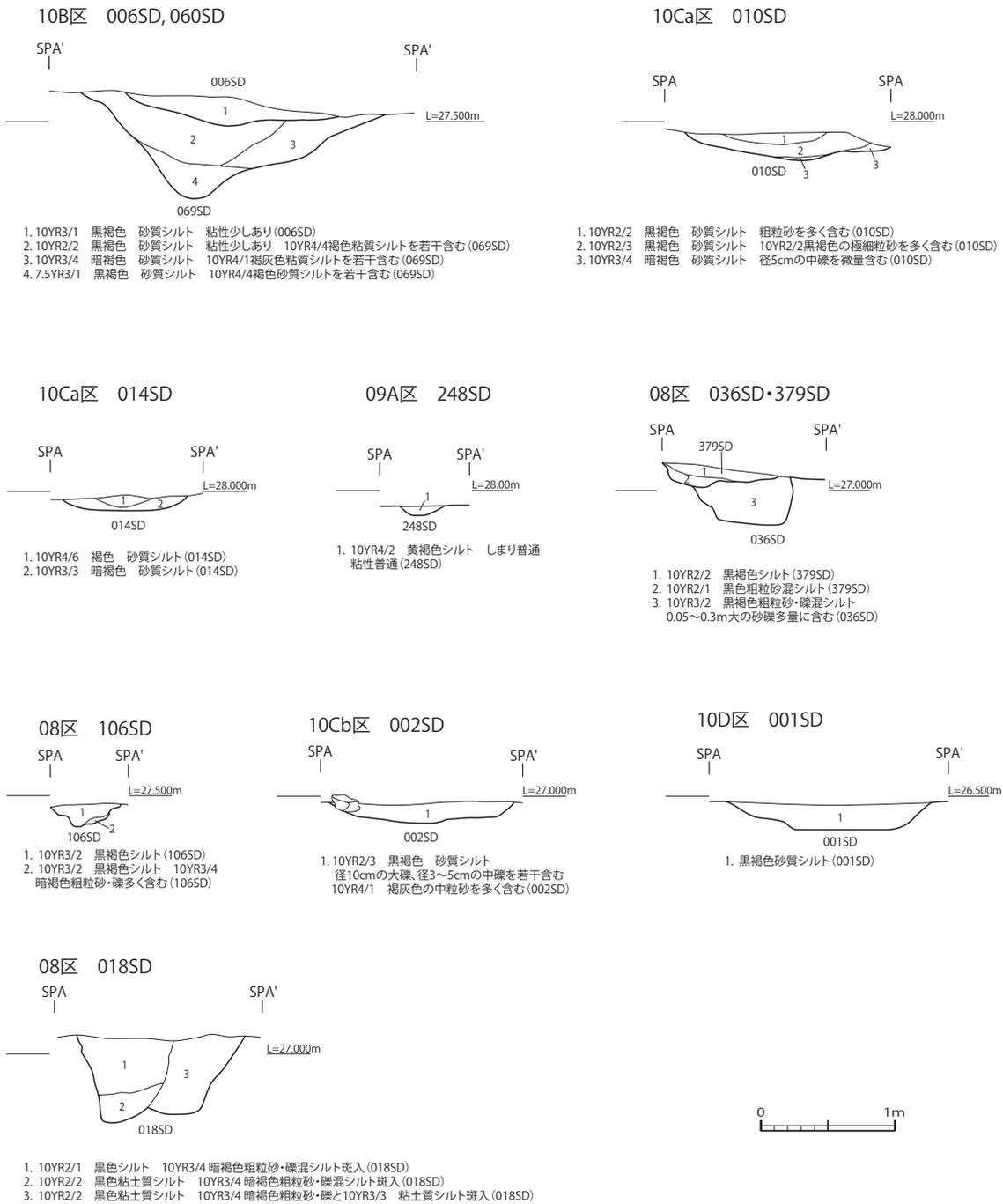


図 21 溝断面図 3 1:50

第三章 遺物

1 概要

今回の調査により出土した遺物は、土器・陶磁器、土製品、石器・石製品、金属製品などがある。帰属時期は縄文時代～近世に及び、コンテナ 26 箱を数える。

以下、出土遺物を土器・陶磁器・土製品、石器・石製品、金属製品に区分して、年度・調査区順に遺構資料を中心に報告する。記述は遺構別の区分を優先させる方針をとる。このため、遺構内に帰属時期よりも古い資料が含まれている場合も遺構資料として報告している。

なお、本章で用いる次期区分は後述する第 V 章に従う。A 期が縄文時代、B 期が弥生時代後期～古墳時代前期、C 期が古墳時代終末期～奈良・平安時代、D 期が平安時代末～中・近世である。法量などのデータは、本書に添付されている CD-ROM に格納する遺物計測一覧（添付データ 2）を参照とする。

2 土器・陶磁器・土製品

(1) 08 区

・08 区 004SI (図 22- 1)

図示した資料は、C 期の湖西産須恵器甕の肩部片 1 点のみである。混入か。

・08 区 013SI (図 22- 2～ 16)

図示した資料は 15 点である。2～13 は B 期に属する。3 は壺の頸部片で、やや退化した断面三角形の突帯を持つ。4 は壺の底部片で、外底部に木葉痕が観察できる。概ね VI—1B 期に属するが、6・9～11 はやや遡るのか。14～16 は混入で、いずれも D 期。14 は山茶碗で渥美産の 6・7 型式、15・16 は土師器皿で、いずれも中世前期。16 は外底部回転糸切り。

・08 区 014SI (図 22-17～ 24)

図示した資料は 8 点である。いずれも B 期に属する。17 は壺の口縁部片で、端部で縁帯を形成する。口縁部の上面と縁帯はクシによる刻目文を羽根状に並べる。19 は甕の口縁部片で、外面はハケメ調整を施し、口縁部の外面端部をイタにより刻む。24 は二重口縁壺の口縁部片か。18 はその底部である可能性を持つ。23 は高杯の脚部で、やや低い。概ね IV—3 期に属するのか。

・08 区 015SI (図 22-25～ 36)

図示した資料は 12 点である。25～30 は B 期に属する資料で、IV 期か。25 は 014SI 出土の 17 と細部まで類似し、接合しないが同一個体である可能性を持つ。27 は口縁部を欠く小型の壺で、横方向のミガキ調整で仕上げる。28 は壺の底部片で、外底部には木葉痕が観察できる。31・32 は小型甕の台部。概ね IV 期に属するのか。33～36 は混入品か。33 は C 期の灰釉陶器の椀もしくは皿の底部片。0—53 号窯式。34～36 は D 期の土師器皿で、35・36 は中世前期、36 は底部片で外底部には回転糸切り痕が確認できる。34 は近世か。

・08 区 019SI (図 22-37～ 39)

図示した資料は 3 点である。B 期に属する資料で、いずれも IV 期か。37 は壺の胴部片で、上部にはクシによる直線文を重ねる。39 は受口状を呈する甕の口縁部片。口縁部の外面端部をイタにより刻む。

・08 区 020SI (図 22-40・ 41)

図示した資料は 2 点である。B 期に属する資料で、いずれも V 期か。40 は壺の口縁部片。41 は高杯

の脚部片で外面はシャープなミガキ調整を施す。裾部は薄く仕上げる。

・08区 O21SI (図 22-42～45)

図示した資料は4点である。42～44はB期に属する。概ねV—1期に属するののか。42は壺で底部と口縁部を欠く。外面は縦方向のミガキ調整を施し、肩部には貝殻による刺突を並べる。口縁部は短く湾曲する。尾張もしくは伊勢からの搬入品か。44は高杯の坏部でやや浅くなるののか。45はD期の土師器皿で中世前期。混入か。

・08区 401SI (図 22-46～49)

図示した資料は4点である。46～49はB期で、IV—3期～V—1期に属する。46は壺の口縁部で、内湾する形状。内外面にはハケメ調整を施す。48は高杯の坏部。

・08区 549SI (図 22-50・51)

図示した資料は2点である。いずれもB期に属する。51は開脚高杯の脚部。V期か。

・08区 001SK (図 23-52・53)

図示した資料は2点である。いずれもB期で、V—1期か。52は開脚高杯の坏部か。図示していないが、坏部に焼成後穿孔がなされているのかも知れない。

・08区 033SK (図 23-54・55)

図示した資料は2点である。いずれもB期に属する。54は壺の口縁部で、端部は縁帯を形成する。この部分は上方に凹線文を施すが、下方は極めて雑な直線文となる。上面には丁寧なミガキ調整を施す。

・08区 548SK (図 23-56)

図示した資料は、B期の高杯の脚部片である。

・08区 453SK (図 23-57)

図示した資料は、B期の高杯の脚部片である。

・08区 468SK (図 23-58・59)

図示した資料は、D期の土師器皿2点である。いずれも口縁部片で、中世前期。

・08区 550SK (図 23-60・61)

図示した資料は2点である。いずれもB期で、60は壺の肩部片。一對の円形浮文の上面を竹管で刻む。61は高杯の脚部。

・08区 556SK (図 23-62)

図示した資料は、B期の鉢底部片である。外面はラフなナデ調整を施す。

・08区 011SP (図 23-63)

図示した資料は、D期の土師器皿である。中世前期。

・08区 025SP (図 23-64)

図示した資料は、C期の湖西産須恵器甕の口縁部片である。口縁部直下に幅の狭い突帯を貼付する。

・08区 476SP (図 23-65)

図示した資料は、D期の土師器皿である。中世前期。

・08区 514SP (図 23-66)

図示した資料は、B期の甕口縁部片である。

・08区 537SP (図 23-67)

図示した資料は、B期の開脚高杯の裾部片である。内面にはススが付着し、何らかに転用されている可能性を持つ。

・08区 036SD (図 23-68～95)

08 区

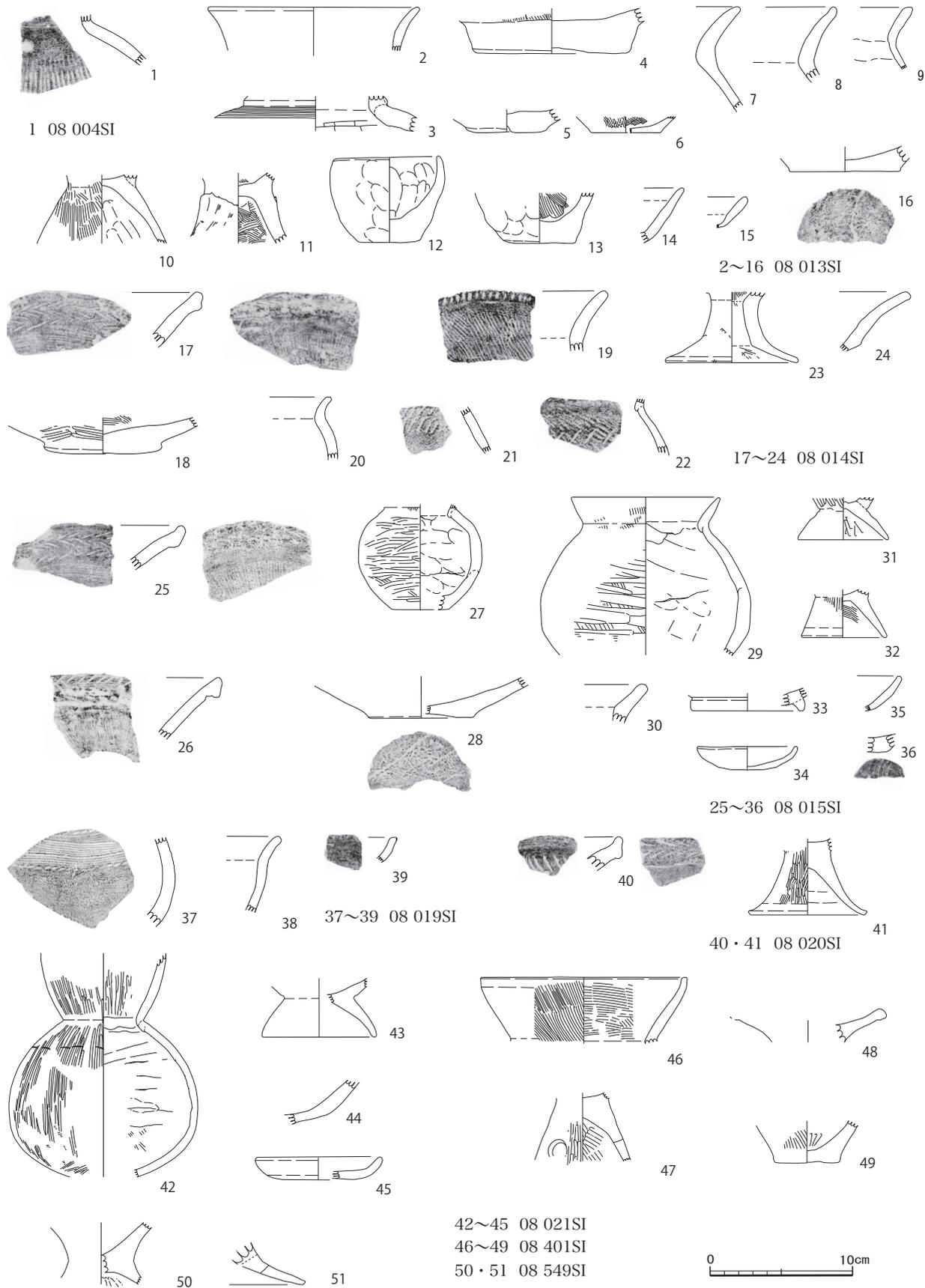


図 22 出土遺物 1

図示した資料は 28 点である。比較的多くの遺物が出土しているが、遺構の帰属時期に近い資料は 86～94 の D 期に属するものか。86～89 は瀬戸・美濃産。86 は筒型湯飲で、登窯 10 小期。036SD の最新資料となる。87～89 は挿鉢で登窯第 1 段階。90～94 は土師器で、90～93 が皿、94 は平安時代末～中世前期の小壺か。外底部に回転糸切り痕を残す。体部は扁平な形状となる。

68・69 は B 期の鉢。73～84 は C 期で、いずれも湖西産の須恵器。8 世紀を中心とするが、72 の坏 H 蓋は 5 世紀末～6 世紀初頭。84 は D 期の山茶碗の底部。渥美産で 6・7 型式。

・08 区 018SD (図 24-96)

図示した資料は、D 期の土師器皿である。中世前期で、ほぼ完形品だが埋土の最上部から出土したもので、混入品と考えられる。

・08 区 452SU (図 24-97・98)

図示した資料は、D 期の土師器皿 2 点である。いずれも中世前期。

・遺構外資料 (図 24-99～116)

図示した資料は 18 点である。99～102 は B 期、103～105 は C 期に属する。104 は長頸瓶、105 は短頸壺となる。いずれも猿投産。106～115 は D 期に属する。107 は天目茶碗。瀬戸産で登窯第 5 小期。110～115 は土師器皿で中世前期か。116 は製塩土器の脚部か。

(2) 09A 区

・09A 区 183SI (図 24-117～119)

図示した資料は 3 点である。いずれも B 期で、V—2 期か。118 は台付甕の底部片。調整後に外面に縦方向のハケメを並べる。S 字甕をまねたものか。119 は高杯の脚部で、やや廻るかもしれない。

・09A 区 023SK (343SB の柱穴) (図 24-120)

図示した資料は、D 期の土師器皿で近世か。

・09A 区 270SK (342SB の柱穴) (図 24-121)

図示した資料は、D 期の天目茶碗底部片で大窯 2 期に属する。

・09A 区 298SK (183SI の支柱穴) (図 24-122)

183SI 内の土坑で、図示した資料は、B 期の壺底部片である。

・09A 区 303SK (183SI の中の柱穴) (図 24-123～125)

183SI 内の土坑で、図示した資料は 3 点である。いずれも B 期で V—2 期に属する壺である。123 は口縁部と底部を欠く。肩部にはややラフなクシによる直線文と波状文を重ね、胴部は丁寧なミガキ調整を施す。124 は口縁部片で端部に縁帯を有する。全体的に器表の摩滅が進むが、縁帯の一部には赤彩痕が観察できる。125 は小型の壺。

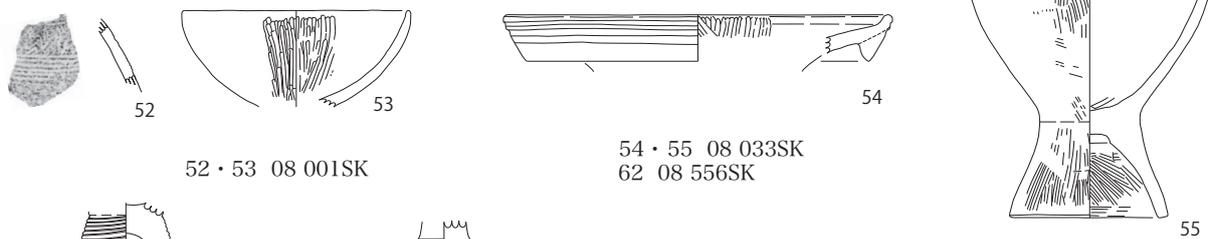
・09A 区 313SK (183SI の支柱穴) (図 24-126)

やはり 183SI 内の土坑で、図示した資料は B 期の甕台部である。

・遺構外資料 (図 24-127～151)

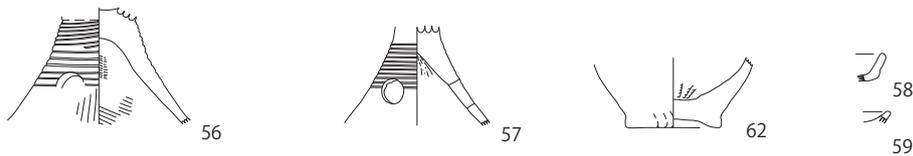
26 点を図示した。127・128 は A 期で、いずれも縄文中期か。表面は風化が進む。129～133 は B 期で、129 は壺の頸部片。内面と外面の下方に赤彩を施す。135～151 は D 期。136 は貿易陶磁の菊皿。137 は初山産の内禿皿で、大窯 3 期に属する。141～151 は土師器で、141～148 は皿。概ね近世だが、147 はやや廻るかもしれない。

08 区



52・53 08 001SK

54・55 08 033SK
62 08 556SK

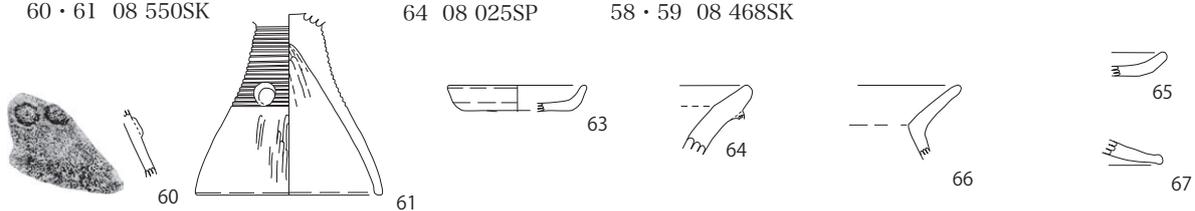


56 08 548SK
57 08 453SK
60・61 08 550SK

63 08 011SP
64 08 025SP

66 08 514SP
58・59 08 468SK

65 08 476SP
67 08 537SP



68~95 036SD

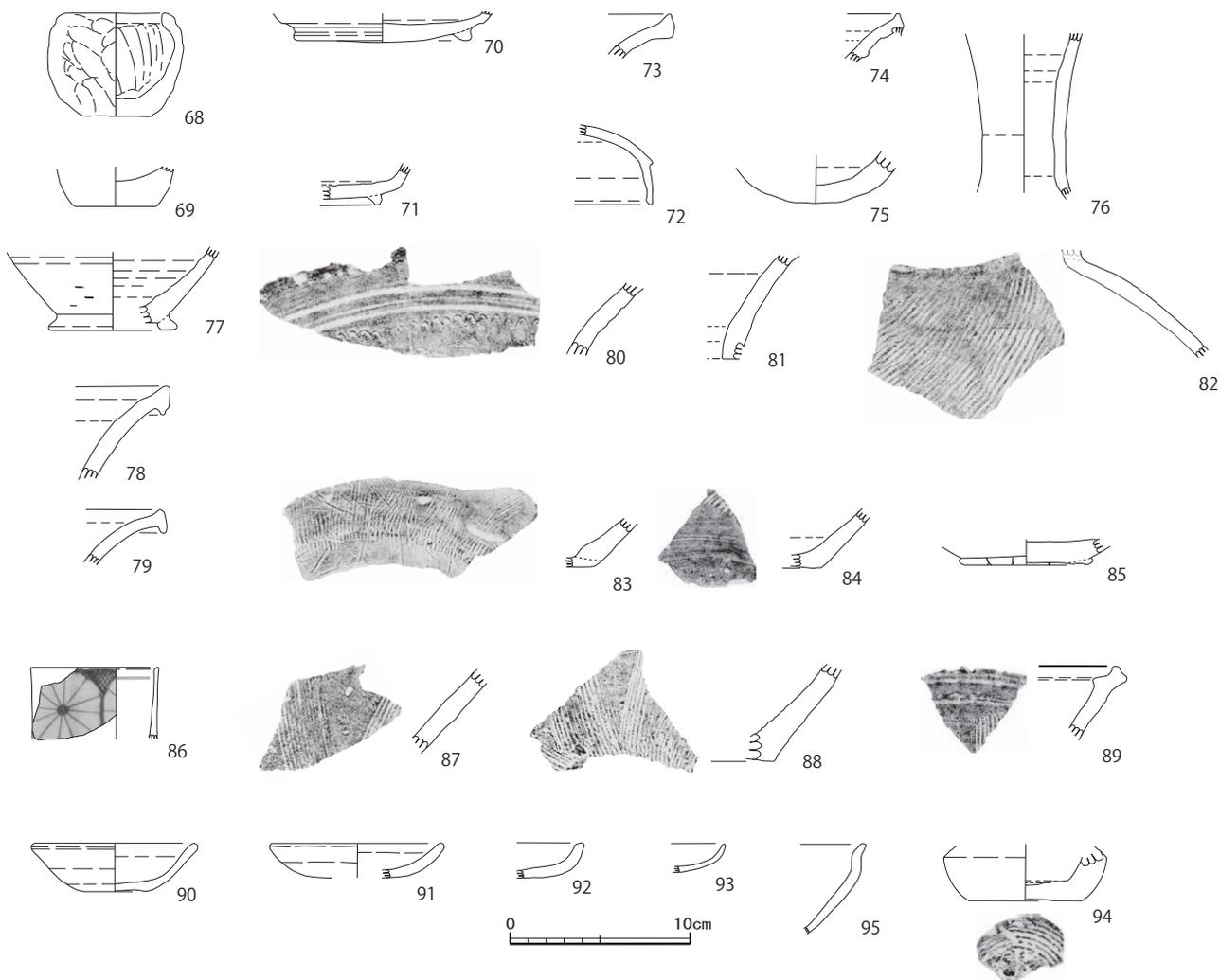
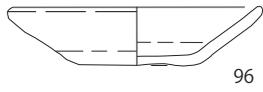
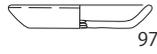


図 23 出土遺物 2

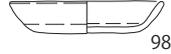
08 区



96



97

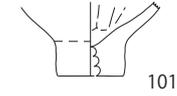


98

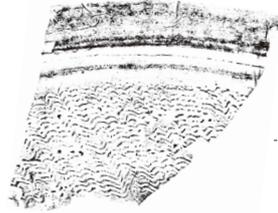
96 08 018SD
97・98 08 452SU
99~116 08 遺構外資料



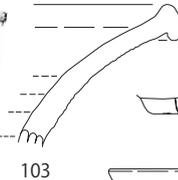
99



101



102



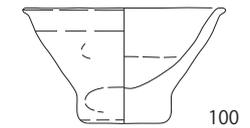
103



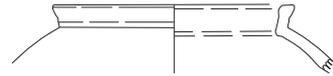
106



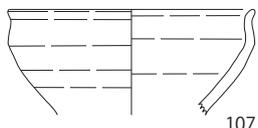
104



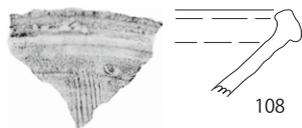
100



105



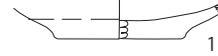
107



108



109



110



116



111



112



113



114



115

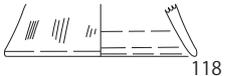
09A 区

117~119 09A 183SI
121 09A 270SK

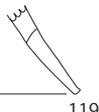
122 09A 298SK
123~125 09A 303SK



117



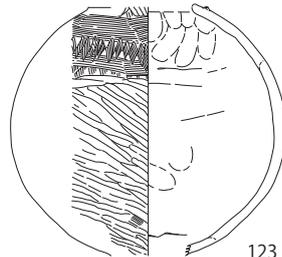
118



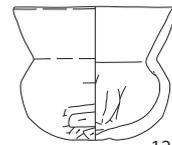
119



121

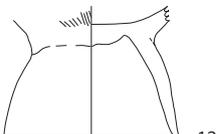


123



125

126 09A 313SK
120 09A 023SK



126



120



124



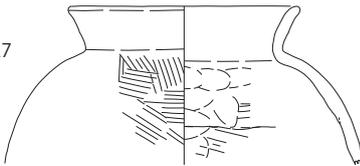
122

127~151 09A 遺構外資料

0 10cm



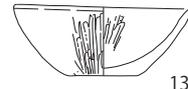
127



130



129



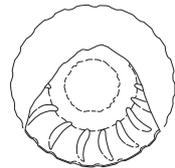
133



134



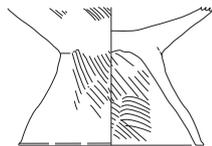
128



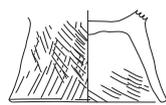
136



137



131



132



135



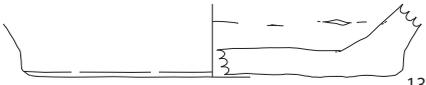
138



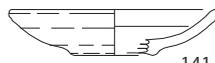
140



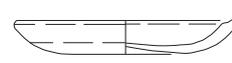
136



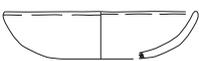
139



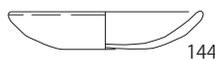
141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151

0 10cm

図 24 出土遺物 3

(3) 09B 区

- ・09B 区 063SK (図 25-152)
図示した資料は、D 期の底部を欠く小碗である。美濃産で登窯第 7 小期。
- ・09B 区 067SK (図 25-153)
図示した資料は、D 期の土師器皿である。近世か。
- ・09B 区 111SK (図 25-154)
図示した資料は、D 期の志野丸皿で、大窯 4 期に属する。
- ・09B 区 178SK (図 25-155 ~ 160)
D 期の大型甕 (158) を埋めた土坑。図示した資料は 6 点である。いずれも D 期で、最新の資料は 157 の播鉢口縁部片で、登窯第 10・11 小期となる。
- ・09B 区 214SK (図 25-161)
図示した資料は、B 期の甕胴部片のみで、外面にケズリ調整を施す。
- ・09B 区 222SK (図 25-162 ~ 168)
図示した資料は 7 点である。いずれも B 期で V—2 期に属する。162・163 は壺、162 は平底で扁平な体部を持つ。163 は口縁部を欠く。164・165 は台付甕で 164 は台部を欠く。165 は台部だが、164 とは別個体となる。166 ~ 168 は高杯で、168 は脚部、167 は坏部を欠く。
- ・09B 区 043SD (図 25-169・170)
図示した資料は 2 点である。いずれも D 期で、169 は天目茶碗で瀬戸産。登窯第 6 小期に属する。なお、042SD から接合した資料が出土している。170 は菊皿で美濃産。登窯第 5・6 小期に属する。
- ・09B 区 060SD (図 25-171)
図示した資料は、D 期に属する播鉢口縁部片で瀬戸産。登窯第 10・11 小期に属する。
- ・09B 区 120SD (図 25-172 ~ 179)
図示した資料は 8 点である。いずれも D 期。最新の資料は 175 の播鉢口縁部片で、登窯第 5 小期となる。173 は志野丸皿。登窯第 1・2 小期に属する。177 ~ 179 は土師器鍋。いずれも近世。
- ・09B 区 121SD (図 25-180)
図示した資料は D 期の土師器皿である。近世。
- ・09B 区 182SD (図 25-181・182)
図示した資料は、D 期の土師器で、181 が皿、182 が鍋である。いずれも近世に属すると思われるが、181 はやや廻るかもしれない。
- ・遺構外資料 (図 25-183 ~ 193)
図示した資料は 11 点である。C 期に属する 183 を除くと、全てが D 期となる。189 は貿易陶磁の染付皿、190 は常滑窯の火鉢。191 ~ 192 は土師器で、いずれも皿である。193 は土師器焙烙。口縁部は面を持たず、丸く調整されている。

(4) 09C 区

良好な資料に恵まれず、図示した資料は存在しない。

(5) 09D 区

- ・09D 区 003SD (台帳だと SK) (図 25-194 ~ 196)
図示した資料は 3 点である。いずれも D 期で美濃産。登窯第 2 段階に属する碗となる。

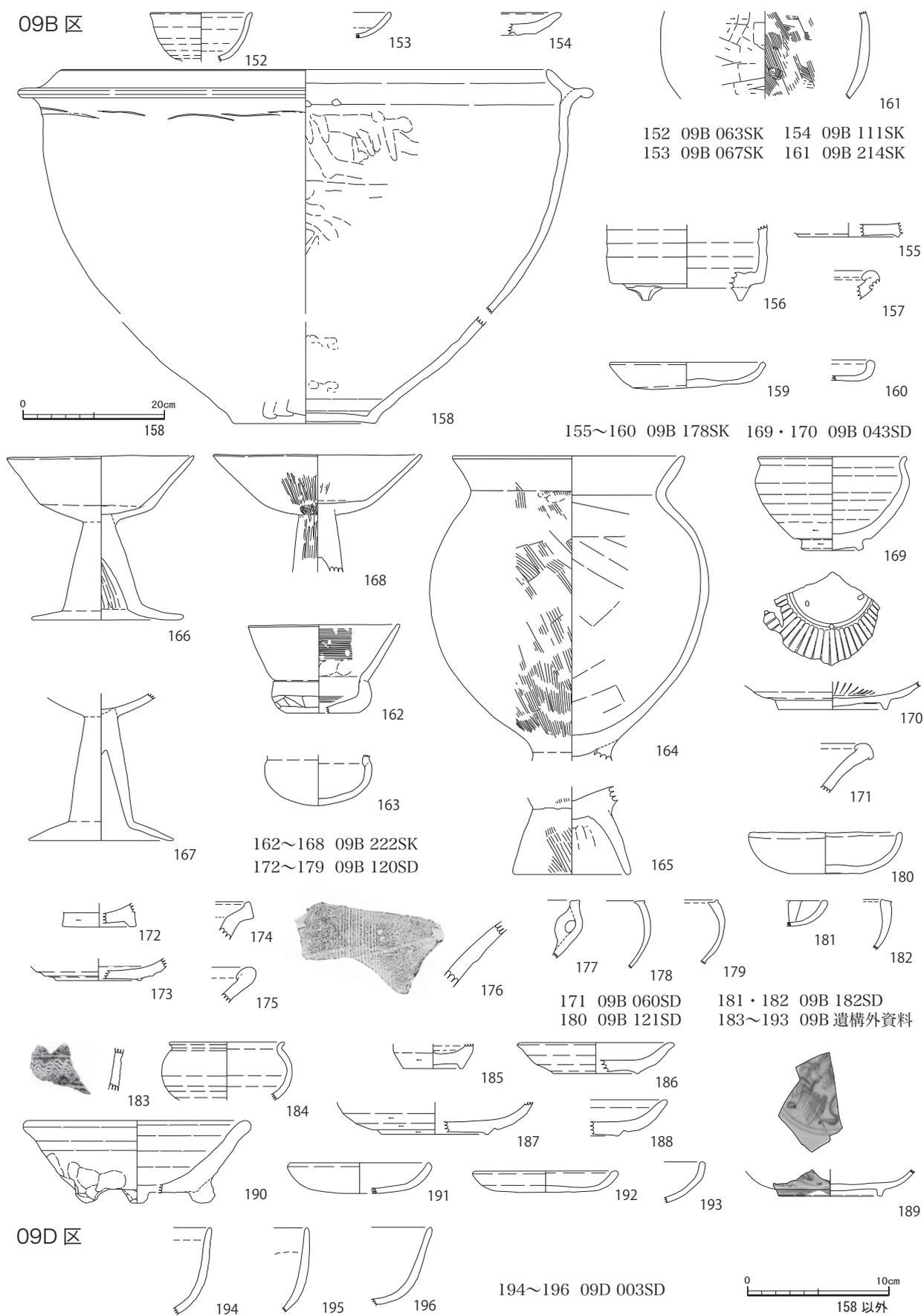


図 25 出土遺物 4

(6) 10A 区

- ・ 10A 区 021SK (図 26-197)
図示した資料は高杯の脚部である。C 期に属するのか。
- ・ 10A 区 036SK (図 26-198)
図示した資料は、C 期の山茶碗で渥美産の 5 型式。
- ・ 10A 区 061SK (図 26-199)
図示した資料は、土師器甕の口縁部片である。C 期に属するのか。
- ・ 10A 区 082SK (図 26-200)
図示した資料は、土師器か。器種・時期は不明となる。
- ・ 10A 区 105SK (図 26-201 ~ 203)
図示した資料は 3 点である。いずれも C 期で 7 世紀か。201 は須恵器で、坏 H か。202・203 は土師器の甕で、接合しないが同一個体と思われる。203 は長胴形を呈する。
- ・ 10A 区 106SK (図 26-204)
図示した資料は、C 期の土師器で把手部分である。
- ・ 10A 区 227SP (図 26-205)
108SI 内の土坑で、図示した資料は口縁部の小片である。C 期の土師器甕か。
- ・ 遺構外資料 (図 26-206 ~ 209)
図示した資料は 3 点である。206 ~ 208 は C 期。206 は坏か。赤彩を施したかもしれない。209 は D 期で、土師器の焙烙。

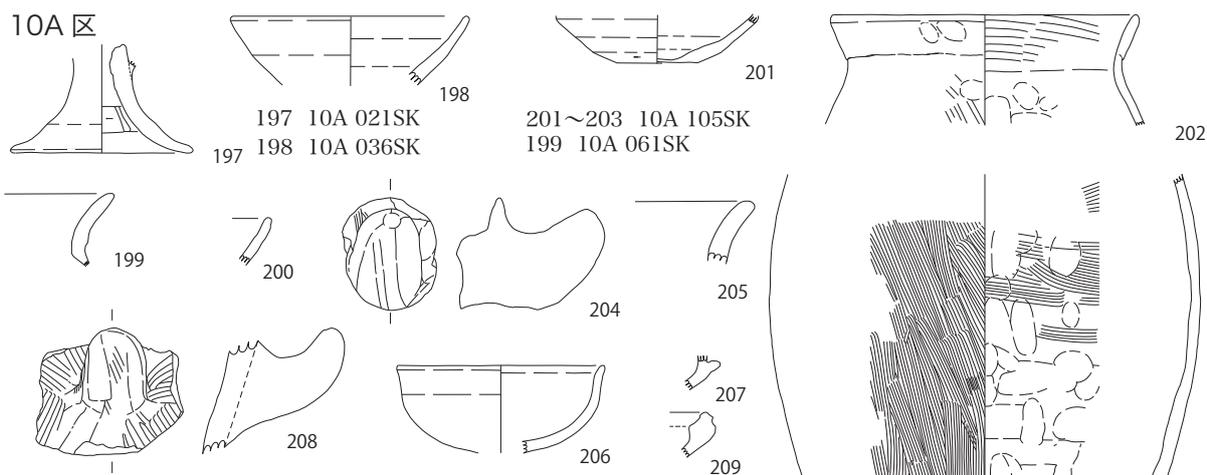
(7) 10B 区

- ・ 10B 区 070SK (図 26-210)
図示した資料は、C 期の山茶碗で渥美産の 6 型式。
- ・ 10B 区 006SD (図 26-211)
図示した資料は、C 期の山茶碗で渥美産の 6 型式。
- ・ 10B 区 007SD (図 26-212 ~ 221)
図示した資料は 10 点である。213 ~ 221 は D 期。213 の半胴甕で、登窯第 3 段階となる。214 は菊皿で、美濃産の登窯 4・5 小期。219 ~ 221 は土師器。いずれも近世で、219 は皿。220・221 は鍋。212 は C 期の山茶碗で、渥美産の 7 型式。混入か。
- ・ 遺構外資料 (図 26-222 ~ 235)
図示した資料は 14 点である。222 は C 期で灰釉陶器碗。猿投産で黒笹 14 号窯式。223 ~ 233 は D 期に属する。224 は筒型湯飲、225 は腰鍔碗となる。いずれも登窯第 10 小期。226 は菊皿で、登窯第 4・5 小期。231 は常滑窯の火鉢で 19 世紀。

(8) 10Ca 区

- ・ 10Ca 区 044SI (図 27-236)
図示した資料は、B 期の甕口縁部片である。
- ・ 10Ca 区 019SK (図 27-237・238)
図示した資料は 2 点である。238 は D 期の碗。登窯第 2 段階。237 は C 期の山茶碗で混入か。
- ・ 10Ca 区 036SX (図 27-239・240)

10A 区



10B 区

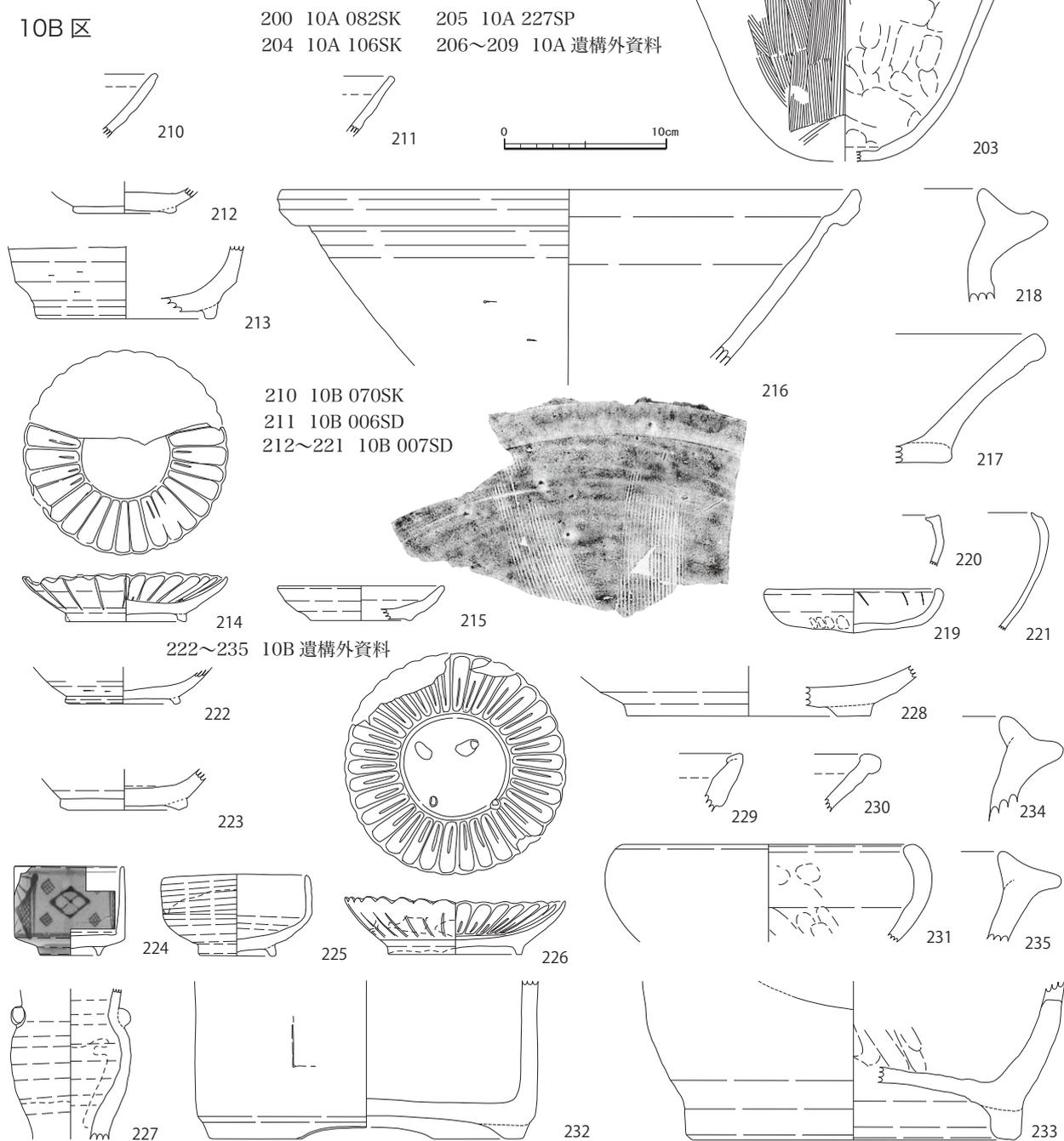


图 26 出土遺物 5

図示した資料は2点である。240はD期の筒型香炉で登窯第2・3小期。登窯第2段階。239はC期の山茶碗で混入か。

・10Ca区 040SX (図 27-241)

図示した資料は、C期の山茶碗で渥美産の5型式。

・遺構外資料 (図 27-242～253)

図示した資料は12点である。242はB期の高杯。242～253はD期で、243～249は山茶碗。252・253は土師器。252は皿で近世。253は器種不明。手づくね整形で、94に類似した小壺とすべきかもしれない。

(9) 10Cb区

・10Cb区 003SI (図 27-254～258)

図示した資料は5点である。いずれもB期で、IV—3期に属する。256は小型の鉢で、胴部の最大径以下にミガキ調整を施す。尾張・伊勢からの搬入品の可能性を持つ。

・10Cb区 007SI (図 27-259)

図示した資料は、B期の高杯の脚部である。

・10Cb区 009SI (図 27-260～265)

図示した資料は6点である。いずれもB期で、V—1期に属する。262は外面ハケメ調整の甕。265は焼成前穿孔を受けた甕の底部片。

・10Cb区 005SK (図 27-266)

図示した資料は、B期の甕の口縁部片である。

・10Cb区 008SK (図 27-267～269)

図示した資料は3点である。柳ヶ坪形壺の肩部片か。

・10Cb区 032SK (図 27-270)

図示した資料は、B期の壺胴部片である。外面にクシによる波状文を施す。

・10Cb区 002SD (図 27-271・272)

図示した資料は2点である。いずれもB期で、V期に属するのかわ。272は高杯の裾部。

・遺構外資料 (図 27-273～280)

8点を図示した。いずれもB期。273は壺の口縁部片で上面に不揃いなクシによる扇形文と波状文を並べる。IV—2期。277は壺の底部片で、環状底となる。外底部には木葉痕も確認できる。

(10) 10D区

・10D区 002SK (図 27-281)

図示した資料は、B期の壺で口縁部片。端部に下方に拡張した縁帯を持つが、拡張部分は剥離して残存しない。

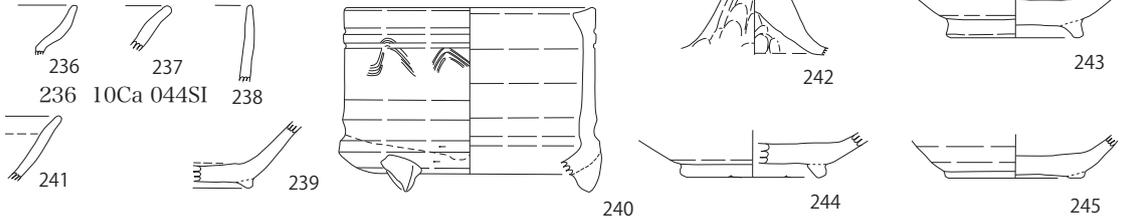
・遺構外資料 (図 27-282)

図示した資料は、B期の高杯である。

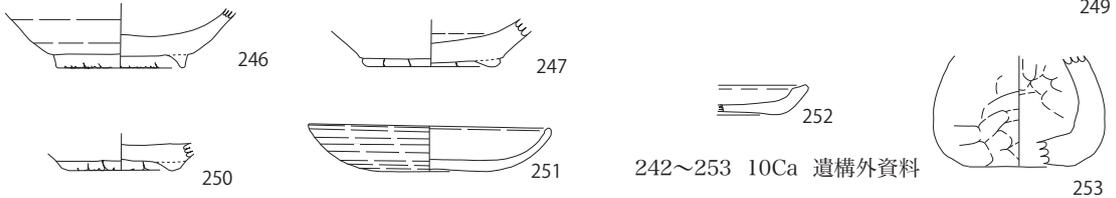
3 石器・石製品 (図 28-283～290)

石器・石製品は出土量が乏しいため、ここでまとめて報告する。なお、この他に図示していないが09A区 183SIから握拳大程度の礫が10点出土している。大半は自然石だが、一部には使用痕が確認で

10Ca 区

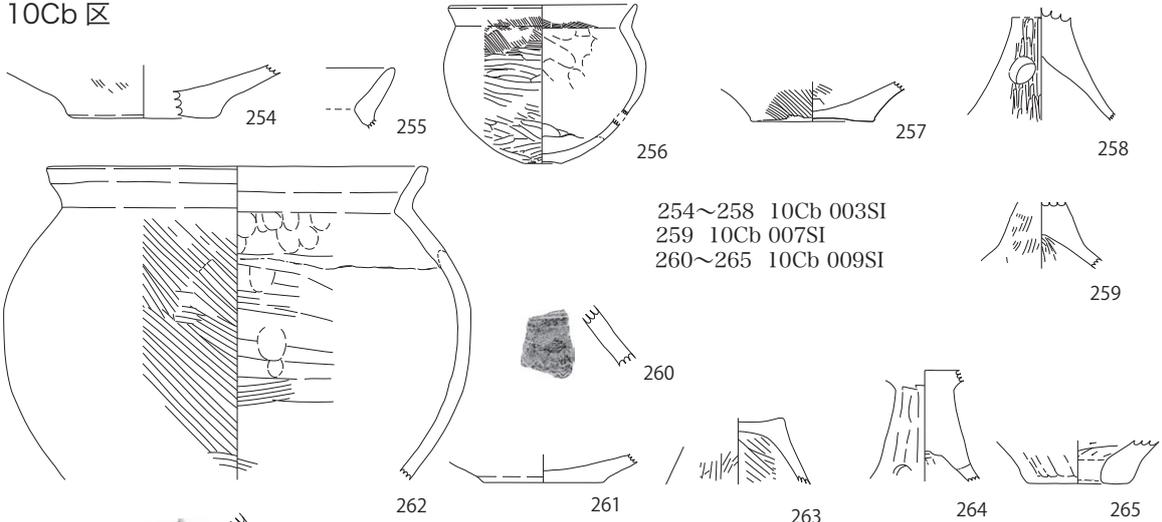


236 10Ca 044SI 238
241 10Ca 040SX 237・238 10Ca 019SK
239・240 10Ca 036SX

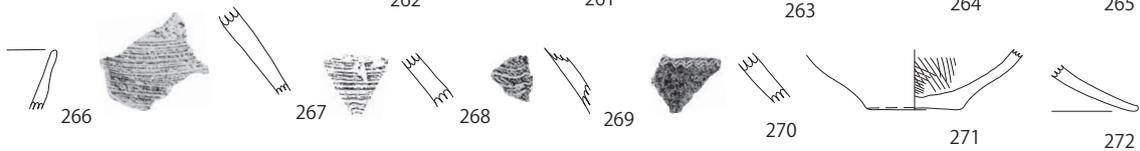


242~253 10Ca 遺構外資料

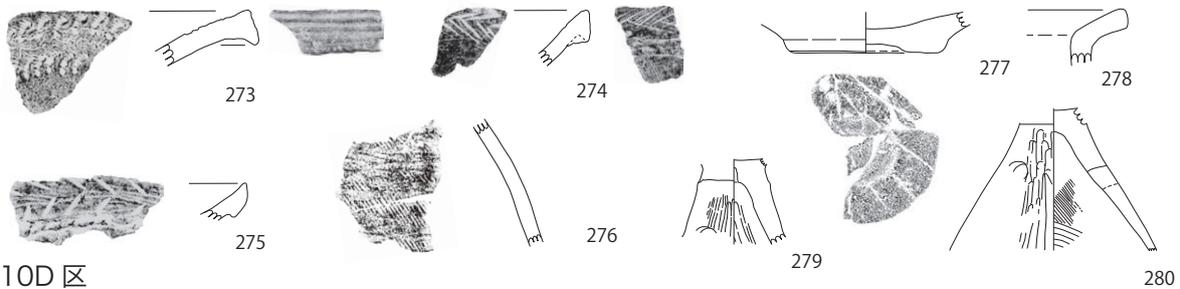
10Cb 区



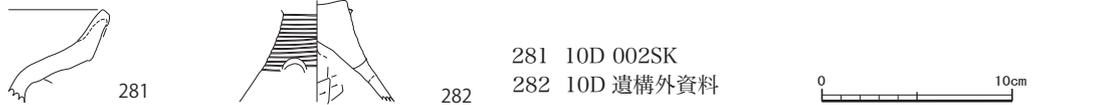
254~258 10Cb 003SI
259 10Cb 007SI
260~265 10Cb 009SI



266 10Cb 005SK 270 10Cb 032SK
267~269 10Cb 008SK 271・272 10Cb 002SD 273~280 10Cb 遺構外資料



10D 区



281 10D 002SK
282 10D 遺構外資料



図 27 出土遺物 6

きるものも含まれている。

283 は縄文時代草創期頃の（木葉形）先尖器か。10B 区の遺構外資料で、石材はチャート。重量は 87.0g をはかる。

284 は石斧。08 区の遺構外資料。くびれ部分が確認できるため、転用である可能性を持つ。石材は塩基性岩。重量は 612.0g をはかる。

285 は使用痕のある剥片で、09A 区の遺構外資料。石材はチャート。縄文時代と思われるが、近世の火打石である可能性も残す。重量は 21.6g をはかる。286 は 09C 区遺構外資料。石材は凝結凝灰岩。重量は 62.3g をはかる。

287・288 は紡錘車。いずれも 08 区の出土で、287 は 550SK 出土、288 は遺構外資料となる。石材は頁岩。重量は、287 が 21.7g、288 が 19.2g をはかる。

289・290 は石硯か。289 が 08 区 036SD、290 が 09D 区 003SD 出土。いずれも頁岩。289 が 25.6g、290 が 30.4g をはかる。

4 金属製品（図 28-291）

291 は錢貨で、錢種は『寛永通宝』となる。裏面は無文となる。重量は 3.0g をはかる。

この他、図示していないが、10A 区 104SK から全長 60mm 程度の棒状の鉄製品が出土している。

（池本正明）

参考・引用文献

- 岩原 剛 2004 「東三河の中世土師器皿・試論」『三河考古学談話会 2004 年 7 月東三河部会発表資料』
 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編 中世・近世 瀬戸系 窯業 2』愛知県
 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史 別編 中世・近世 常滑系 窯業 3』愛知県
 川崎みどり他 2013 「鹿乗川流域遺跡群の土器編年」『変貌する弥生社会』考古学フォーラム 2013

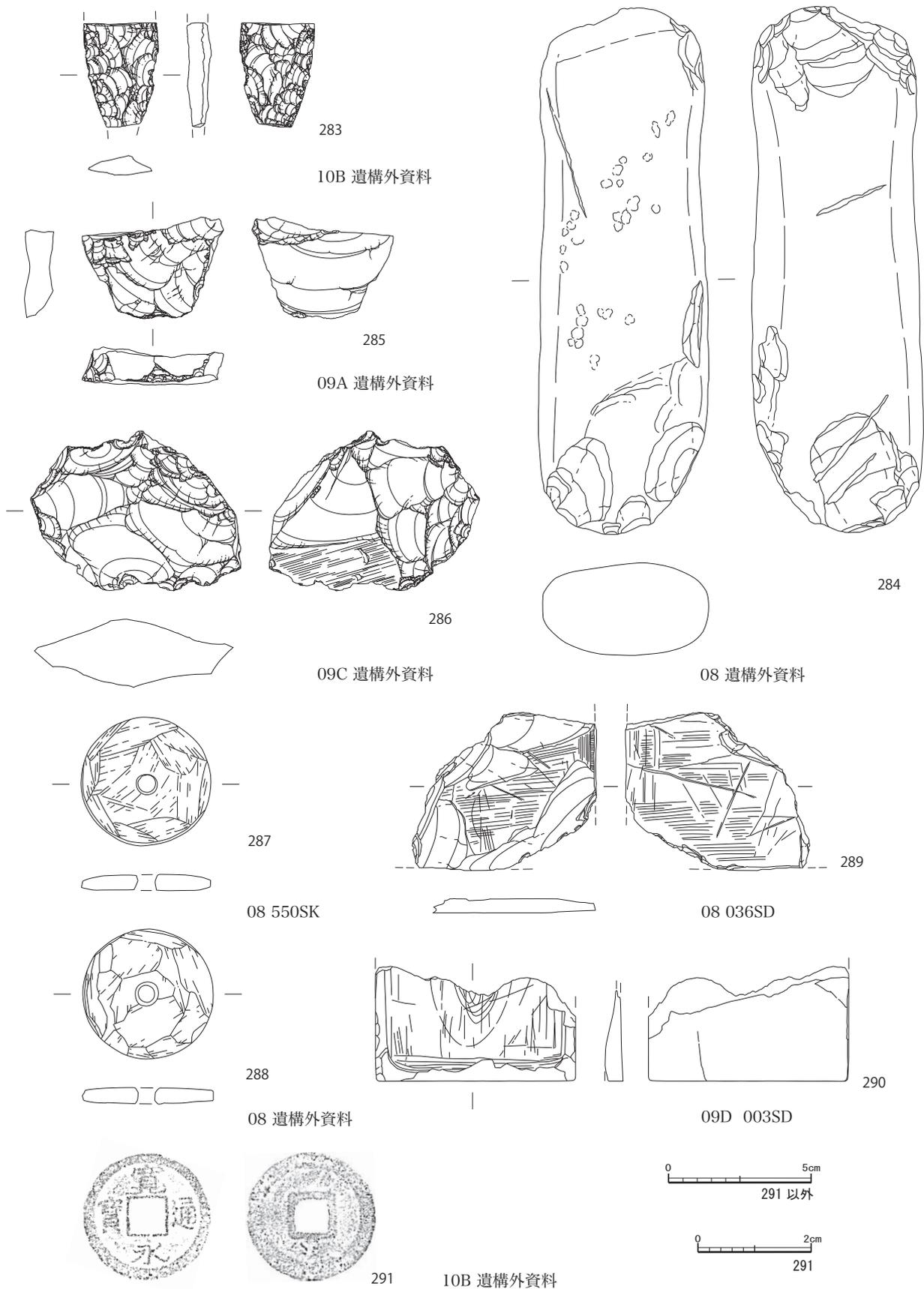


图 28 出土遺物 7

第IV章 科学分析

豊橋市北部、東屋敷遺跡における地下層序

鬼頭 剛

はじめに

豊橋市北部、石巻町の東屋敷遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および火山灰分析の結果を報告する。

試料および分析方法

地下層序解析のため、調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定、火山灰分析のための試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析 (AMS) 法により測定を行なった。試料は 125 μm の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨 (グラファイト) に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正には CALIB4.3 を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ (Code No.; PLD) に依頼した。

テフラ分析の試料は古澤 (2003) の方法を基本に前処理を行なった。洗浄ははじめにナイロン製 #255 メッシュシート (糸径 43 μm 、オープニングワイド 57 μm) を用い、流水中で洗浄した。残渣を #125 メッシュシート (糸径 70 μm 、オープニングワイド 133 μm) を用い水中で篩い分けした。これにより極細粒砂サイズ (1/8 ~ 1/16mm) に粒度調整した試料を超音波洗浄器を用いて洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。薄片作成は、鉱物観察用スライドガラスの上に硬化後屈折率が 1.545 程度となる光硬化樹脂をのせ、この樹脂に洗浄・篩い分けを行なった試料を攪拌・封入させ、カバーガラスで覆い粒子組成観察用薄片を作成した。樹脂の屈折率を 1.545 とする目的は石英や長石類の識別にある。前処理・プレパラート封入した粒子を偏光顕微鏡 (100 倍) を用いて観察し、テフラ純層の場合 300 粒子 (1000 粒子の平均値) を古澤 (2003) の区別手法にしたがって区分した。また、テフラ固有で含有率の低い粒子の産出層準を特定するため 3000 粒子 (10000 粒子の平均値) の粒子組成分析も行なった。屈折率の測定には、浸液の温度を直接測定しつつ屈折率を測定する温度変化型測定装置 "MAIOT" を使用した。測定精度は火山ガラスで ± 0.0001 、斜方輝石および角閃石で ± 0.0002 程度である (古澤, 1995)。測定は株式会社古澤地質に依頼した。

分析結果

深掘層序

北から南へ順に地点 1 (10A 区)、地点 2 (10A 区)、地点 3 (08 区)、地点 4 (08 区)、地点 5 (10D 区) の計 5 地点においてバックホーによる掘削を実施した (図 29)。各地点の層序の特徴を以下に述べる。

最も北側に位置する地点1(10A区)では深度約2.5mの層序断面を得た(図30)。下位層より、標高24.11～24.31mは緑灰色(7.5YR6/1:新版標準土色帖による。以下同様)を呈する粘土層からなる。粘土層には粗粒砂サイズの砂粒子が若干含まれており、塊状・均質で堆積構造はみられない。標高24.16mから緑灰色を帯びた粘土層ごと年代測定用試料として採取した(試料1)。標高24.31～25.67mはにぶい橙色(7.5YR6/4)～褐灰色(10YR6/1)の風化がすすんだ礫層よりなる。ひとつひとつの礫は草刈りガマ(手ガリ)で簡単に破碎され、地質学において礫の風化程度を示す用語である「くさり礫」状を呈する。風化の程度は著しく粘土化が進行しており、礫種を判別できない。粘土からなる基質と比較して礫の形を示すように色調が異なっており、その色調の差によって礫と基質部分が区別できる。礫の淘汰は不良であり、下位層との層理面は色調の差で明瞭である。本層の標高25.43mより試料を採取した(試料2)。標高25.67～25.87mは下位層と同様に、にぶい橙色(7.5YR6/4)～褐灰色(10YR6/1)の風化のすすんだ礫層である。礫は不淘汰でくさり礫となっており、粘土化が著しい。標高25.71mより試料を採取した(試料3)。標高25.87～26.21mは明オリーブ灰色(2.5GY7/1)の礫層である。礫は径20cmの中礫サイズのもの为主体である。本層の礫も不淘汰で風化が著しく、くさり礫となり粘土化している。本層の標高25.90mより試料を採取した(試料4)。標高26.21～26.33mは黒褐色(10YR2/1)の粘土層である。堆積構造はみられない。標高26.24mから土壌を採取した(試料5)。標高26.33～26.61mは黒褐色(10YR2/1)を呈するシルト層からなり、堆積構造はみられない。本層の頂部(標高26.61m)が検出面となる。

地点2(10A区)は調査区の西壁断面において地層の記載と試料の採取を行なった。試料の採取層準は本報告書の挿図の図3にも示している。本地点では深度約1.7mの地層断面を得た(図31)。下位層より、標高25.76～25.98mは灰色(7.5Y6/1)の礫混じりの粘土層である。含まれる礫は風化が著しく、くさり礫状になっている。堆積構造はみられない。標高25.79mより試料を採取した(試料1)。標高25.98～26.25mは褐灰色(10YR6/1)を呈する中礫と砂とが混じる粘土層からなる。礫は径15mm程度のものを主体とする。粘土層は塊状・均質で堆積構造はみられない。標高26.01mで試料を採取した(試料2)。標高26.25～26.66mは褐灰色(10YR6/1)の中礫の混じる粘土質シルト層からなる。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高26.28mで試料を採取した(試料3)。標高26.66～26.84mは黒褐色(10YR3/2)の粘土層である。礫径数cm程度の礫を含む場合がある。堆積構造はみられない。標高26.69mより試料を採取した(試料4)。標高26.84～27.50mは現代の人工的な盛り土である。本層頂部(標高27.50m)は地表面である。

地点3(08区)は調査区の中央付近で深堀を行なった。深度約3.2mの層序断面を得た(図32)。下位層より、標高24.40～25.05mは明黄褐色(2.5Y7/6)の大礫層である。径10cm程度の角礫を主体とし、淘汰は不良である。基質は粘土からなる礫支持礫層である。礫種は石灰岩を主とする。標高24.50mで試料を採取した(試料1)。標高25.05～26.35mは明黄褐色(2.5Y7/6)の中礫層である。径5～10cm程度の角礫を主体とする。淘汰は不良で、礫支持礫層である。基質は粘土である。礫種は石灰岩、チャート、結晶片岩からなる。標高25.08mより試料を採取した(試料2)。標高26.35～27.00mは灰黄褐色(10YR6/2)を呈する大礫層である。径10cm程度の角礫を主体とする。礫種は石灰岩、チャート、結晶片岩からなる。標高26.38mより試料を採取した(試料3)。標高27.00～27.61mは堆積物の粒度とその色調の差異から3層に分けられるが、すべて現代の人工的な盛り土である。

地点4(08区)は調査区の東壁沿いで深堀を実施した。深度約2.3mの層序断面を得た(図33)。下位層より、標高25.94～27.84mはにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する大礫層である。径10cmの角礫を主体とする。基質は粘土からなり淘汰は不良で、礫支持礫層である。石灰岩を主体とし、チャートや

結晶片岩もみられる。標高 27.84～28.24m は黒褐色 (10YR2/3) を呈する粗粒砂混じりのシルト層からなる。径数 cm～10 数 cm の石灰岩からなる角礫を含む。標高 27.86m より試料を採取した (試料 1)。本層の頂部 (標高 28.24m) は現代の地表面となる。

地点 5 (10D 区) では調査区の西側で深堀を実施し、深度約 2.0m の層序断面を得た (図 34)。下位層より、標高 24.70～25.20m はにぶい黄色 (2.5Y6/3) の中礫層である。径 10 数 cm 程度の礫を主体とし、含まれる礫はくさり礫状を呈しており、著しく風化が進行し粘土化している。風化の程度はすすんでいるものの、基質である粘土とは礫の粒度や色調の差から区分できる。淘汰不良な礫支持礫層である。標高 24.74m で試料を採取した (試料 1)。標高 25.20～26.00m は灰褐色 (7.5YR5/2) の巨礫層である。径は 10cm 以上のものを主体とし、最大で長軸 40cm の角礫もみられた。淘汰は不良で、基質は粘土からなる。礫支持礫層である。礫種は石灰岩、チャート、結晶片岩からなる。標高 25.24m で試料を採取した (試料 2)。標高 26.00～26.50m は黒褐色 (10YR3/2) の巨礫層である。下位層と同じように径数 10cm の角礫を主体としているが、基質は黒色を呈する粘土で充填されており、明瞭な色調の差となって区分できる。礫支持礫層である。礫種は石灰岩を主体とし、チャートや結晶片岩もみられる。標高 26.04m で試料を採取した (試料 3)。標高 26.50～26.80m は灰白色 (2.5Y7/1) の礫混じりシルト層からなる。堆積構造はみられない。地表からの植物の根の密度がとても高いのが特徴である。標高 26.54m で試料を採取した (試料 4)。本層の頂部 (標高 26.80m) が地表面となる。

放射性炭素年代測定

調査区の北から順に地点 1 (10A 区) で 5 試料、地点 3 (08 区) で 2 試料、地点 4 (08 区) で 1 試料、地点 5 (10D 区) で 4 試料の、4 地点で計 12 試料の放射性炭素年代測定値を得た (表 2)。古い値では、地点 1 (10A 区) の標高 25.67～25.87m にみられた礫層の標高 25.71m より採取した炭化植物遺体が 25655 - 24979 (95.4%) cal yrs BP (PLD-23131)、この地層を覆って標高 25.87～26.21m にみられる礫層の標高 25.90m より採取した土壌が 8411 - 8316 (95.4%) cal yrs BP (PLD-23132) と、約 2 万 5000 年前代と約 8000 年前代を超える数値年代を示した。いっぽう、新しい数値年代では地点 1 (10A 区) の標高 24.11～24.31m の緑灰色粘土層の標高 24.16m から採取した土壌が 3567 - 3443 (94.6%) cal yrs BP (PLD-23134)、その上を覆う標高 24.31～25.67m の礫層において標高 25.43m より採取した炭化した植物遺体が 1817 - 1691 (83.6%) cal yrs BP (PLD-23131)、地点 5 (10D 区) の標高 26.50～26.80m の礫混じりシルト層から採取した土壌が 1826 - 1710 (94.0%) cal yrs BP (PLD-23139) と、約 3500 年前代と約 1800～1700 年前代の年代値を示した。

火山灰分析

地点 1 (10A 区)、地点 4 (08 区)、地点 5 (10D 区) では放射性炭素年代測定を行なった試料と同じ試料を用いて火山灰分析も行なった (図 30、図 32・図 35・図 34)。地点 2 (10A 区) では火山灰分析のみを実施した (図 31)。鬼界葛原 (K-Tz) 火山灰、始良 Tn(AT) 火山灰、鬼界アカホヤ (K-Ah) 火山灰が検出・同定された。これら火山灰の噴出年代について、鬼界葛原 (K-Tz) 火山灰が約 9.5 万年前、始良 Tn(AT) 火山灰が約 2 万 9000 年前～2 万 6000 年前、鬼界アカホヤ (K-Ah) 火山灰が約 7300 年前と報告されている (町田・新井, 2003)。噴出年代の古い鬼界葛原 (K-Tz) 火山灰は、地点 1 (10A 区) の標高 24.31～25.67m にみられた礫層における標高 25.43m の層準と、地点 2 (10A 区) の西壁において標高 25.76～25.98m の灰色を呈する礫混じりの粘土層の、標高 25.79m の層準より検出された。いっぽう、始良 Tn(AT) 火山灰と鬼界アカホヤ (K-Ah) 火山灰は地点 1 (10A 区)、地点 2 (10A 区)、

地点4 (08区)、地点5 (10D区)において、下位層の礫層を覆ういわゆる黒ボク土状の黒褐色を呈するために上位層と下位層とが堆積物の明瞭な色調の差として区分できる、標高26.0～28.0mまでに認められる層準から検出された。また、地層を構成する粒度とは相関がなく、始良 Tn(AT) 火山灰と鬼界アカホヤ (K-Ah) 火山灰とが混在して検出されることに特徴がある。

考 察

東屋敷遺跡の地下層序

東屋敷遺跡において深掘を実施した。それらの地下層序を観察すると、地層全体では下部層を構成する礫を主体とする粗粒な層相と、上位のシルト～粘土を主として細粒なものが卓越する層相とに大きく2分される。下位で見られる礫層は角礫を主とした礫支持礫層であった。堆積粒子がつくる配列にみられる方向性、専門的に言えばファブリック (fabric) は認められず、淘汰度も悪く、礫と礫とが無秩序に配列していた。このような礫の堆積機構は多量の降雨があったときに泥流となって礫を下流へ運ぶ土石流などで形成されたものである。この礫層の堆積年代について、今回もっとも北側に設定された地点1 (10A区) では標高25.67～25.87mに風化のすすんだ礫層が認められ、本層の標高25.71mより採取された炭化した植物遺体が25655 - 24979 (95.4%) cal yrs BP (PLD-23131) と約2万5000年前代の上部更新統を示す年代値が得られた。また、本層準の放射性炭素年代測定を行なった同じ試料からは約9.5万年前に噴出したとされる鬼界葛原 (K-Tz) 火山灰も検出されており、今回分析を行なった試料の中ではもっとも古い年代値を示した。いっぽうで、調査地点の南側にある地点3 (08区) では標高25.05～26.35mに明黄褐色の中礫層が認められ、標高25.08mより採取した土壌が7008 - 6885 (93.9%) cal yrs BP (PLD-16193)、標高26.35～27.00mの大礫層の標高26.38mより採取した土壌が7331 - 7251 (87.4%) cal yrs BP (PLD-16194) を示した。地点4 (08区) において、標高27.84～28.24mに認められた黒褐色の粗粒砂混じりシルト層の標高27.86mより採取した土壌は5057 - 4954 (75.4%) cal yrs BP (PLD-16195)、地点5 (10D区) において標高24.70～25.20mの中礫層の標高24.74mから採取した土壌は4628 - 4511 (69.2%) cal yrs BP (PLD-23126)、標高26.00～26.50mの黒褐色巨礫層の標高26.04mから採取した土壌が7435 - 7319 (95.4%) cal yrs BP (PLD-23128) と、それぞれ約1万年前以降の完新統の年代値であった。

このように、礫層は調査地点の南では約1万年よりも新しい堆積年代を示すが、調査地点の北では上部更新統と、より古い堆積年代であった。この成因について、三輪川を挟んで今回の調査地の対岸 (南側) に位置する西浦遺跡において、筆者は三輪川流域の現在の地形を解析するために等高線図を作成している (鬼頭, 2011)。その解析結果から三輪川の北には標高26～27mに緩傾斜面が認められ、さらに緩傾斜面には標高20.0～27.2mに東から西へ開いた谷状の地形が認められた。今回の発掘調査では調査区の北にある10A区の北端部には小谷が検出されており (永井, 2011)、この小谷は地形解析で現われた標高20.0～27.2mで西へ開口した谷状地形の南側縁辺にあたる。10A区で実施した深掘では標高25.67～25.87mには礫層が認められ、約2万5000年前代の数値年代とともに約9.5万年前の鬼界葛原 (K-Tz) 火山灰も検出された。ところが、それらの堆積年代が得られた地層のさらに下位層では、例えば、標高24.11～24.31mの緑灰色粘土層の標高24.16mから採取した土壌は3567 - 3443 (94.6%) cal yrs BP (PLD-23134) の数値年代であり、明らかに地層の堆積年代の逆転が生じている。谷状地形を埋めている礫層を構成している礫は、調査地点の南で認められる礫層の礫に比べて明らかに風化がすすんでおり、「くさり礫」状であることに特徴があった。谷状の地形を形成しているため、傾斜面を流下する降水はこの谷の凹部に集中する。約3500年前代を示す緑灰色粘土層の上を覆う礫層は、三輪川上

流部の礫層が浸食されて調査地点に運ばれてきた二次的な堆積物である。東屋敷遺跡のさらに北に位置する多り畑遺跡からは縄文時代早期の土器片が検出されており、10A 区の最下位層で完新統の数値年代が得られたことも調和的である。

謝 辞

本論を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomatatidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎・竹原弘展の各氏に、火山灰分析では株式会社古澤地質の古澤 明氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文 献

- 鬼頭 剛 2011 「豊橋市北部、西浦遺跡における地下層序と表層地形解析」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 165 集 西浦遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 145-153.
- 町田 洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス - 日本列島とその周辺 -』東京大学出版会 336p.
- 永井邦仁 2011 「東屋敷遺跡」『平成 22 年度愛知県埋蔵文化財センター 年報』愛知県埋蔵文化財センター 49-50.

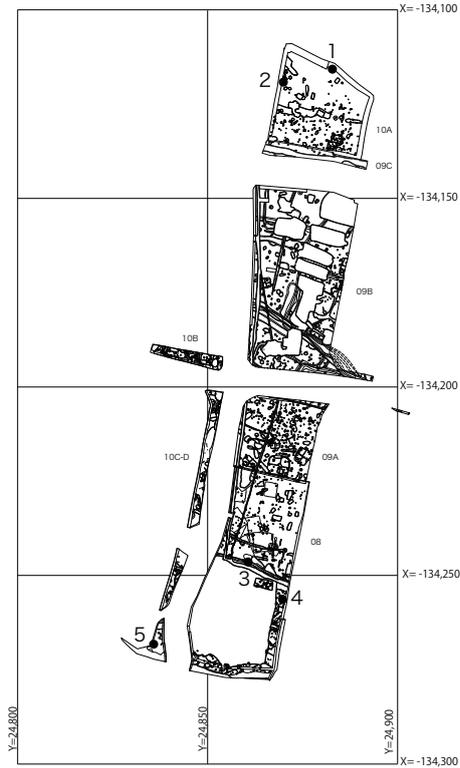


図 29 東屋敷遺跡における深掘調査地点 数字は地点番号を示す

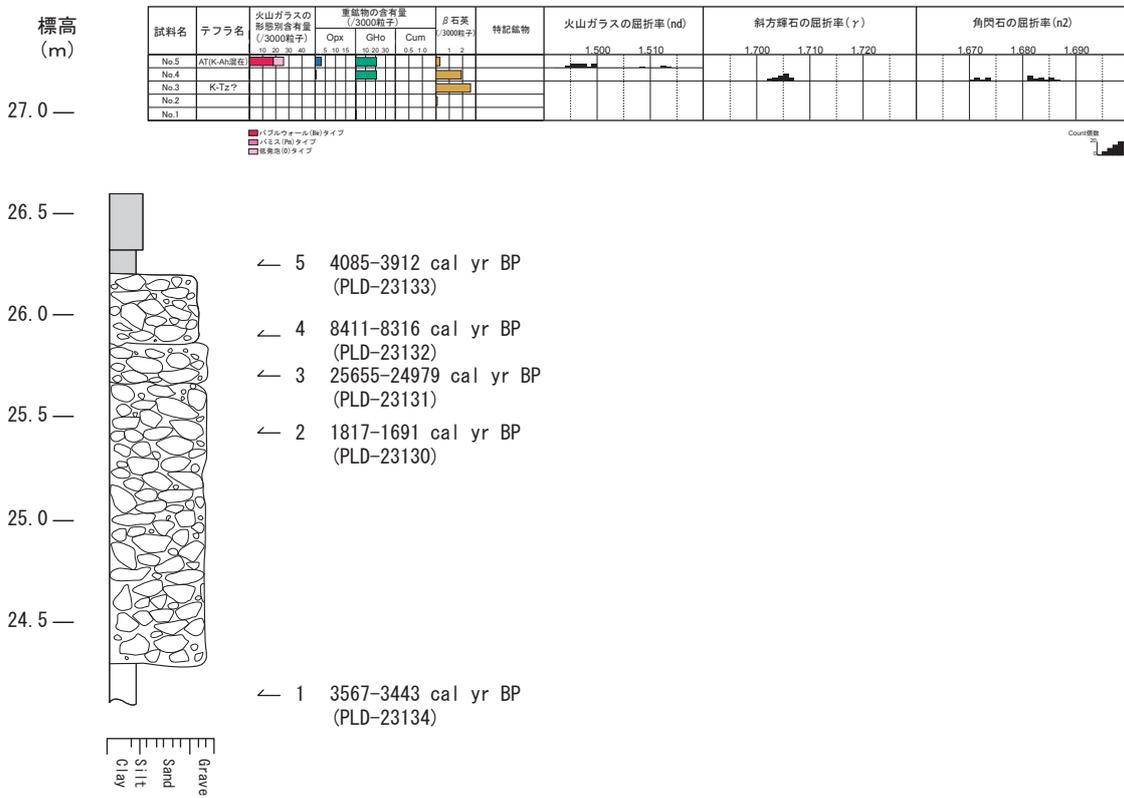


図 30 地点 1 (10A 区) における深掘柱状図
放射性炭素年代測定 (cal yrs BP と測定コード番号) と火山灰分析結果も示す

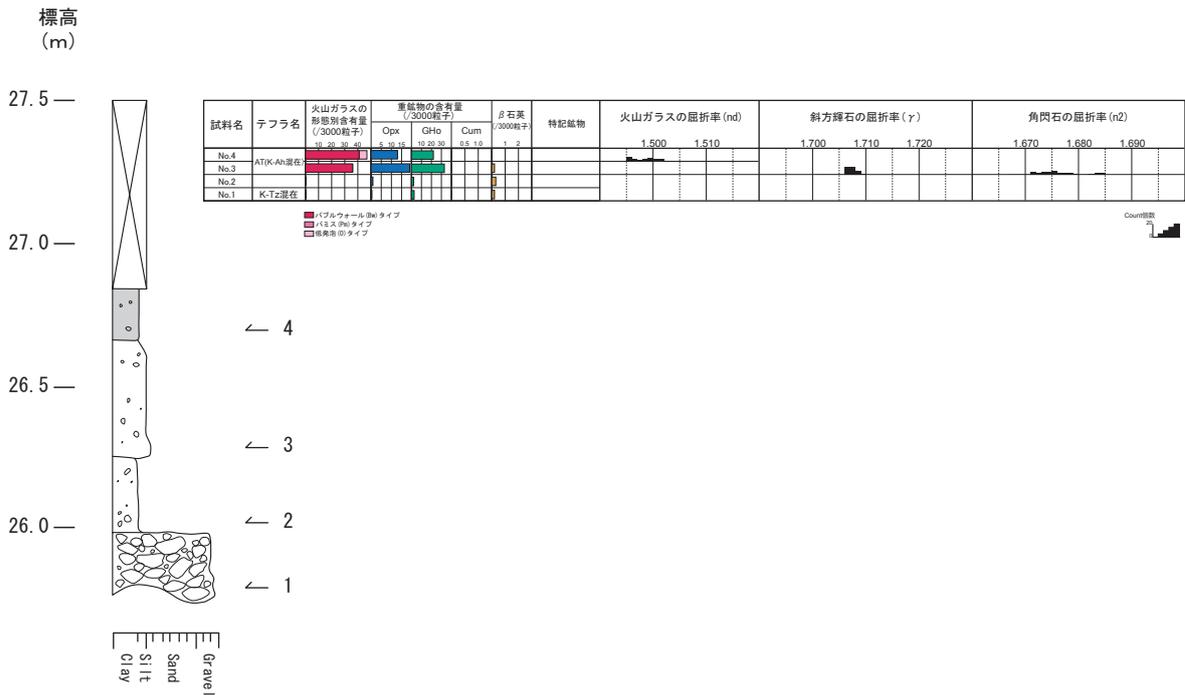


図 31 地点2 (10A 区) における深掘柱状図 火山灰分析結果も示す

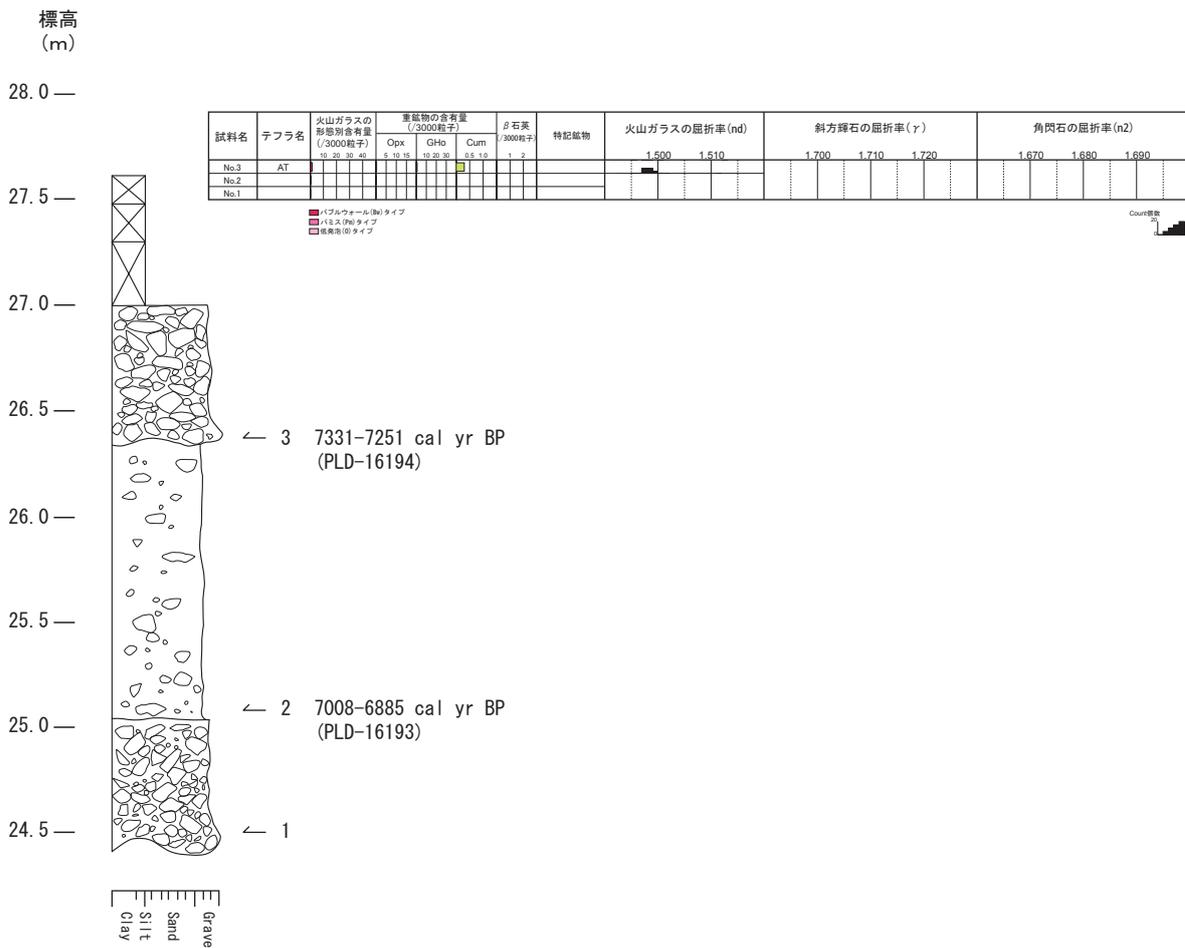


図 32 地点3 (08 区) における深掘柱状図
放射性炭素年代測定 (cal yrs BP と測定コード番号) と火山灰分析結果も示す

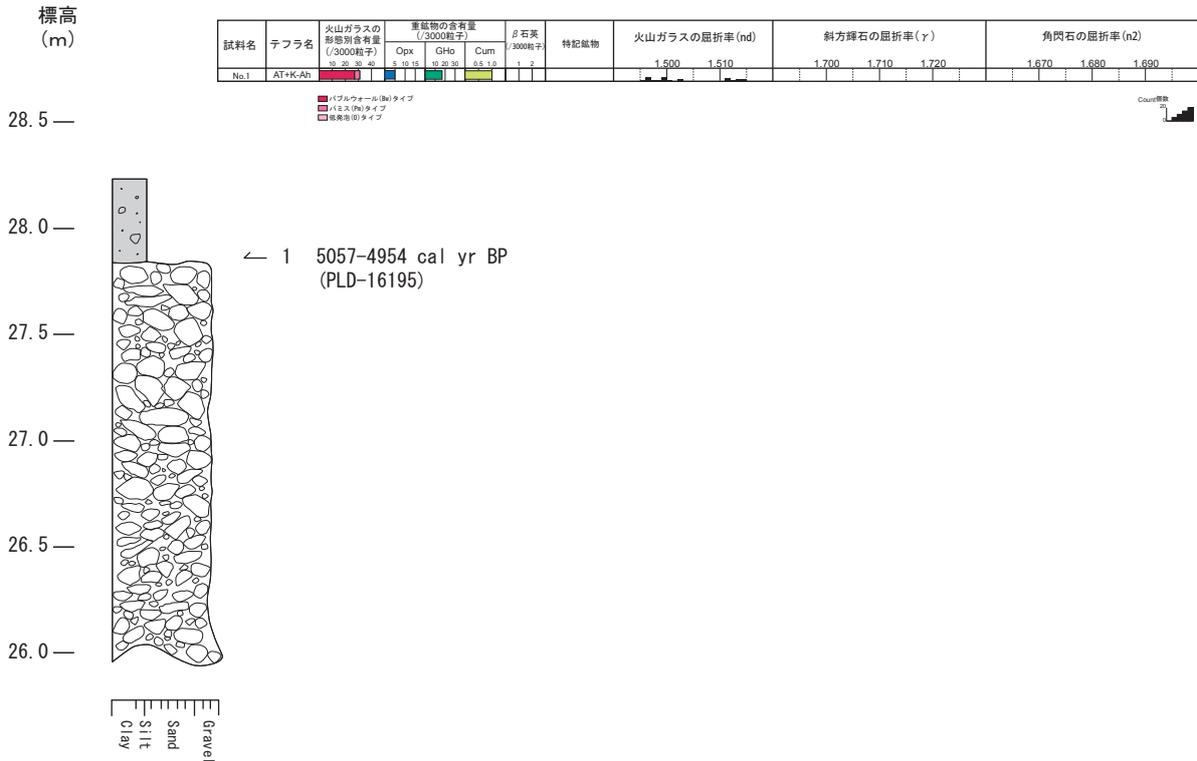


図 33 地点 4 (08 区) における深掘柱状図
放射性炭素年代測定 (cal yrs BP と測定コード番号) と火山灰分析結果も示す

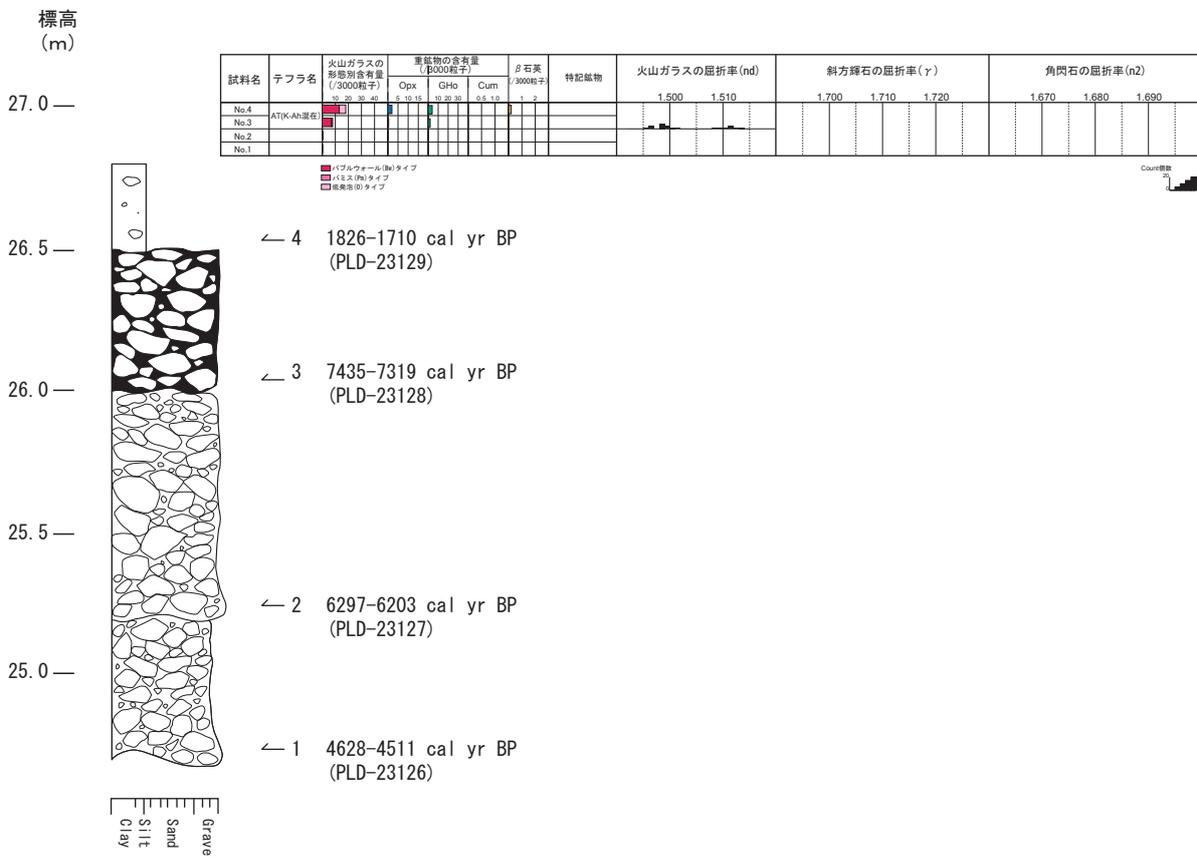


図 34 地点 5 (10D 区) における深掘柱状図
放射性炭素年代測定 (cal yrs BP と測定コード番号) と火山灰分析結果も示す

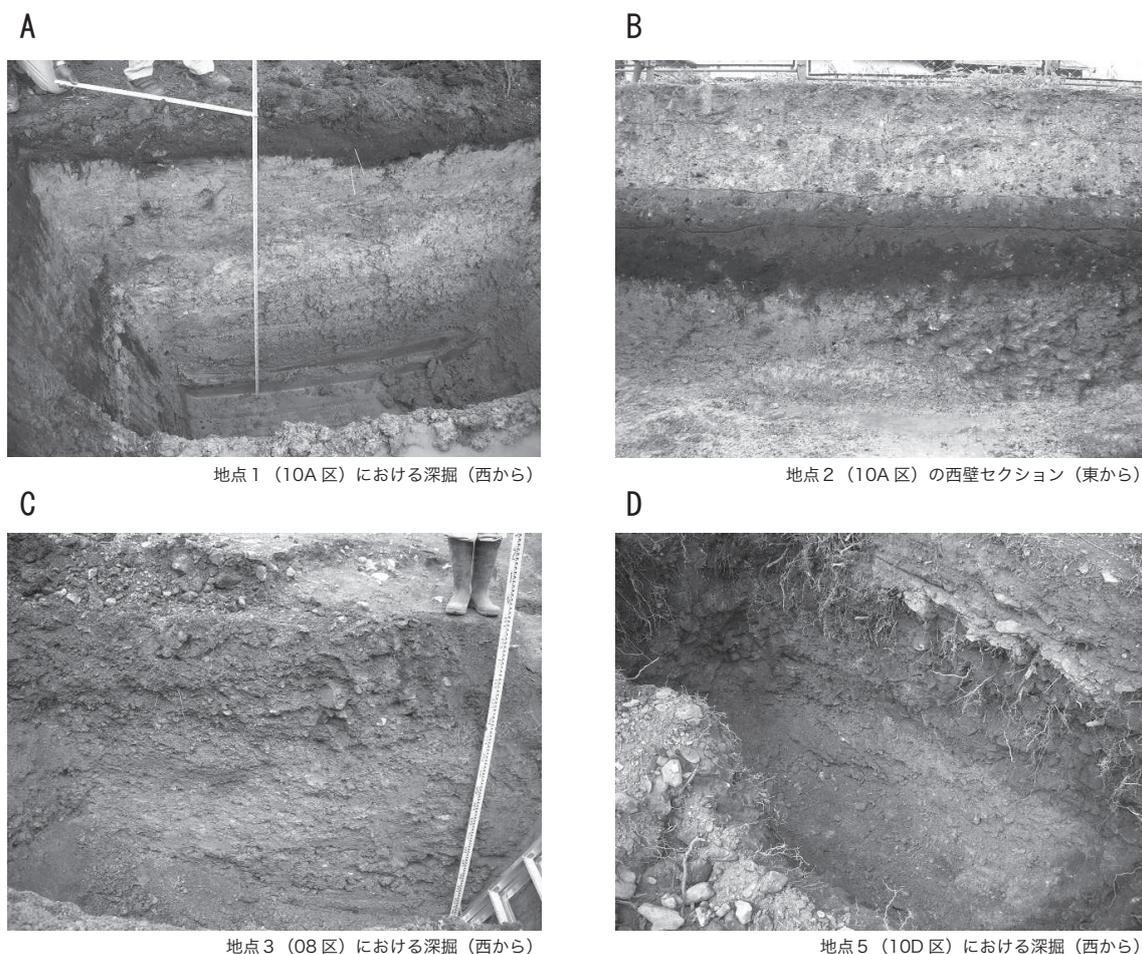


図 35 各地点における地層断面写真

表 2 東屋敷遺跡における放射性炭素年代測定結果

地点	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ C PDB (‰)	暦年代較正值 (1σ, cal yrs BP)	2σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
1	10A	24.16	緑色粘土層	土壌	3270±25	-24.24±0.14	3270±25	BC 1618-1494 (94.6%)	3567-3443 (94.6%)	FLD-23134
1	10A	25.43	橙色～白色風化礫層	炭化植物遺体	1795±20	-24.89±0.16	1794±22	AD 134-260 (83.6%)	1817-1691 (83.6%)	FLD-23130
1	10A	25.71	橙色～白色礫層	炭化植物遺体	21200±80	-22.64±0.13	21199±75	BC 23706-23030 (95.4%)	25655-24979 (95.4%)	FLD-23131
1	10A	25.90	緑灰色礫層	土壌	7540±30	-25.38±0.13	7538±31	BC 6462-6367 (95.4%)	8411-8316 (95.4%)	FLD-23132
1	10A	26.24	黒褐色粘土層	土壌	3665±25	-24.98±0.13	3667±25	BC 2136-1963 (95.4%)	4085-3912 (95.4%)	FLD-23133
3	08	25.08	褐色中礫層	土壌	6085±25	-22.81±0.11	6086±23	BC 5059-4936 (93.9%)	7008-6885 (93.9%)	FLD-16193
3	08	26.38	褐色大礫層	土壌	6365±25	-24.08±0.13	6363±23	BC 5382-5302 (87.4%)	7331-7251 (87.4%)	FLD-16194
4	08	27.86	黒褐色粗粒砂混じりシルト層	土壌	4430±20	-24.64±0.14	4428±21	BC 3108-3005 (75.4%)	5057-4954 (75.4%)	FLD-16195
5	10D	24.74	黄褐色角礫層	土壌	4070±25	-22.77±0.16	4070±25	BC 2679-2562 (69.2%)	4628-4511 (69.2%)	FLD-23126
5	10D	25.24	巨礫層	土壌	5445±30	-22.77±0.14	5445±28	BC 4348-4254 (95.4%)	6297-6203 (95.4%)	FLD-23127
5	10D	26.04	基質が黒褐色粘土よりなる巨礫層	土壌	6475±30	-24.35±0.13	6475±30	BC 5486-5370 (95.4%)	7435-7319 (95.4%)	FLD-23128
5	10D	26.54	灰白色礫混じりシルト層	土壌	1835±25	-24.67±0.13	1837±23	AD 125-240 (94.0%)	1826-1710 (94.0%)	FLD-23129

第V章 まとめ

1 主要遺構の変遷

ここでは、今回の調査で確認できた遺構を時期別に整理する。前述した様に、検出できた遺構は第1面～第3面の遺構面に区分できる状況であった。しかし、全体的に上部の削平が著しく、実際には第3面で全ての遺構を把握している場合が多い。上記の理由から、主に出土遺物・重複関係などを根拠にする。前述した様に今回の調査区では遺構の残存状況が良好とは言えず、出土遺物も断片的となっている。このため、多分に恣意的な区分となってしまった事は否めない。図36・37に提示した主要遺構の変遷案は、こうした問題点を内在させている事をあらかじめ断っておく。

・A期（縄文時代）

明確な遺構は確認されていない。尖頭器を含めてもこの段階に属す資料は6点に留まる。出土遺物も集中せず、詳細は明らかではない。

・B期（弥生時代後期～古墳時代前期）

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、09A区以南、特に08区を中心に分布する竪穴建物で構成される居住域を確認している。ここでは出土遺物や重複関係をもとに4段階に区分するが、帰属時期が判明する遺構は、08区の東壁付近と09A区にほぼ限定されてしまう。このため分布上の特色は指摘できる状況ではない。

・C期（古墳時代終末期～奈良・平安時代）

明確な遺構が乏しいが、まずは10A区からは土坑などが南側の比較的狭い範囲に分布する傾向に注意したい。10A区からは竪穴建物が重複して4軒検出されている。出土遺物は確認できず、帰属時期は不明確となるが、10A区の出土遺物は古墳時代終末期に属するものが多い。根拠が希薄であるが、竪穴建物もこの段階に属するものと理解しておく。

また、各調査区の須恵器の出土破片数を数えると、08区から得られた破片数は約300点を数える。ほとんどが甕の体部片で、個体数を表現しない可能性もあるが、他の調査区の破片数が十数点となるのに対して圧倒的とも言える。次に08区内の須恵器の分布に注目すると、南側の大規模な攪乱坑の北側に集中する。明瞭な遺構は検出されていないが、注意しておきたい。一方、すぐ西側に位置する10Ca区・10Cb区や10D区では、当該期の遺構や須恵器の分布は目立った状況ではない。こうした状況から08区でも比較的狭い範囲に当該期の遺物が集中していた可能性が強い。なお、10A区の遺構が7世紀頃と考えられるのに対し、08区の出土遺物は8世紀に重心がある。一応、前者をC—1期（7世紀後半）、後者をC—2期（8世紀頃）と区分するが、今回の調査ではC—2期に属する明瞭な遺構を確認していない。

・D期（平安時代末～中・近世）

検出できた遺構は基本的には江戸時代以降となるが、山茶碗などの灰釉系陶器が調査区全域に散在している。また、08区ではこの段階に属する土師器の分布が特徴的となる。遺構として捉えたのは452SUのみであるが、一応この段階をD—1期（中世前期）とする。

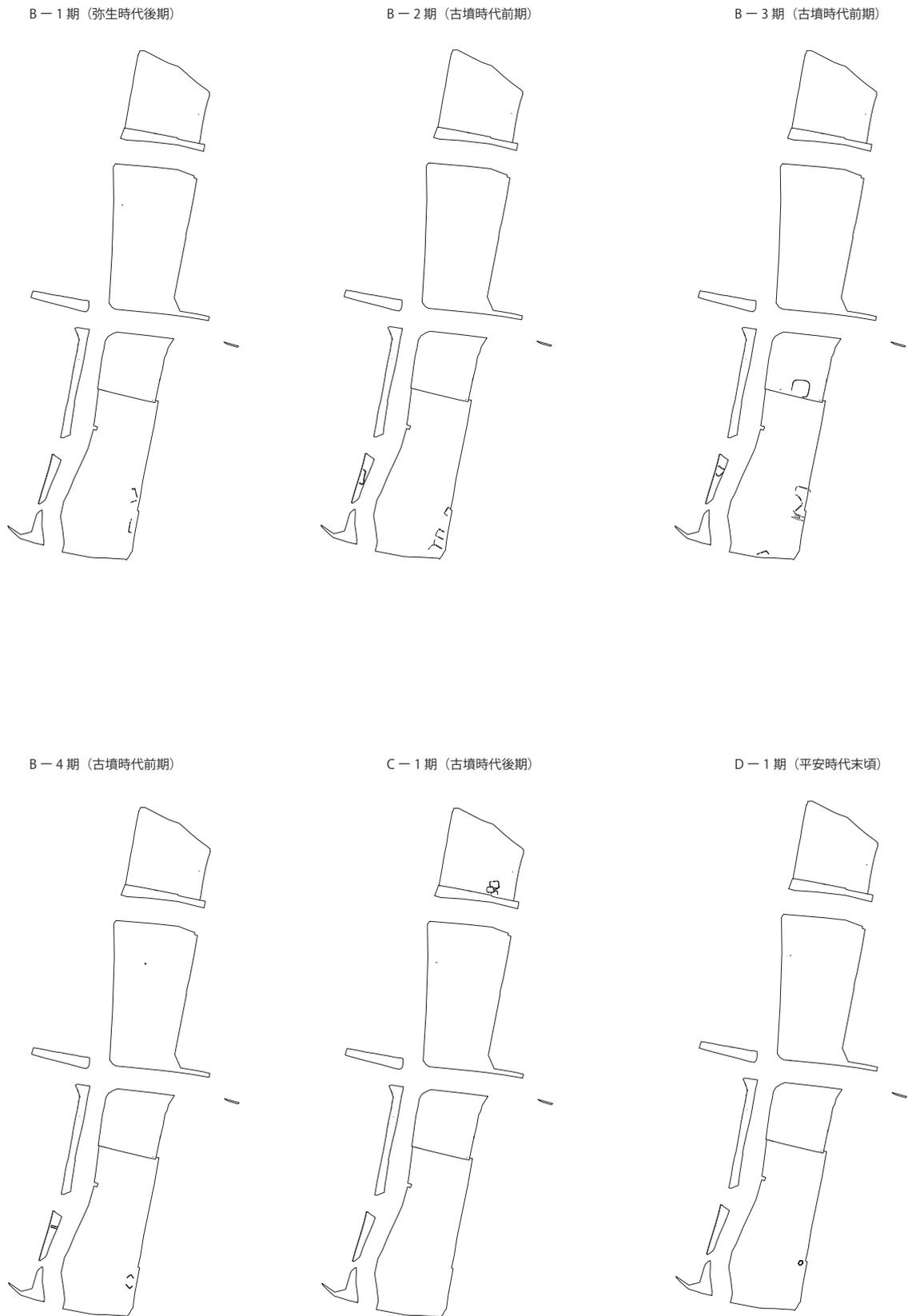
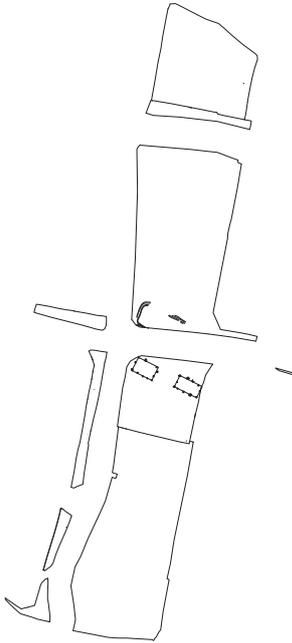
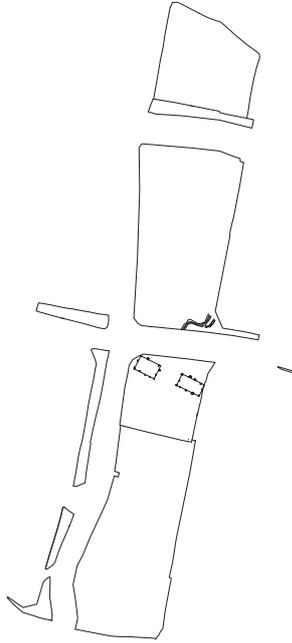


図 36 主要遺構の変遷1 1:2,000

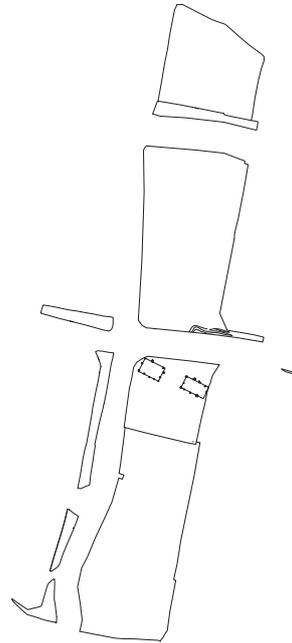
D-2a 期 (戦国時代～江戸時代)



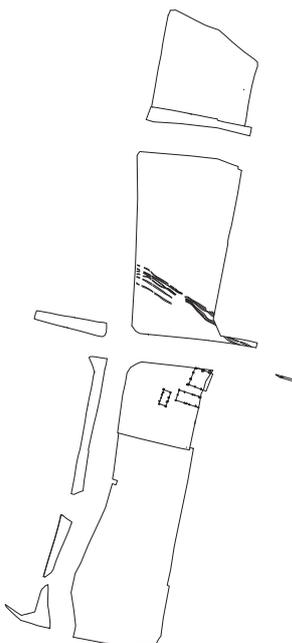
D 期-2b (戦国時代～江戸時代)



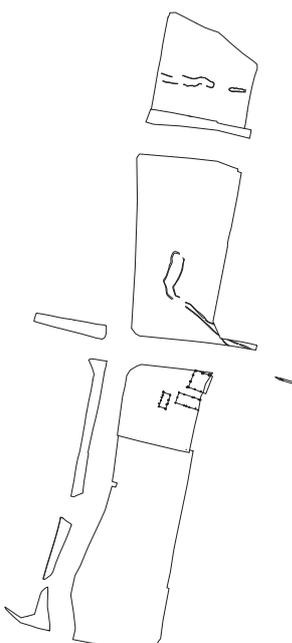
D 期-2c (戦国時代～江戸時代)



D-3a 期 (江戸時代)



D-3b 期 (江戸時代)



D-4 期 (江戸時代)

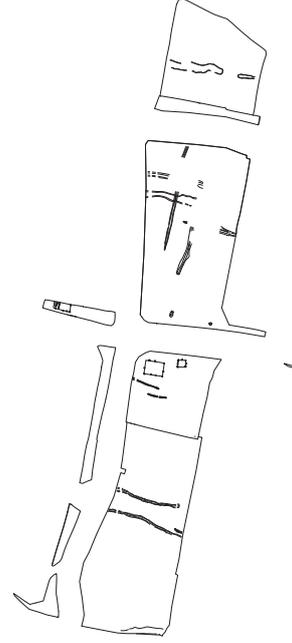


図 37 主要遺構の変遷2 1:2,000



図 38 周辺の地籍図 1

近世に入ると特に09B区で溝による区画が発達し、09A区では柱穴と考えられる小土坑が集中するが、いずれの遺構も出土遺物が乏しく次期決定の明確な根拠を欠く。一方、遺構の主軸に着眼すると、やや東に傾く遺構と大きく東に傾く遺構とに大別できる。

これらを時期差と仮定できるのであれば、09B区で前者の226SDが後者の069SDを切り、前者が後出である事が想定できる。ここではこの状況に注目し、主軸が大きく東に傾く一群をD—2期とD—3期、これがやや東となる一群をD—4期と区分している。

次に、D—2期とD—3期の遺構は、溝の前後関係と規模により区分した。D—2期は09B区南側で確認された屈曲するやや小規模な溝が特徴的となる。遺構の配置と重複関係から、051SD・121SD→221SD・300SD・301SD→182SDと変遷が想定でき、それぞれD—2a期、D—2b期、D—2c期とする。次にD—3期であるが、二段階に細分する。前者のD—3a期はやはり09B区南側に011SD・042SD・069SD・220SD等のほぼ同一方向の溝が近接して掘削される段階。後者のD—3b期は、D—3a期とした011SD・069SD等を切る043SDや120SDが掘削される段階とする。

D—4期は主軸がやや東に傾く遺構群で、調査区全域で確認できる。09B区北側では060SDと150SDが重複しており、細分できるのかもしれないが、ここでは一括して扱う。

次に09A区・10B区で確認されている掘立柱建物だが、いずれもD期に含まれる可能性が高い。時期別の変遷はやはり不明確だが、一応の案を提示しておきたい。

まず、09A区で柱穴の切り合いに着眼すると、342SBを切る341SBと343SBは主軸も類似している。またこれらと近接し主軸が類似する340SBにも注目し、340SB・341SB・343SBを同一グループに含めて考えたい。なお、343SBの柱穴となる023SKからは近世に属する土師器皿(120)も出土している。

次に、342SBは344SBと近接し主軸も類似しており、同一グループとする。

また、345SBは344SBと柱穴は切り合わないが重複する。主軸に近い339SBと10B区の078SBを同一グループとする。

以上の状況を、上記した溝による区分にやや強引に当てはめると、まず主軸の類似から09A区342SB・344SBと10B区078SBのグループをD—4期とする。次に、柱穴の前後関係から09A区342SB・344SB→09A区340SB・341SB・343SBの変遷が考えられるが、前者のグループとなる342SBの柱穴270SKからは天目茶碗の底部片(121)が出土し、後者のグループとなる、343SBの柱穴となる023SKからは近世に属する土師器皿(120)も出土している。後者のグループの土師器皿はほぼ全形を留める資料で、形状の特徴からこれを近世まで下げることができる。前者のグループの天目茶碗は大窯2期とやや遡る。断片的な情報しか得られてはいないが、ここでは一応、09A区の342SB・344SBをD—2期、09A区の340SB・341SB・343SBをD—3a期、D—3b期のいずれかと考えておく。

記述が煩雑となったので以下に整理する。

まず、D—2期は09B区で051SD・121SD→221SD・300SD・301SD→182SDと変遷が想定でき、それぞれD—2a期、D—2b期、D—2c期と区分する。いずれの段階かは明らかにできないが、09A区342SB・344SBの掘立柱建物が伴うものと考えておく。出土遺物から16～17世紀以前と想定できる。

次に、D—3期は011SD・042SD・069SD・220SD→043SD・120SDと変遷が想定でき、それぞれD—3a期、D—3b期と区分する。いずれの段階かは明らかにできないが、09A区340SB・341SB・343SBの掘立柱建物が伴うものと考えておく。出土遺物から17世紀末～18世紀前半頃と想定できる。

また、D—4期は09B区南側以外の調査区のほぼ全域に溝が掘削される段階で、まず主軸の類似から09A区342SB・344SBと10B区078SBの掘立柱建物が伴うものと考えておく。出土遺物から19世紀頃と想定できる。

2 総括

以上、今回検出した遺構を不明確ながらも12期に区分した。ここでは、周辺の状況等と比較して各時期の様相を整理して調査のまとめとしたい。

・A期（縄文時代）

前述の様に、わずかな遺物が確認されているにすぎず、詳細は明らかではない。

東屋敷遺の位置する神田川と三輪川に挟まれた地域で縄文時代の遺跡を探すと、多り畑遺跡（縄文早期・後期）・神ヶ谷遺跡（帰属時期不明）などが知られている。こうした遺跡に関連して、今回の調査区内でも当該期に何らかの土地利用がなされた事も想定できる。

・B期（弥生時代終末期～古墳時代前期）

現状では堅穴建物のみで構成される。三輪川に向けた緩斜面に展開する環濠を持たない集落であった可能性が高い。環濠や墓域などは確認されていない。なお、三輪川を挟んだ対岸の西浦遺跡（鈴木他2011）からも同時期の遺構・遺物が確認されており関連が想定される。

なお、09B区からはB—4期に属する多量の土器が出土した222SKが確認されている。性格は明らかにはできないが、B期の遺構・遺物がこの他にはほとんど確認されていない状況と対比的となる。

・C期（古墳時代終末期～奈良・平安時代）

B期の遺構が三輪川に面した緩斜面上を中心としたのに対して、C期では比較的狭い範囲に遺構もしくは遺物が確認できる。

まず、C—1期（7世紀後半）では10A区から遺構・遺物が若干確認されている。10A区の北側には神田川に向けて流れる小河川が存在するが、この小河川の南側緩斜面に広がりを持つのかもしれない。なお、108SI・167SI・168SI・169SIを、当該期の堅穴建物と認識する事が許されるのであれば、この範囲に居住域が展開していた事となる。

C—2期（8世紀頃）では、明確な遺構は確認していない。しかし、当該期の遺物が08区でも比較的狭い範囲に集中する傾向にあるため、遺構形成も断片的なものであった可能性が高い。

・D期（平安時代末～中・近世）

こうした状況はD—1期（中世前期）に入っても同様となる。D—1期では、08区を中心に土師器が分布する。452SUを検出したのみで明瞭な遺構を確認していない。ところで、当該期の出土遺物はいわゆる山茶碗が主体で構成されるのが通例で、土師器が集中するのは特殊な状況とも言える。通常とはやや異なった土地利用がなされたのかもしれない。

次のD—2～4期では、調査区のほぼ全域に溝による地割りが確認できる。ここでは09B区南側で顕著となる溝の主軸の差を時期差と仮定して、これらを大まかに三段階に区分した試案を提示した。なお、09A区の北側には掘立柱建物が存在し、屋敷地が形成される。

ここで、図38に示す周辺の地籍図（地籍帳八名郡玉川村 明治17（1884）年）に着眼すると、D—2期とD—3期にみられる主軸方向と類似した区割りが観察できる。特に、篋矢神社北西に位置する宅地の北東境（1）は、09B区の011SD・042SD・043SD・069SD・120SD・220SDなどD—2・3期の溝とほぼ重なる位置となる。また、10A区のさらに北側の、神田川に向けて流れる小河川およびこの周囲に展開する水田（2）とも方位はほぼ一致しているが、篋野神社の東側の南北方向の道（D—4期

類似)より西側ではこれが不明確となる。

なお、主軸がやや東に傾く一群をD—4期としたが、これらは篋矢神社西側の区画や拝殿脇から東に伸びる道と一致する他、D—3期の遺構群よりも広い範囲で観察できる軸線となっている。なお、08区036SDや106SDは篋矢神社拝殿脇から東に伸びる道(3)とほぼ一致した場所に位置している。そして、(1)・(2)の区画よりも(3)の区画がより広域となる状況が想定できる(図39)。D—3期を17世紀末～18世紀前半頃、D—4期を19世紀頃とした場合、範囲の差が年代差である可能性が強い。

東屋敷遺跡の位置する地域は、江戸時代頃は神ヶ谷村と呼ばれていたが、17世紀後半に隣接する牛川村と地境論争を起こしている。この論争は吉田藩により裁定が下され、延宝8(1680)年には結果を記録した絵図面も作製されている(佐野 1976)。

こうした状況にみられるように、神ヶ谷村外縁部では地境論争前後に開発が活発化していた事がうかがえるが、これには集落近隣の再編成も伴っていた事は想像に難くない。延宝8(1680)年は今回の調査区ではD—3期の初期となるが、D—2期からD—3期への変遷のみならず、D—3期からD—4期への変遷も、こうした動きに関連した可能性も考えられる。

以上、今回の調査で検出できた遺構の変遷案をまとめた。調査区内では弥生時代後期から江戸時代に至るまで、幾度かの断絶を繰り返しながら遺構の形成が繰り返された事が考えられる。

何度も記述している様に、今回の調査区は出土遺物も乏しく、検出された遺構も上部が削平されたり攪乱により大きく抉られたりしており、大きな制約が存在していた。周辺部の調査を待っての再検討が必要である事も記しておきたい。

(池本正明)



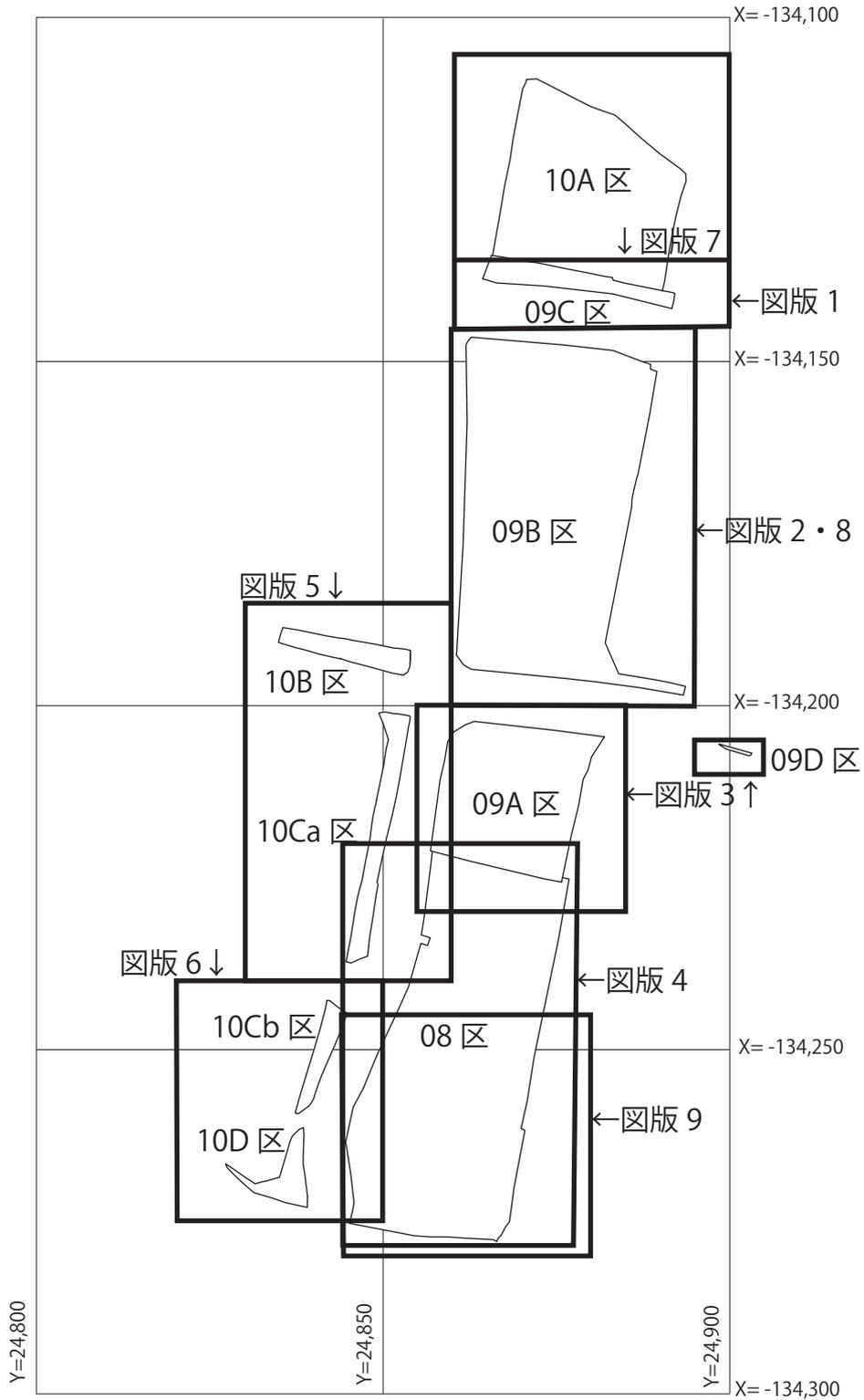


※は笹矢神社、調査区はその東側

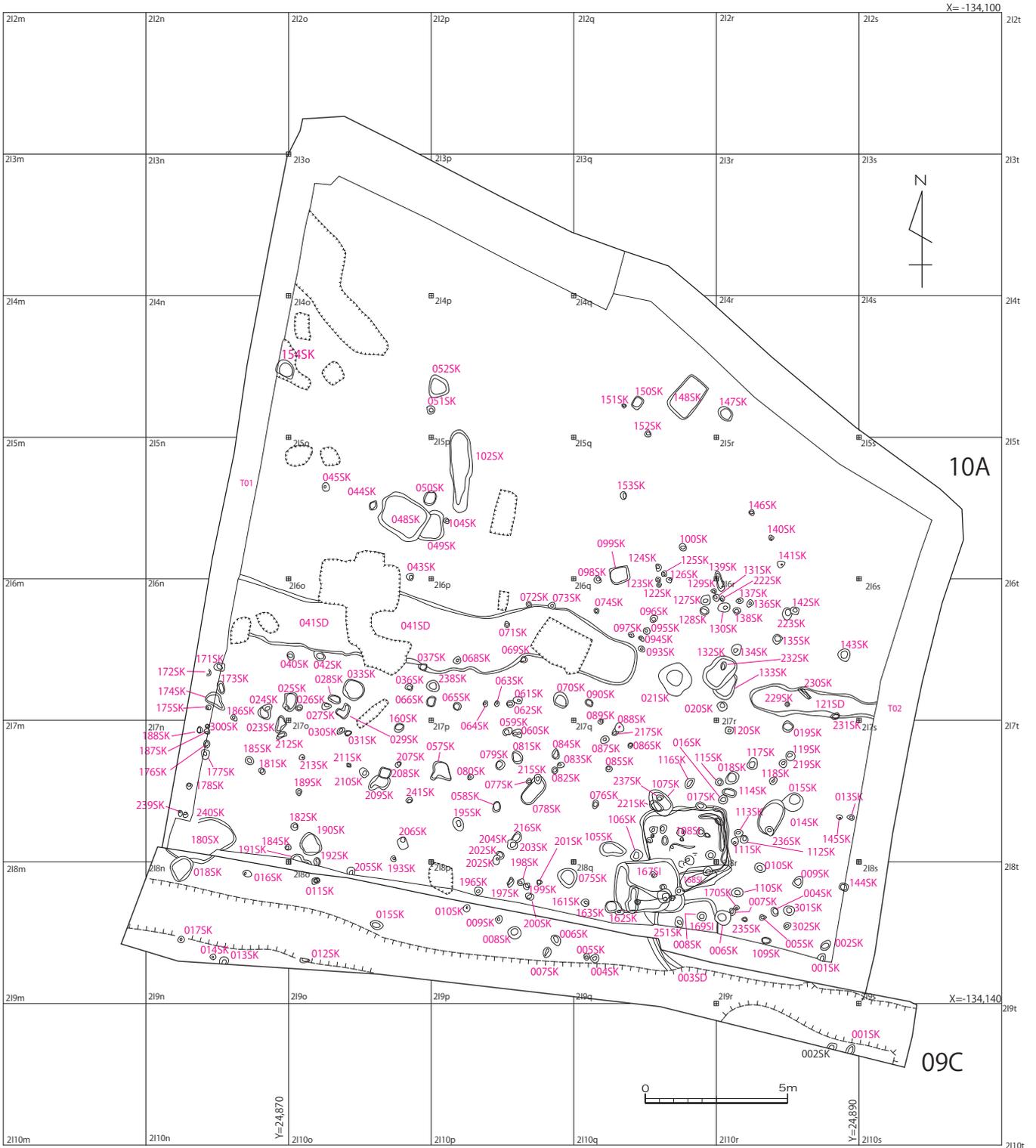
図 39 周辺の地籍図 2

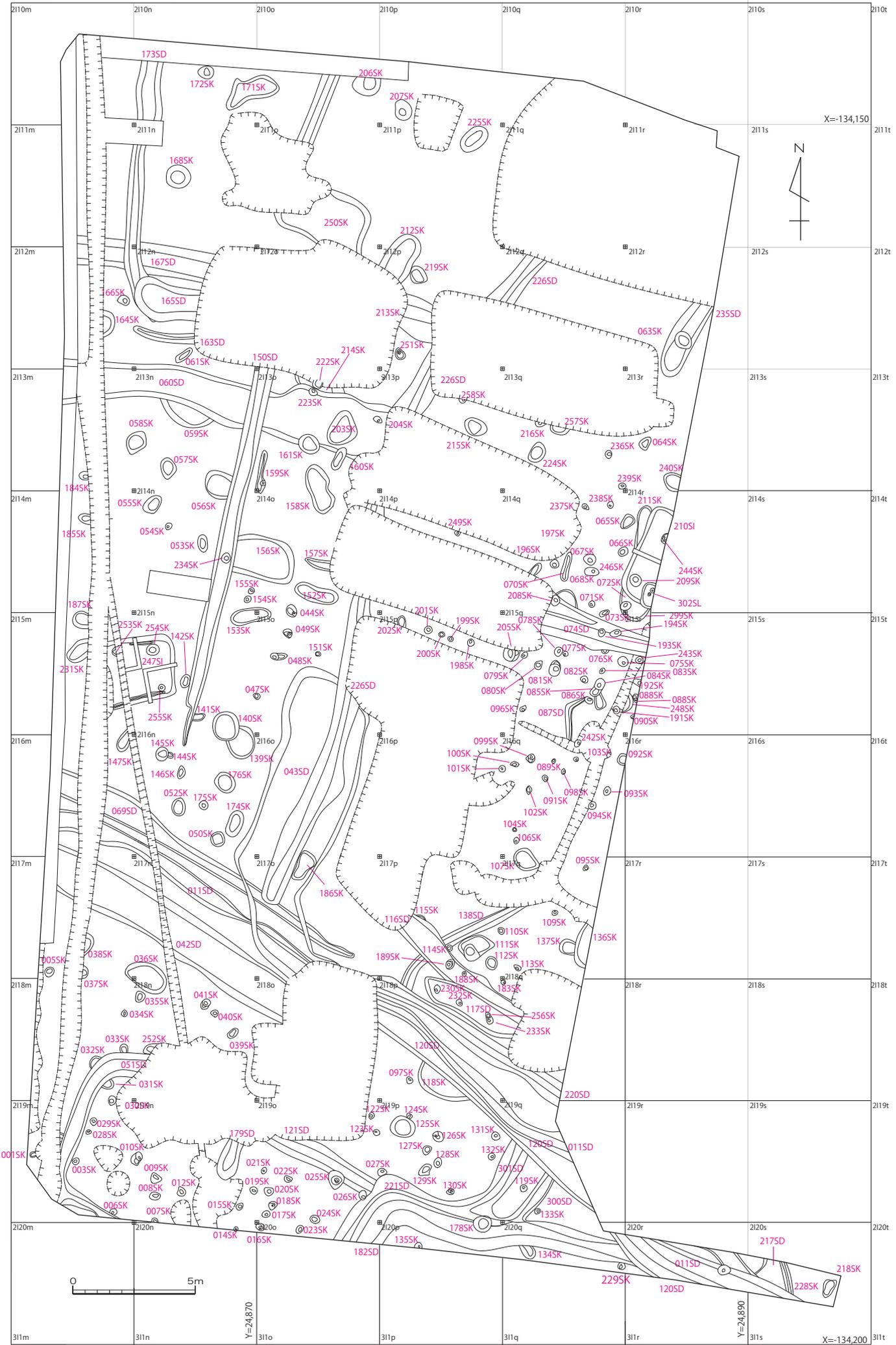


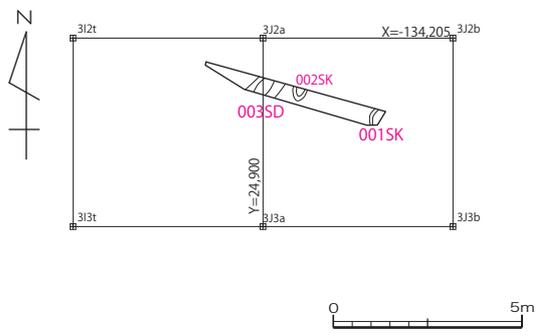
図版



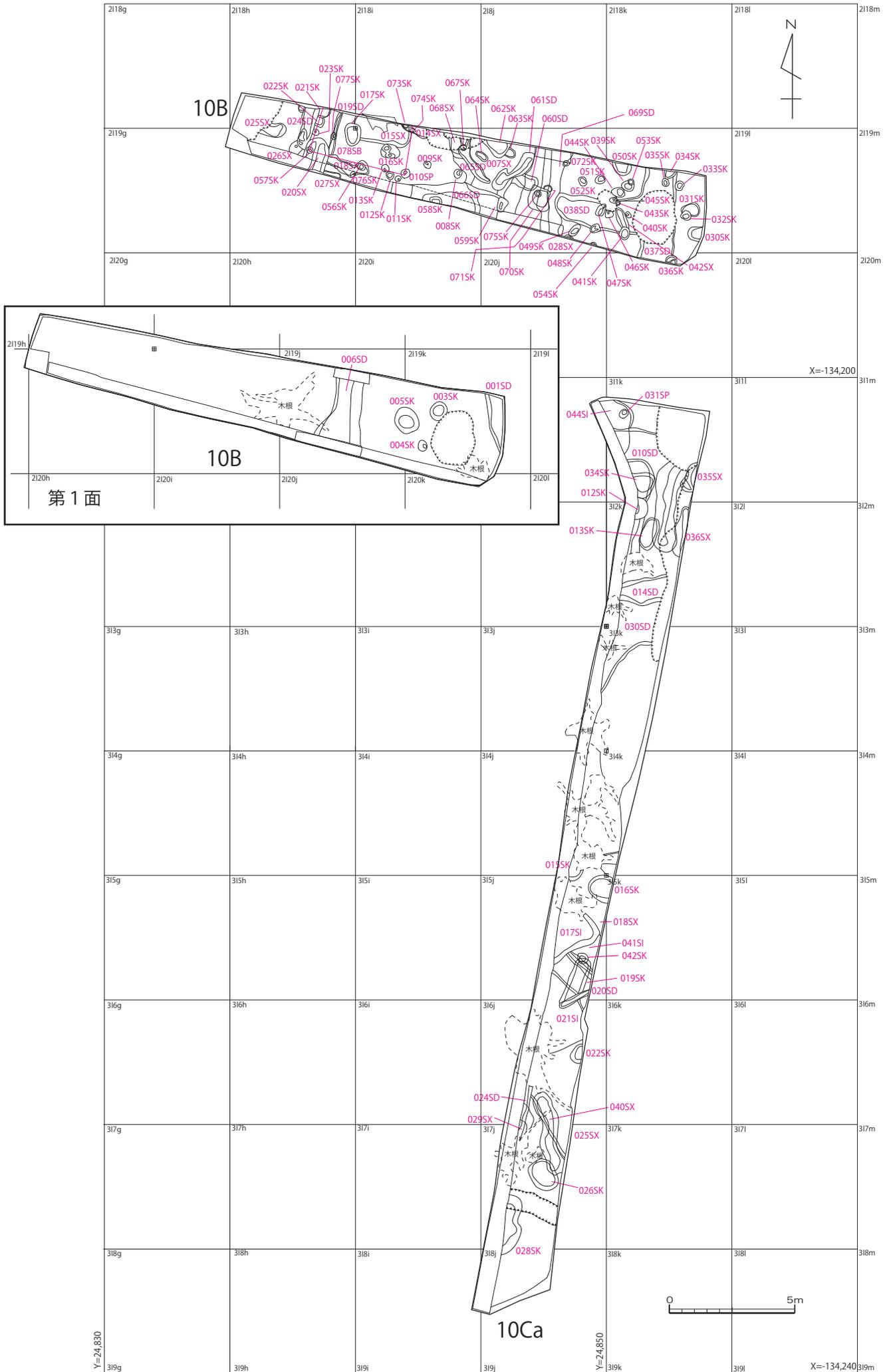
図版 1 10A区・09C区上面 1:200

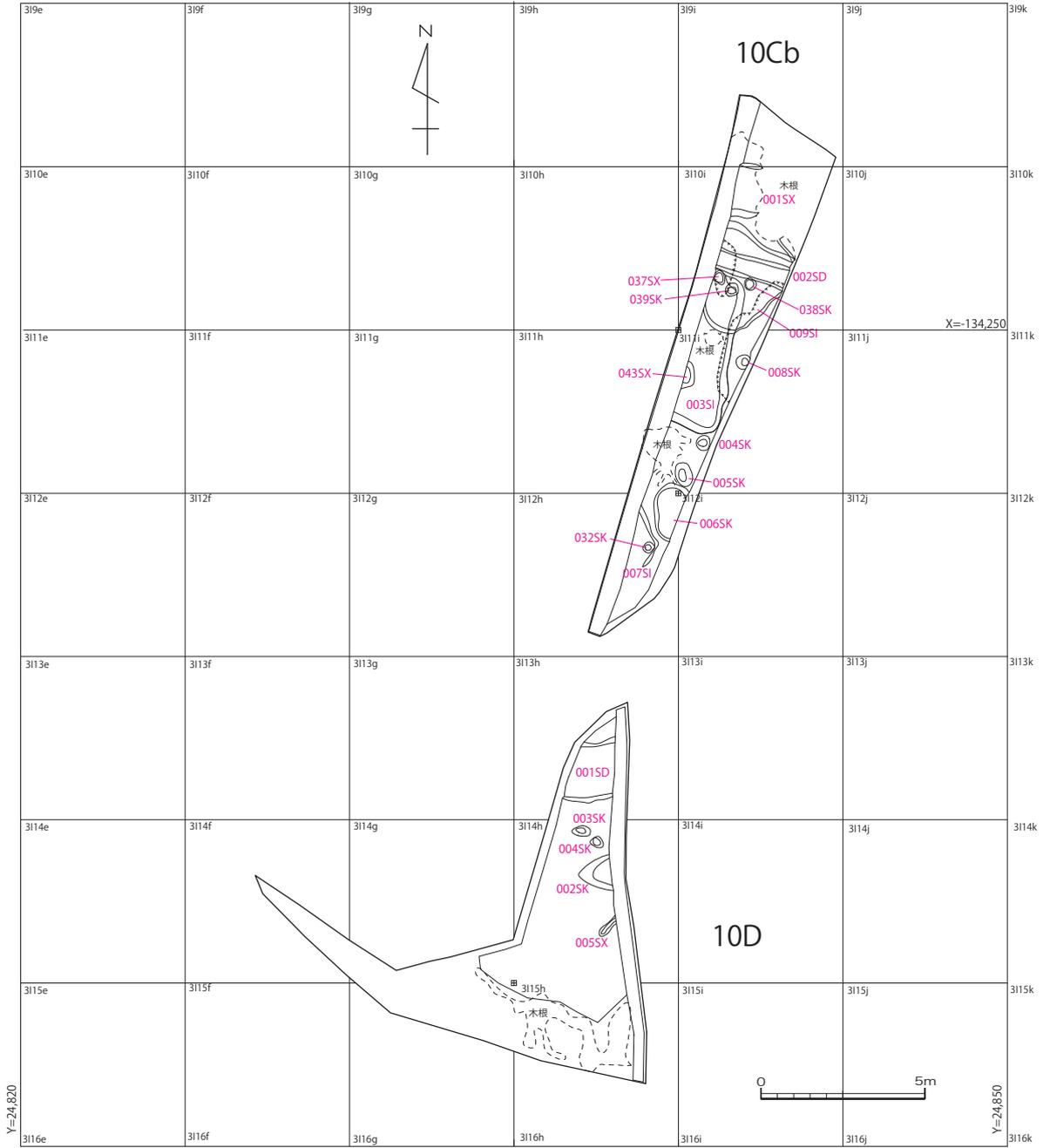






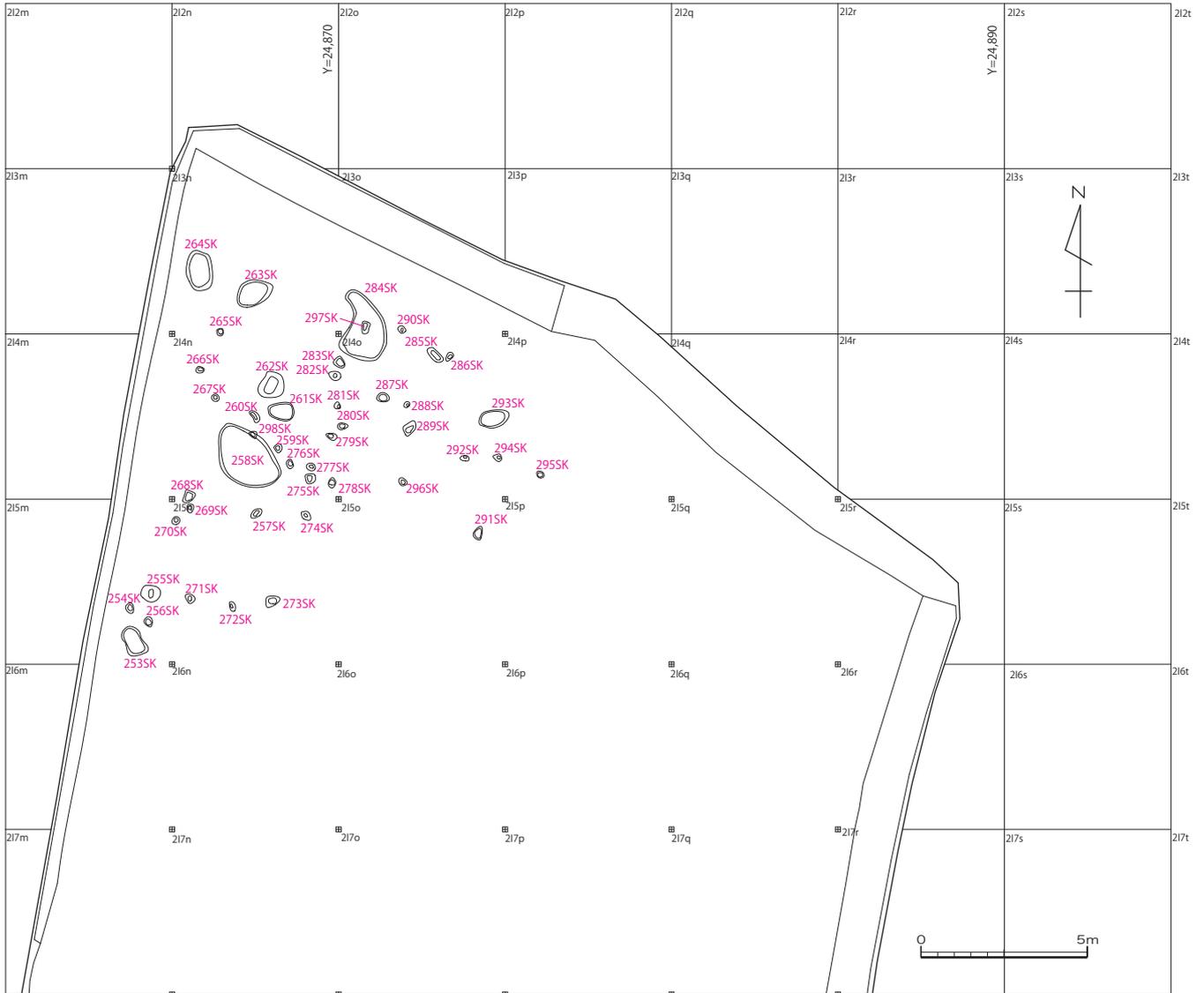
図版 5 10B区・10Ca区上面 1:200





図版 7 10A区下面 1:200

X=-134,100

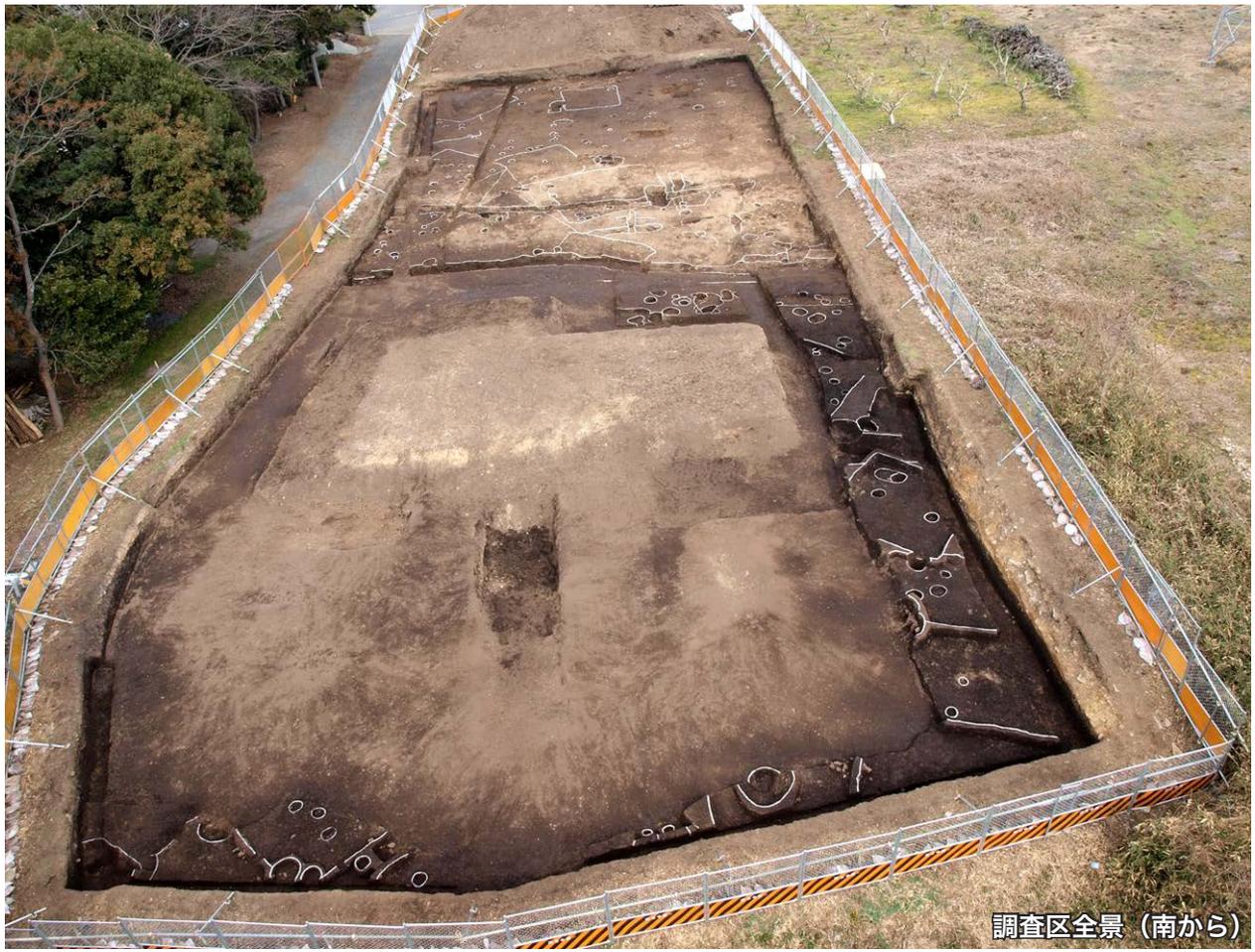




遺跡遠景（北から）



遺跡遠景（南から）







045SL 断面 (南から)



045SL (北から)



036・106SD (東から)



036SD (西から)



033SK 出土状況 (南から)



紡錘車出土状況 (南から)



550SK 出土状況 (北から)



180SD 出土状況 (西から)

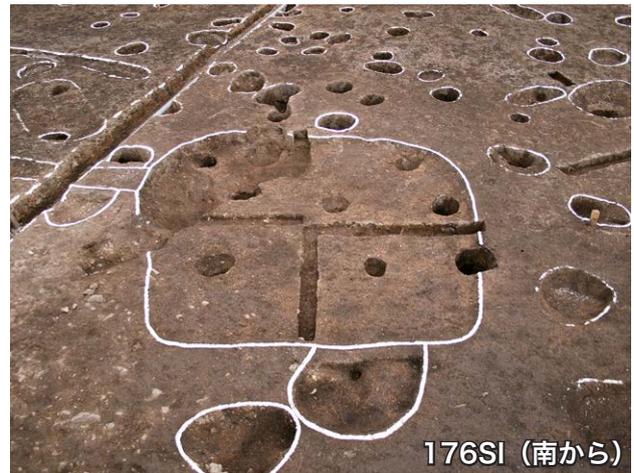
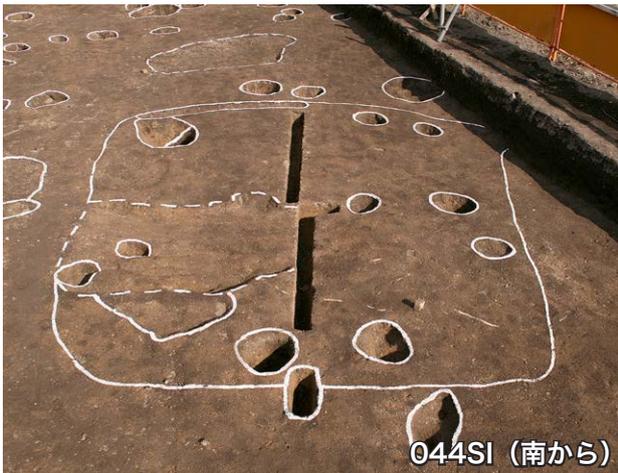


調査区南側（南から）



調査区北側（東から）







調査区遠景 (西から)



調査区全景 (西から)



調査区全景 (南から)



調査区南側 (西から)











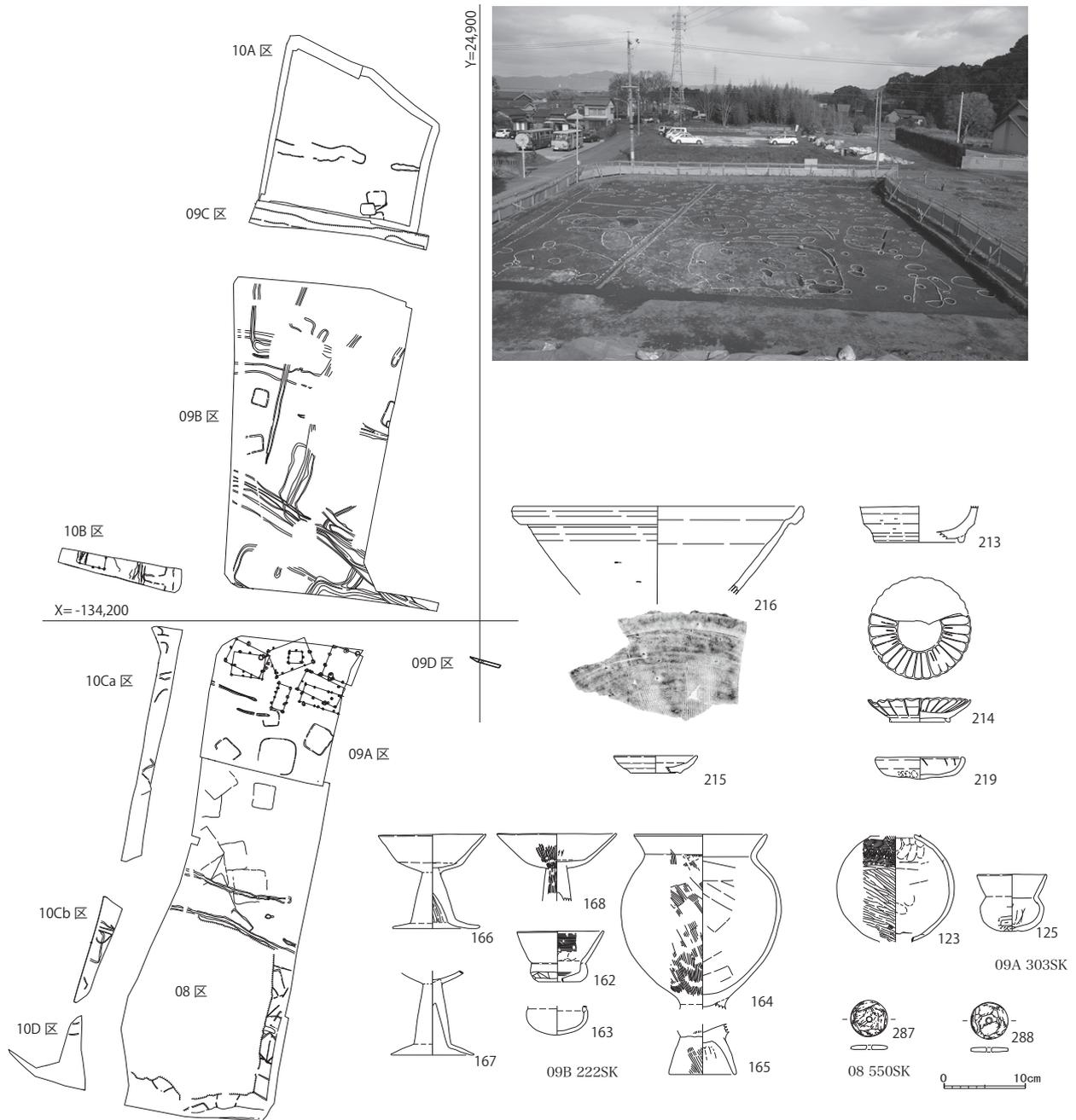


要 約

東屋敷遺跡は、愛知県豊橋市石巻本町字東屋敷に所在し、地形的には石巻山の西麓の三輪川右岸の河岸段丘南縁部に立地している。

発掘調査は愛知県道路建設課による「道路改良工事（主）東三河環状線」に伴うもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。総面積 4,420㎡で、調査期間は平成 20 年度～平成 22 年度である。

検出できた主な遺構は各時期に及ぶが、弥生時代後期～古墳時代前期と近世にまとまりが確認できた。前者は段丘端部付近に集中する弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物群で、後者は調査区全域に広がる溝による区画と、区画中に展開する遺構群で構成されている。



報告書抄録

ふりがな	ひがしやしきいせき							
書名	東屋敷遺跡							
副書名								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第 185 集							
編著者名	池本正明・鬼頭 剛・本田英貴							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-2 TEL 0567-67-4163							
発行年月日	西暦 2014 年 3 月 31 日							
収蔵遺跡名	所在	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしやしきいせき 東屋敷遺跡	とよほししいしまきほんまち 豊橋市石巻本町 あざひがしやしき 字 東屋敷	23210	790333	34° 47' 22"	137° 26' 15"	2008.11 ~ 2009.3 2009.10 ~ 2010.3 2010.5 ~ 2010.8	1050㎡ 2060㎡ 1310㎡ (4420㎡)	道路改良工事 (主)東三河環状線
文書番号	発掘届出 (20 埋セ 85 20.11.21・21 埋セ 43 21.8.4・22 埋セ 18 22.4.16) 通知 (20 教生 2118 20.12.9・21 教生 1059 21.8.14・22 教生 245 22.4.26) 終了届・保管証 (20 埋セ 120 21.3.17・21 埋セ 144 22.3.24・22 埋セ 130 22.8.4) 監査結果通知 (20 豊美 587 21.3.23・21 豊美 618 22.3.30・22 豊美 210 22.8.9)							
収蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ひがしやしきいせき 東屋敷遺跡	集落	弥生時代終末期 ～ 古墳時代 中・近世	竪穴建物、土坑 掘立柱建物・溝・土坑	弥生土器・土師器 石製紡錘車 中近世陶磁器				
要約	弥生時代では台地の縁辺部に竪穴建物が集中している様子を確認できた。中・近世では溝による区画が確認でき、区画の中には柱穴と考えられる小土坑が集中している区画も確認できる。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第185集

東屋敷遺跡

2014年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社

